
GAME NOVELS
FINAL FANTASY® IV
ファイナルファンタジーIV
上巻
手塚一郎
イラスト:オグロアキラ
原案・監修:時田貴司
SQUARE ENIX

GAME NOVELS

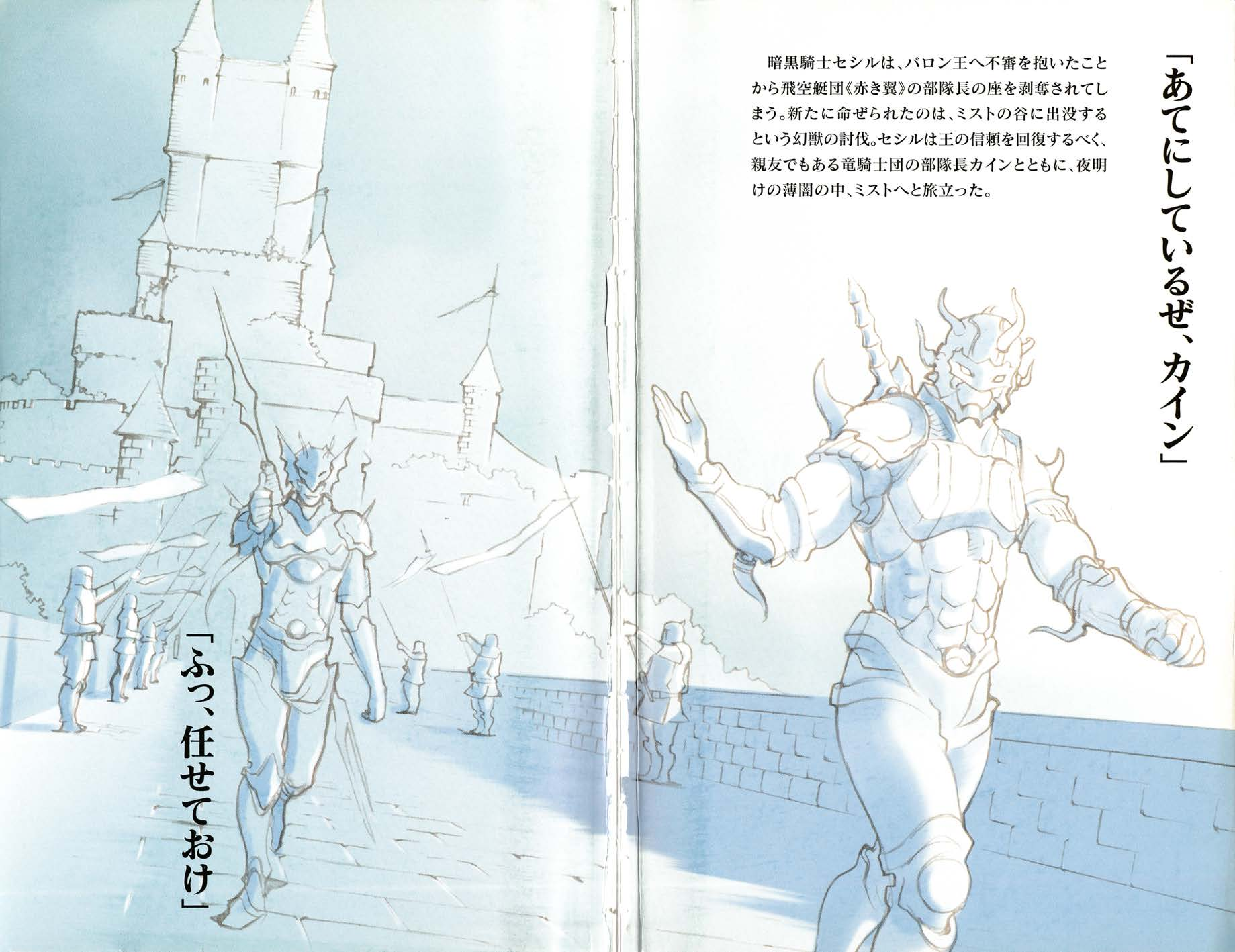


FINAL FANTASY® IV

ファイナルファンタジーⅣ

上巻

手塚一郎



暗黒騎士セシルは、バロン王へ不審を抱いたことから飛空艇団《赤き翼》の部隊長の座を剥奪されてしまう。新たに命ぜられたのは、ミストの谷に出没するという幻獣の討伐。セシルは王の信頼を回復するべく、親友でもある竜騎士団の部隊長カインとともに、夜明けの薄闇の中、ミストへと旅立った。

“風のクリスタル”を守るべくファブールへ急ぐ一行。その前にそびえ立つホブス山は、ぶ厚い氷に閉ざされ、何人の往来も拒んでいた。白魔道士ローザは、黒魔法を操る少女リディアに氷を溶かすよう懇願する。だが少女は、故郷の村を焼き払われた過去から、炎の魔法に恐怖と嫌悪を感じていた――。



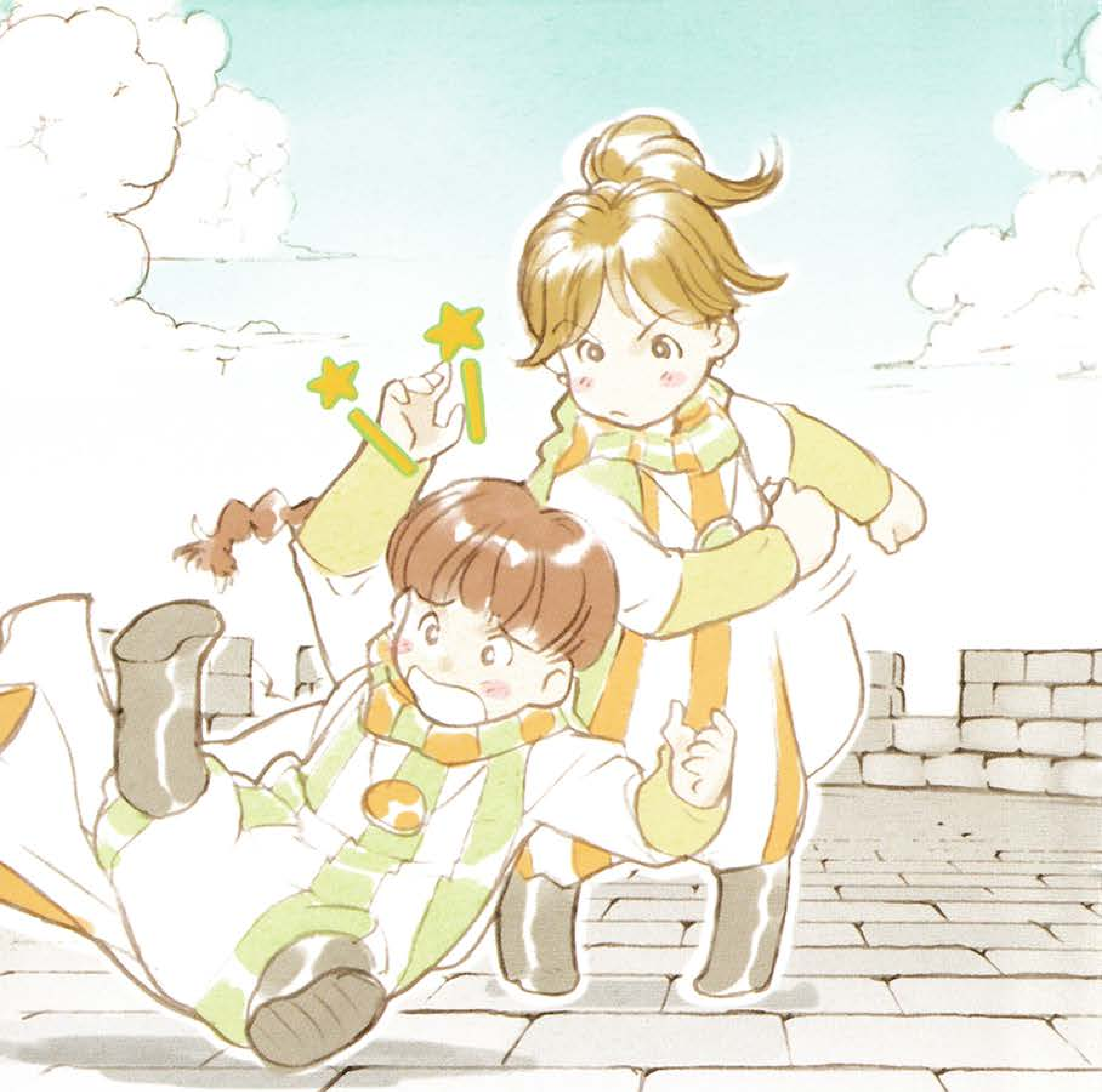
「お願い、リディア。勇気を出して」



「火は嫌い。火は、あたしの村を――」

ダムシアンの王子ギルバートは身分を隠し、吟遊詩人として各地を放浪していた。そんな折り、砂漠の村カイポで出会った娘アンナと恋に落ちる。彼女と一緒になる許しを得ようと、アンナの父テラのもとへ向かう。だがテラは賢者にして希代の頑固者。ギルバートの言葉に聞く耳を持とうともしない。

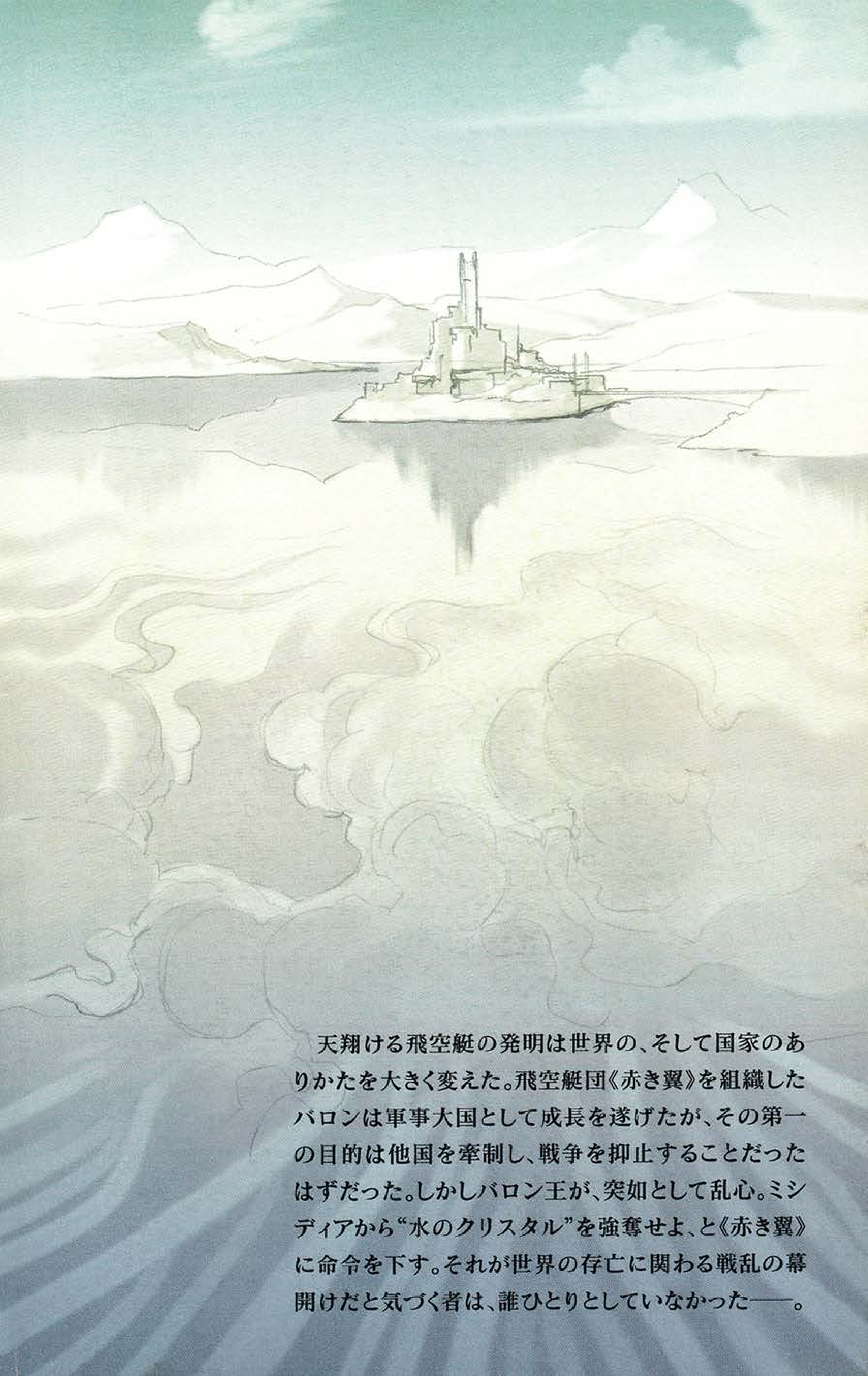




「こら、調子に乗らないの！」

「いててて……」

姉のポロムと弟のパロムは、双子でありながらその性格は正反対。怖いもの知らずでお調子者のパロムに対し、ポロムは礼儀正しく、弟の保護者ともいうべき立場にあった。わずか五歳にして天才魔道士の名をほしいままにするふたりは、セシルと出会ったことで世界を揺るがす大戦に巻きこまれてゆく。



天翔ける飛空艇の発明は世界の、そして国家のありかたを大きく変えた。飛空艇団《赤き翼》を組織したバロンは軍事大国として成長を遂げたが、その第一の目的は他国を牽制し、戦争を抑止することだったはずだった。しかしバロン王が、突如として乱心。ミシディアから“水のクリスタル”を強奪せよ、と《赤き翼》に命令を下す。それが世界の存亡に関わる戦乱の幕開けだと気づく者は、誰ひとりとしていなかった——。

GAME NOVELS

FINAL FANTASY IV

ファイナルファンタジーIV

上巻

CONTENTS

カバー・口絵・本文イラスト／オグロアキラ
カバー・表紙・帯・目次・章扉デザイン／渡辺宏一

序　章



FINAL FANTASY. IV
ファイナルファンタジーIV

青みを帯びた甲冑が、闇に呑みこまれようとしていた。
――今宵は新月。
見上げれば、暗天に星々が不安げに瞬いている。
耳を澄ませても、背後の宴の声はここまで届いてこない。
その静寂を乱すことを恐れる様子もなく、男は城門を目指していた。
その迷いのない足取りが止まったのは、城門の前。
固く閉ざされた門扉の守るふたりの衛兵の姿があった。
彼らは男の姿を認めるや、互いに顔を見合わせたあとで、いぶかしげに眉根を寄せた。
「このような夜更けに――」
そこで言葉を切ったのは、どのように尋ねれば礼を失することがないのか思い当たらなかったからなのだろう。姿勢を正し、ただ男からの返答を待つ。
ややあってから、
「お前たちこそ、どうなのだ」
竜の頭部を模した兜の奥から男が訊いた。いかつい外見とは裏腹に、物静かな、やわらかみのある声だった。「宴の盛りは、まだ過ぎておらぬぞ」
衛兵たちは、言われた意味が理解できなかったのか、再び顔を見合わせる。
男が笑った。

「まさか、こんな晩に城の警備を命じられたわけではあるまい」
　言われて衛兵のふたりは、さらに背筋を伸ばした。
「いえ、自分たちはみずからの判断で持ち場についております。このようなときだからこそ、より一層、気を引きしめねばならないと考えます」
「衛兵の鏡だな。セシルも幸せ者だ」
　何かをおもしろがるような男の口調が、そこで一変した。「だが、すべては終わった。あの悪夢のような戦乱は終結したのだ」
　重い声だった。
　衛兵たちは直立不動を守り、言葉を控えている。
　男の言葉の真意を測りかねているといった表情だ。
「この平和が永遠につづくかは、誰にもわからない。しかし未来に怯えるばかりに、今この瞬間を浪費しては生きる意味などなかろう」
　ふたりの衛兵の視線が、足元に落ちた。
　それが彼らの本心なのだろう。
「自分たちの守るべきものの素晴らしさを味わって来い。これは命令だ」
　男が微笑みかけたのが、きっかけとなった。
「ありがとうございます」

衛兵たちは頭を下げるや、弾かれたように城を目指して走りはじめる。
小さくなってゆくそのふたつの背を振り返ることなく、男は静かに目を閉じた。
脳裏をよぎるのは、幼少時からこれまでの記憶の断片。
そのどれもが胸をしめつける。
もしも、あのとき――
そう思わずにはいられない。
積み重ねてきた過去の一部が違っていれば、自分も笑顔であの宴の席に加わることができたのだろうか。ふと、そんなことを考えてしまう。
わかっている。
しかし、それは叶わぬ望みだ。今となっては。
目を開く。
薄闇の中に、城と外界とを隔てる巨大な門が浮かび上がった。
慣れた手つきでかんぬきをはずすと、押し当てた掌に力をこめた。
魔物の断末魔の悲鳴にも似た音を立てながら、門がゆっくりと開いてゆく。
眼前に濃密な闇が広がった。
まるで暗がりが、自分を誘っているかのような錯覚に陥る。
何も見えず、また誰からも見られることのない闇。

自分に相応しい場所のように思えてくる。
名を呼ばれたのは、男がその闇に向かって足を踏み出そうとした瞬間だった。
「カイン、どうして――」
涙に滲んだ女の声を耳にし、男――カインは反射的に立ち止まってしまった。
声の主を振り返り、抱きしめたい衝動に駆られる。
しかし両の拳を固く握り、かろうじてその誘惑に打ち勝った。
「聞いたわ。あなたが、セシルを次期国王に推してくれたと」
女の声が、ゆっくりと近づいてくる。「反対する者は誰ひとりとしていなかった」今や、すぐ背後から聞こえた。「それなのに、どうして」囁くような口調となったのは、溢れ出す涙と湧き上がる感情をこらえているからなのだろうか。
男は答えなかった。
「――なぜ、あなたが城を出てゆかなくてはならないの」
沈黙。
「こっちを見て。お願い」
衣擦れの音。香の匂いが大気に混じっている。
振り返らずともわかった。
彼女はドレスをまとっている。明日の戴冠式、そして婚礼の儀のための。

「あなたに最初に見てほしかったから」
だが男は振り返らない。
「あなたにこそ祝福してほしいの。他の誰からよりも」
それでも男は動かない。
ややあってから、
「俺には、その資格がない」搾り出すようにして言った。
「そんなことはないわ。悪いのは――」
「悪いのは俺だ。俺の心の弱さが、この世を乱した」
「やめて」
女が再び泣きはじめた。
すがるようにして、男の背に自分の頬を押し当てる。
男は甲冑をとおして彼女の温もりを感じた。
「泣いてくれるのか。あれほどのことをした俺のために」
背中に感じる暖かさが、凍てついた過去をやさしく溶かしてくれるような気がした。
そして、その涙の意味を知った。
彼女の瞳から零れ落ちているのは、俺たちの思い出なのだ。
俺とローザ、そしてセシルの三人で過ごした日々。

俺は、これまで〝今〟だけしか見ていなかった。見ようとしなかった。過去を振り返ることなく、未来に想いを馳せることもなく、ただ今という瞬間だけを生きようとしてきた。だが、彼女は違っていたのだ。
今頃になって気づくとは——。
カインは自嘲した。
「花嫁が、こんなところで泣くな」
それでも女は泣きつづける。
大きく息を吐いたあとで、男は言った。
「俺は行かなくてはならない」
「どうして……」
男は答えなかった。
言葉にしたところで理解してもらえるとは思えなかったからだ。
残念ながら俺は、お前の涙に値する男ではない。
だが、それに近づくことはできると思っている。
あてのない旅のつもりだったが、この瞬間、行き先が決まった。
「心配するな。俺は生きる」
生きる——お前の思い出のために。

俺たち三人の大切な過去のために。
その涙に相応しい男になるために。
生きつづけ、光を探し出せれば、やがてバロンへ帰ってこられるだろう。
そのときにこそ、俺の心の闇は溶かされ、お前たちふたりを心から祝福できる。
ふたりを笑顔で見守ることができる。
——そう。
俺は、セシルにはなれないのだ。
しかし、セシルとは違った方法でお前を幸せにすることはできると思う。
そのために——
男は歩きはじめる、果てなき闇の中へ。
求めるのは、光。
背後で女が泣き崩れた。


第1章
FINAL FANTASY. IV

1

「我ら《赤き翼》は、誇り高き飛空艇団。いかに陛下のご命令とはいえ、このような卑劣な略奪行為をするなど、決して許されることではありません」

ビッグスは、セシルに食ってかかった。

同僚であるウェッジらに抱きかかえられるようにして制止されるが、意に介さない。

殴りかからんばかりの勢いだ。相手が《赤き翼》を指揮する隊長セシルだというのに、沸騰した感情を押し隠そうともしなかった。

「ましてや、ミシディアの魔道士たちは無抵抗に等しかった。それなのに、なぜ我々の行ないを非難したというだけで斬り捨てなければならないのです。私は――」

ビッグスがそこで言葉を切ったのは、セシルと視線が合ったからだった。

その目に射すくめられたわけではない。

隊長の双眸に苦悩の色が滲んでいることに気づき、声を失ってしまったのである。

ビッグスの心を炙っていた怒りの炎が、瞬時にしてかき消された。

――そうなのだ。

セシル隊長だって、このようなことは望んでいない。

この場には、任務の成功を喜んでいる者はいないのだ。誰ひとりとして。

ビッグスは顔を伏せると、目を固く閉じ、小さく頭を振った。

先刻の出来事が、生々しく脳裏に蘇る。

ミシディアは、バロンより遥か南東の小さな村。

攻撃に特化した黒魔法と治癒を目的とした白魔法を研究、それらを人々の平和と安全のために役立てようという志の高い者たちが集まる集落である。

大洋によって列強と隔てられた僻地(へきち)に位置するとはいえ、バロンからも才能溢れる若者が派遣され、その研究の成果に与(あずか)るなど、少なからず交流があった。

だからこそ《赤き翼》の隊員たちが、ミシディアの中心部にある祈りの館を訪れても、そのことを気にする者はいなかった。

なのに、そこで俺たちは――――！

事態を呑みこめぬ魔道士たちに刃を突きつけ、宣戦布告した。

彼らの魔力の源とされる〝水のクリスタル〟を手に入れるという、それだけのために。

ビッグスは、怯えた子供が親の顔色を窺うように、顔を上げた。

再びセシルと目が合う。

ふた呼吸ほどの間。

セシルが、面頬を下げる。美しいその面立ちが隠されたことで、彼の全身を包む闇色をした禍々しい甲冑が、かつての威厳を取り戻したかのように見えた。

「クリスタルは、我がバロン国の繁栄のためどうしても必要だ。そしてミシディアの者たちは、クリスタルの秘密を知り過ぎているという。陛下の命令は絶対なのだ」
セシルが言った。
ビッグスは奥歯を強くかんだ。
間違っている。
陛下は、ご乱心なさったのだ。
ビッグスは、声の限りに、そう叫びたかった。
それを察したかのように、セシルがビッグスに背を向ける。
「——陛下の命令は絶対なのだ」
もう一度、くり返した。自分に言い聞かせるような口調で。
それでもビッグスは納得できなかった。
反逆者と罵られても構わない。
それだけの覚悟は、すでにできている。
誇りを捨ててまで生にすがって、いったい何になろう。
ビッグスが《赤き翼》の一員となったのは、もう三年も前のことだ。
バロンきっての技術者であるシドによって造り出された飛空艇は、大空を飛翔する船として戦の在り方を根本的に変え、一躍、軍事大国バロンのシンボルとなった。

国王直属の飛空艇団《赤き翼》が組織されるとの触れが出されるや、多くの兵士たちがこぞって志願したのも当然のことである。

ビッグスも、そのひとりだった。

多くの者たちが天駆ける船への憧憬をその動機としていたのに対し、ビッグスは隊長に任命されたセシルの下で働きたいとの強い想いを胸に抱いていた。

富国のためにと、あえて望まぬ闇を心に受け入れ、暗黒騎士となったセシル。

その自己犠牲もさることながら、孤児という何ら後ろ盾のないところから《赤き翼》の隊長へ成り上がった彼に、ビッグスは己の境遇を重ね、未来に夢を馳せたのだ。

セシルは、ビッグスが想像したとおりの、否、それ以上の人物だった。

ビッグスの出目を知るや、たちまち打ち解け、任務を離れれば互いの立場を忘れ、四つ年下のビッグスを、まるで弟のように可愛がってくれた。

隊長のようになりたいとの夢は、酌み交わされる酒に溶けてゆく。いつしかビッグスは、セシルのために自分に何ができるのかと真剣に考えはじめていた。

それなのに――

俺は、あなたのためならば命を投げ出す覚悟だってできているのに！

陛下は間違っている。

そもそも飛空艇は、戦を抑止するための存在ではなかったのか。

それなのに、なぜ《赤き翼》が一方的な殺戮と略奪のために使われるのか。
陛下は間違っている、明らかに。
身寄りのない自分を引き取り、育ててくれた恩義に報いるため、隊長は陛下の命に盲目的に従っているのかもしれない。
だが、いいのか？　本当に、それでいいのか？
再び、臓腑が煮えたぎるような錯覚を覚える。
「隊長――！」
しかしつづくビッグスの言葉は、別の隊員の悲鳴にも似た叫びにかき消された。
「魔物が来ます！」
飛空艇の甲板に緊張が走る。
右舷に視線を転じると、そこに翼を持った魔物の群れがあった。その数、五体。
隊員たちは一斉に腰の剣を抜き放つと、腰を浅く落とし、身構える。
これは演習などではない。
応戦の気配を感じ取ったのか、魔物たちが縦横に広く展開する。
これで頭上から、そして背後からも襲われる可能性が出てきた。
加えて戦場となるのは、飛空艇の甲板という不安定な足場。
不利な戦況が揃いつつある中、自軍の士気が落ちることを恐れたのか、隊員たちをかき分け、

隊長であるセシルが最前線に立った。
　雲ひとつない空の青に、漆黒の甲冑が映える。
　魔物にとって、それは格好の的だといえただろう。
「無茶です！」
　後方に展開していたビッグスが、力の限り甲板を蹴った。
　セシルへの怒りを置き去りにし、援護へと駆けつける。
　その間、わずかふた呼吸ほど。
　しかしビッグスが、彼のかたわらへと到着する前に勝負は決していた。
　セシルが音もなく抜刀。陽光の下にあってもなお黒いその刃が、一切の迷いを感じさせない軌跡を描き、五体の魔物を一瞬にして葬り去ったのだ。
　立ち止まったビッグスは、兄と慕う男の大きな背中をただ見つめるしかなかった。
　剣を収めたセシルが、部下の隊員たちを振り返る。
「全員、無事なようだな」
　ビッグスを含めた隊員のすべてが、身じろぎひとつせずに立ち尽くした。
　魔物の返り血を浴びたその漆黒の甲冑が、一瞬、悪魔に見えたのだ。
　ふと我に返ったビッグスは、
「隊長に、私たちを認めてもらう絶好の機会だったんですがね」

場を和ませようと軽口を叩く。
しかし暗黒騎士はそれには応えず、船首へと視線を転じた。
「魔物の数が多すぎる。何かが起ころうとする前触れなのかもしれない」
妄言か、予言か。
その不気味な言葉に、ビッグスの背中を冷たいものが滑り落ちた。
民意を第一に考え、誰よりも平和を愛していたはずのバロン王が変わってしまったのも、あるいは異変の予兆なのだろうかと、ふと考える。
ビッグスは、セシルに倣い、前方を見やった。
遠くにバロン城の威容が浮かび上がっている。
故郷のその国が、今はなぜかとてつもなく恐ろしい場所に思われた。

2

玉座の間へとつづく扉の前で聞き耳を立てるひとりの兵士に気づき、
「何をしているのです」
白魔道士ローザは、反射的に声をかけた。
ここはバロン城の城内。

まさか不審者の侵入を許したとは思えない。

となると余計に妙な話だ。なぜ、一介の兵士が玉座の間の様子を窺う必要があるのか。

突然の声にその兵士が体を震わせ、振り返る。

その顔を目にしたローザは、「どうしたの？」砕けた口調になっていた。

男のことは、よく知っている。

セシルをとおして知り合い、今では弟のように可愛がっていた。

飛空艇団《赤き翼》の一員であるビッグスだ。

ビッグスは、ローザのもとへ小走りにやってくると、周囲を気にする素振りを見せたあとで声を潜めた。「これは罠かもしれません」

意外な言葉に、ローザは眉根を寄せた。「どういうことなの」

「隊長がミストの村へ向かったのは――」

「ええ、知ってるわ。出発前、セシルに聞いたから」

ミシディアでの任務を終えて帰還したセシルは、見ていて哀れになるほど塞ぎこんでいた。それも当然のこと。無抵抗のミシディアからクリスタルを強奪したというのだから。

己の罪を悔いるセシルの言葉を聞き、ローザも心を痛めた。

愛する男が傷ついているから、というだけではない。白魔法を修めるローザは、これまでに幾度かミシディアを訪れていたのだ。

その魔道士の故郷とも呼ぶべき地で、どのような惨劇がくり広げられたのか、想像するだけでも胸が強くしめつけられる。
それにしても――
なぜ、そのような残酷な指令を陛下は下されたのか、ローザには理解できなかった。
セシルも同様で、陛下に真意を尋ねたという。その結果、王に不信感を抱いていると曲解され、飛空艇団の隊長の任を解かれてしまったそうだ。
そして今日の早朝――
新たな任務のため、親友にしてバロン王国の精鋭部隊、竜騎士団の部隊長であるカインとともに辺境の村ミストへと旅立っていった。
陛下の温情により、失地回復の機会を与えられた、と解釈できないこともなかったが、なぜかローザは言いようのない不安を感じていたのである。
「確かセシルは、カインとともにミストの谷に出没する幻獣を討伐し、その先にあるミストの村へ指輪を届けるのだと言っていたわ。それが――」
罠?
いったい、誰が、何のために?
ビッグスが頷いた。
「幻獣は、魔物とは違います。強大な魔力を有していますが、その知能は高く、人間に干渉さ

れることを好まないと聞きます。唯一の例外は、ミストの村の民。彼らは生まれながらにして幻獣と心を通わせることができるそうです」
「ビッグス、あなたの言いたいことが、何となくわかったような気がする。つまりバロンには、幻獣を討伐する理由など一切ない」
「そのとおりです。それに隊長が陛下から直々にミストへと届けるよう命じられたあの指輪。あれは、恐らくボムの指輪でしょうね」
「ボム——魔物の？」
魔物の中には、己の敗北を悟ると大規模な爆発を起こして相手を道連れにしようとするやっかいな者もおり、ボムと呼ばれ、恐れられていた。
セシルが王より受け取ったのは、そのボムの魔力を封じこめた指輪だというのだ。
魔法は、術者の詠唱によって発動する。言葉では表現できない韻律を口ずさむことで大気に大自然の法則を逸脱した振動を与え、その震えを触媒として万物の理をねじ曲げる——それが魔法の基本原理だ。ある程度熟練した魔道士ならば、心に描いた自然現象を現実世界へ転移させることも容易にできるようになる。
とはいえ、それには多大な精神力が必要だ。
そこで魔法を発動するための韻律をあらかじめ封じこめ、誰もが扱えるようにした品が発明された。癒しの力を持った杖、氷の冷気を秘めた牙——考えられる限りのあらゆるものが魔道

士たちの熱意によって日々誕生している。

セシルたちが運搬を命じられた指輪も、その一種だとビッグスは言っているのだ。

「どうしてボムの指輪をミストの村に……」

「幻獣たちが、バロンの脅威となることを恐れているのでしょう。つまり陛下は、そうなる前に先手を打ったというわけです」

ローザの顔から血の気が引いていった。

セシルとカインは、幻獣を排除するための先兵、あるいは捨て駒にされたのだ。

「セシルは、このことに――」

「いえ、恐らく気づいていないでしょうね」

ローザは反射的に目を閉じる。

一刻も早く、このことを知らせなければならない。

つぎの瞬間、開いた瞳に固い決意の光が宿っていた。「私が行くわ」

「危険すぎます。私が行きましょう」

ローザは頭を振った。

「兵士が持ち場を離れたら、怪しまれるわ」

「しかし――」

「忘れたの？　私が修練を積んだのは白魔道だけじゃないわ」

ビッグスの口が、あ、という形に開いた。
どうやら思い出したようだ。ローザがバロンきっての弓の使い手だということを。
それでもビッグスは引かなかった。「しかしローザ様を、たったひとりで魔物の跋扈する地へ向かわせるなど、どうしてできましょう。隊長に顔向けできません」
「あなた、もうひとつ忘れているわ」
ビッグスは、その意味を理解できなかったようで首をかしげた。
「私が頑固なのを。あなたには引けを取らないくらいね」
そこまで言われてはビッグスも引き下がるしかなかったようだ。
「しかし、くれぐれも……」
「ありがとう。あなたは、引きつづき陛下の身辺を探ってみて」

3

闇の中に、薄もやが立ちこめていた。
外界からの光が遮断されているにも関わらず、周囲をかろうじて見とおせるのは、濡れた岩肌があるかなしかの光を放っているのか、それとも霧自体が発光しているのか。
「まあ、何にしても薄気味悪いところだな」

バロンの近衛兵スタンは、独りごちた。

――バロン城より北西。

深い山間のその奥に、洞窟がぽかりと口を開けている。

北のダムシアン、そしてファブールの両国と国交を樹立した何代か前のバロン王が、その二国との交流を深めるための〝街道〟として掘らせたものだとの言い伝えがあった。

確かに開通当初は多くの人々の往来があった。しかし時が流れ、大海原を行く定期船の整備、さらには飛空艇の開発が進むと、危険を承知で陸路を旅する者の数は激減し、今では魔物ばかりが巣食う地へと成り果ててしまっていた。

人外に支配されたその魔境を、スタンは息を潜めて慎重に進んでゆく。

魔物に怯えているのではない。

スタンが凝視する先には、ふたつの人影があった。

セシルとカイン。

男は、近衛兵長ベイガンの命を受け、ふたりを監視しているのだった。

彼らが任務を遂行できれば、それでよし。

もしも失敗したとなれば――。

バロン王は決して喜ばないだろうが、ベイガンとスタンは、むしろそれを望んでいた。

カイン率いる竜騎士団。

そしてセシルが隊長を務める飛空艇団。

どちらも強大な武力を有し、軍事大国バロンの両翼を担っている。

結果、近衛兵団が軽んじられることとなった。

ベイガンとスタンは、それが気に食わない。そこでスタンは飛空艇団に接近、隊長のセシルがバロン王のやり方に疑念を抱いていることを知り、近衛兵長ベイガンに報告した。ふたりは、それを利用してセシルを失脚させる策を立てたわけである。

そこには、予想外の収穫もあった。セシルの幼馴染にして親友のカインが、幻獣討伐に加わることをみずから申し出たのだ。

ふたりが部隊長の任を解かれれば、それぞれの部隊の弱体化は避けられない。

「くだらん友情に振りまわされ……まったく馬鹿な奴らだ」

スタンは、くちびるの端を吊り上げた。

やがて霧の向こうに、白い明かりが見えてきた。

——出口だ。

その先には、ミストの村がある。

さあ、いよいよだぞ！

ふたりを見失わないようにと、岩陰から身を乗り出したそのときだった。

『引き返しなさい——』

耳元で囁かれたような声に、スタンは飛び上がった。
何とか悲鳴は呑みこんだものの、体の震えが止まらない。
思考は空転をくり返し、呆けたように立ち尽くすばかりであった。
スタンがようやく我に返ったのは、
「——何者だ」
セシルの誰何の声を耳にしたためだった。
『すぐに立ち去るのです。ここで引き返せば、あなた方に危害は加えません』
再び、どこからともなく囁き。
スタンは、それがセシルたちに向けられた警告だと理解し、安堵の息を吐く。
とはいえ生きた心地がしないのは事実だった。
『即刻、引き返すのです』
声はひとつのようでもあり、無数にも感じられる。
遠くから聞こえたかと思えば、耳元で囁かれたとも思える。
声の主は、いったいどこに潜んでいるのか。
そして、それはひとりなのか。
得体の知れない者の放つ殺意に、スタンの全身が粟立っていた。
『ならば、仕方ありませんね』

その言葉が合図となった。
洞窟内を満たしていた霧に異変が生じる。大気は澱んだままにも関わらず、その淡く光る白い靄に流れが生じた。最初は零れ落ちる砂のようにゆっくりと。やがて滝つぼめがけて落ちる川の激しさを持ち、ついには荒れ狂う嵐となる。
白く発光する奔流は、一点を目指していた。
「セシル――！」
カインに突き飛ばされ、暗黒騎士が背後へと数歩よろける。
間一髪。
セシルの立っていた場所に霧が収縮し――それは実体化した。
「幻獣――」スタンが呟いた。
身の丈は、およそ人の三倍。
姿形は竜そのもの。
無数の光の粒子が、実体化したのちにも体内で激しく流動している。
それが周囲の闇を淡く溶かしていた。
ばさり、と乾いた音を立てて、純白の翼が開いた。
だが、その美しさに目を奪われている余裕などあろうはずもない。
「援護を頼む」

体勢を立て直したセシルが抜刀。
それに呼応したかのように、カインが頭上へと跳躍する。
「無茶だ……」スタンは小さく頭を振った。
幻獣は、圧倒的な力を有した存在として人々から恐れられている。ひとたび彼らの怒りを買えば、一晩で国を滅ぼされてしまうだろうと警告する学者もいるほどだ。
それを、たったふたりで――。
セシルとカインが命を落とせば、すべてがうまくゆく。
我ら近衛兵団こそが、バロンの未来を担う存在となるのだ。
それでもスタンは、彼らふたりの死を望まなかった。
否、望めなかった。セシルたちを屠ったあとにも幻獣の怒りが収まらず、その矛先をこちらへ向けたとしたら――と考えてしまう。
逃げ出すならば、今しかない。
任務と自分の命を天秤にかける。
どちらが重いのかは、考えるまでもなかった。
くり広げられている闘いから視線を引き剥がし、背を向けようとした瞬間だった。
断末魔の悲鳴が、湿った大気を震わせる。
霧散する竜を見つめるのは、セシルとカイン。

たったふたりで幻獣を倒しただと――？
「信じられん……」
スタンは、セシルらを敵にまわしたことを後悔した。
だが、もはや後戻りは許されない。

4

洞窟を抜けた先に、目的地であるミストの村はあった。
近衛兵スタンは気配を殺し、セシルたちの動きを監視する。
――そこは、粗末な集落だった。
だがベイガンに言わせれば、文明から隔絶されたかに見えるこの村こそが、バロン王国が世界を支配するための最大の障害になるらしい。ミストの村の民は、生まれながらにして幻獣たちと心を通わせる術を身につけているのが、その理由だという。
幻獣を戦に使おうとする国が現れないとも限らない。
その前に、人間と幻獣の絆を断ち切っておく必要がある。
それこそが、バロン王の考えだったのだ。
セシルたちが村へ入ってゆくのを見届けると、スタンは木の陰から抜け出て、足早にそのあ

とを追った。もうすぐだ。何としても、〝それ〟を見届けねばならない。
村へ足を踏み入れたところで、ふたりは足を止めていた。
スタンは岩陰に身を潜め、様子を窺う。
「指輪が——」
セシルの言葉に呼応するかのように、彼の手にしていた小箱から炎が噴き上がった。
——箱を開けやがったな。
そして、その発動条件は指輪を収めた箱を開けることだった。
バロン王の持たせた指輪には、ボムの魔力が封じこめられている。
疑うことを知らぬ愚か者めが！
視界が一瞬にして真紅に染まる。
噴出した炎は、セシルたちの頭上で一度巨大な塊になったあとで破裂。
飛散した無数の火球が破壊の意思を持ち、家々を焼き尽くしていった。
呆然とするセシルのかたわらで、
「このために——この村を焼き払うために俺たちは……」
カインが全身を怒りに震わせていた。
馬鹿め。ようやくこの任務の本当の意味を理解したか。
立ち昇る黒煙に陽光が遮られ、訪れた薄闇に炎の赤が鮮やかに浮かび上がる。

渦巻く熱気に息が詰まりそうだ。
これでミストの村は滅びた。
あとはセシルたちの罪をでっち上げて失脚させるだけ。
バロンへ引き返そうとしたスタンだが、耳に届いたかすかな声に動きを止める。
それは——泣き声だった。
「くそ。生き残りがいやがったか」
スタンは毒づいた。しかし冷静に考えてみれば、これは好都合。
——さあ、どうするセシル？
陛下がミストの村を壊滅させることをお望みなのは、すでにふたりは承知のはず。
安っぽい正義感を捨て、その手をみずから血に染めるか。
それとも王のご意思に背き、反逆者の烙印を押されることになるのか。
「あれは——！」
セシルの駆け寄った先には年のころ七、八歳と思われる少女が泣きじゃくっていた。
「お母さんが……お母さんのドラゴンが——」
離れた場所から窺うスタンにも、セシルの動揺する様が見て取れた。
「聞いたことがある」カインが言う。「幻獣を呼び出す力を持つ者——召喚士」
「ドラゴン……あの霧の竜のことか」

セシルの言葉に、少女が弾かれたように顔を上げた。
「お兄ちゃんたちが、お母さんのドラゴンを——」
「す、すまない……。ぼくたちは、ここへ向かうよう命じられただけで」
差し伸べたセシルの手から逃れるように、少女は後退った。「来ないで……」
「どうやら俺たちの任務は、この村の召喚士を滅ぼすことだったようだな」
「——」
「可愛そうだが、この子も——」
「何を言う！」セシルはカインを振り返り、その言葉を遮った。「相手は子供だぞ」
「ならばお前は、陛下の命に背くというのか」
「こんな殺戮をくり返してまで陛下に従うつもりなどない」
睨み合うふたり。
ふいにカインが笑った。
セシルが眉根を寄せる。「何がおかしい」
「ふん、そう言うと思ったぜ」
「——」
「俺も陛下には恩がある。だが竜騎士の名に恥じる真似などできるわけもなかろう」カインは頭上を仰ぎ見た。「とはいえ、バロンは世界一の軍事大国。俺たちふたりでは太刀打ちできる



とは思えない。このことを一刻も早く他国に知らせ、協力を要請する必要がある」
「残るクリスタルは、あと三つ。つぎにバロンが攻め入ることになるのは——」
セシルは、そこで言葉を切り、目をすがめた。
気がついたカインがセシルの視線を追う。「——どうした?」
「視線を感じた」
ふたりの視線の先には、大きな岩があった。
その陰でスタンは両膝を抱えるようにして息を潜めていた。「くそ、勘のいい奴め」
セシルが、岩陰に向かって一歩、足を踏み出した。
その肩をカインがつかむ。「時間がない」
村を包む業火は、さらに勢いを増しつつあった。
「いずれ俺たちの裏切りは露見する。追っ手がかかるのも時間の問題だろう」
そこでカインは立ち尽くす少女へと目を向ける。「この子はどうする」
「ぼくらが連れてゆくしかあるまい。さあ行こう」
「嫌!」
差し伸べられたセシルの手から逃れるように、再び少女が後退った。
「ここは危険だ」
「近寄らないで! みんな……みんな、大嫌い!」

少女の悲鳴に呼応し、大気が震えた。
熱せられた大地が鳴動し、多量の土ぼこりが宙を舞う。
「幻獣か――！」
カインの叫びに、岩陰に隠れていたスタンが飛び出した。
「何だ、こいつは……」
スタンが目にしたのは、土くれでできた巨人。
そうとしか形容のしようがない幻獣が村に出現していた。
ここまでがスタンの限界だった。
セシルらに自分の存在を知られようが構わなかった。
奴らが、バロンを裏切ったのは事実だ。
それを報告さえすれば、俺の役目は終わる。
巨人――タイタンが、大樹を思わせる両の腕を頭上高く掲げた。
スタンは逃げ出そうとした。
間に合わなかった。
タイタンのふたつの拳が、大地へ振り下ろされる。
腹部に響く轟音。
大地が裂け、山が崩れ落ちた。

そして——。

*

すべてを喰らい尽くした炎は、満足したのかその短い生涯を終えていた。
凄まじい破壊の痕跡に恐れをなしたように、小鳥のさえずりも聞こえてこない。
風がそよとも吹かぬのは、生ある者の不在を嘆いているからなのだろう。
と——。
村はずれの瓦礫の山が動いた。
その下から這い出てきたのは、近衛兵スタン。
「へっ。何が幻獣だ。こんなところで、くたばってたまるかよ」
みずからを鼓舞するかのように悪態をつく。
全身に力が入らなかった。
首すじと両腕の皮膚が焼けつくように痛み、耳の奥では嵐が吹き荒れている。
呼吸するたびに肋骨の辺りに激痛が走った。
それでもスタンは歩いた。
セシルたちの裏切りを、一刻も早く報告しなければならない。

脇目も振らず、ただ歩く。歩きつづける。
そんな彼が、村のはずれで佇む女性の存在に気づかなかったのも無理のない話だった。

5

闇が忍び寄ってくる。
視界からは一切の色彩が抜き取られ、黒一色に染まっていたが、なぜかその気配だけは察知することができた。
闇は目から、耳から、鼻、そして口からゆっくりと浸入してくる。不思議と嫌悪感はなかった。それどころか、その温もりに次第に心が満たされてゆくのを感じる。
闇からの視線を意識した。
見られている、心の奥底を――決して誰にも見せることのなかったどす黒い欲望を。
お前も、俺を拒むのか？
男は、闇に問いかけた。お前も、俺を否定するのか？
ややあってから、闇が応えた。
『お前の怒り、肯定しよう』鉛のように重々しい声である。
男は耳を疑った。

最初に感じた親近感は、しかしすぐに怒りへと転じる。
お前に、俺の何がわかる。
烈火の怒号にも、闇に動じた様子はなかった。
『お前の心の闇と同化したことで、わたしはお前のすべてを見、すべてを知った。何も恥じることなどない。お前は正しいのだから』
男は沈黙した。
『わたしには、語ることなどない。お前には、聞くべきこともない。わたしとお前は、今やひとつの存在。心の扉を開け放つがよい。惰眠を貪る無意識を叩き起こせ。わたしとお前が成すべきは、たったひとつ。さあ、感じろ。感じろ。感じろ――』
男の感情が爆発した。
同一の感情を分かち合う喜び。
記憶を盗まれたことへの怒り。
思い出を捨てて生きる哀しみ。
欲望のままに行動する楽しみ。
喜怒哀楽のすべてが暴走し、男のくちびるに凄惨な笑みが浮く。
『我が右腕となれば、お前の望む未来を約束しよう』
男は、ゆっくりとまぶたを開いた。

その目に浮かぶのは無慈悲な光、そして——一滴の涙。

6

「まあ、七つにもなって……。これじゃあ、赤ちゃんと同じね」
そう言いながらも、やさしく抱きしめてくれる母が、少女は大好きだった。
物心ついたときには、すでに父の姿はなかった。
それでも寂しさはなかった。だから、
——どうして、あたしにはお父さんがいないの？
と訊いたことはない。たった一度だって、ない。
だって、あたしにはお母さんがいるから。大好きなお母さんを独り占めできるから。
それ以上、何がほしいっていうの？
今もまた、お母さんがあたしを抱きしめてくれている。
顔中にキスの雨を降らせ、他の子とはちょっと違う、あたしの緑の髪を撫で、最後に背中にまわした腕にこめて、いつもの台詞。「愛してるわ、私の可愛い赤ちゃん」
でも今日は、なぜかいつもと同じじゃなかった。
あたしを引き寄せる腕に、もの凄い力がこめられている。

「いや……」それだけ言うのが、やっとだった。
背中の、胸の骨が、みしみしと音を立てている。
息ができない。喉が、壊れかけた笛のように鳴った。お母さん、苦しい。苦しいよ。
「お母さんはね、寂しいの。ねえ、一緒に行きましょう」
あたしは必死で暴れた。手も足も夢中で振りまわして。
ふと目にしたお母さんの顔に、あたしは凍りついた。
その顔は、血で真っ赤に染まっていた。
目は血走り、鼻は削げ落ち、くちびるには殺意を意味する笑み。
——お母さん！
周囲の光景が一変した。
闇に沈んだ室内。物音は一切、聞こえてこない。
少女は恐るおそる、寝台の上で半身を起こした。
目が慣れてくると、いくつもの寝台が並べられているのに気づく。
母の姿は、どこにもなかった。代わりに、男がひとり。少女のかたわらの椅子に腰掛け、背中を丸めている。顔は見えないが、居眠りをしているのだろう。
あたしのお母さんを殺した人だ——確か、仲間に〝セシル〟と呼ばれていた。
逃げ出すならば今しかない。

そう思いついたが、少女は動かなかった。じっと男を見つめるだけ。
あなたは、本当に悪い人なの？
声に出さず、そう問いかけてみる。
あのとき――
少女は自分の感情を制御することができなかった。その怒りに呼応し、タイタンが姿を現した。幻獣は、召喚した者の精神状態に大きな影響を受ける。
あのままだったら、あたしも、この人たちも――。
セシルは、あたしを置いていかなかった。
あたしを強く、それでいてやさしく抱きしめ、走った。
怒りの鉄槌による衝撃が足元から駆け上がり、全身を貫き、つぎの瞬間、まるで重力が消失したかのような感覚を覚え、燃え盛る故郷の村が回転し、そして――。
どうして、あたしを助けてくれたの？
少女が見つめる中、セシルは小さく身じろぎしたあとで弾かれたように顔を上げた。
ふたりの目が合う。
セシルが照れたように微笑んだ。「すまない、眠ってしまっていたようだ」
少女は、その視線から逃れるように室内をゆっくりと見まわした。
「ここは、オアシスの村カイポだよ」

セシルが説明した。「君を連れて、砂漠を放浪しているときに偶然、見つけた。よほど、ぼくの格好がひどかったんだろうね。見かねた宿屋の主人が、ここを貸してくれたんだ」
オアシスの村カイポ――
聞いたことがある。
ミストの村の東に大きな砂漠が広がっており、その中央に小さな村がある、と。
だが、実際に訪れることになるとは思わなかった。
少女は、自分の村から出たことがなかった。
それで何の不自由もなく暮らしていた。
帰りたい。ミストの村に。
でも、もうそこには誰もいないのだろう。
溢れる涙をぬぐい、少女は窓の外へと視線を転じた。
「まだ名前を訊いていなかったね。ぼくはセシル」
少女は、ただ窓の外を見つめる。まるで闇に魅入られたかのように。
男が大きく息を吐いた。
「君の母さんは、ぼくが殺したも同然。許してくれとは言えない。その資格が、ぼくにはないのだから。だが、せめて……君を守らせてくれないか」
「――来る」

少女の言葉に、セシルが眉根を寄せた。
つぎの瞬間、少女の見つめる窓が破られた。
室内に雪崩れこんできたのは、四名の兵士。
「追っ手か！」
セシルが素早く剣を抜き放ち、少女を守るようにして兵士たちの前に立ちはだかる。
先頭に立つ兵士が叫んだ。「ミストの村の生き残り——その娘を引き渡せば、これまでの貴様の数々の狼藉をなかったこととしよう」
「それが、バロン王の命令か」
「いかにも」兵士は、にやりと嗤（わら）った。「ミストの者は危険な存在らしいのでな」
「断る」答えると同時に、セシルが動いた。
舞うように、との形容が適切であろう。セシルは相手の攻撃を寸前でかわすと、その剣をつぎつぎと床に叩き落していった。
瞬きをする暇もなかった。三名の兵士が手の甲を押さえ、うめいている。
隊長と思しき兵士の喉元に切っ先を突きつけ、セシルは言った。「城へ戻り、王に伝えよ。《赤き翼》は　国のため、民衆のために命を賭して闘う者の呼び名だ。いかなる危機に陥ろうとも、その志は変わらない。決してだ」
「《赤き翼》だと——？」

「そうだ。《赤き翼》は飛空艇の名にあらず。覚えておくがよい」
隊長は、セシルの切っ先から逃れるようにして後退すると、
「——引くぞ」部下の兵士に声をかけ、宿屋から出ていった。
再び、薄闇の中に静寂が満ちた。
「ごめんなさい、あたしのせいで——」
剣を収めたセシルが少女を振り返った。「いや、謝るのは、ぼくのほうだ。もちろん謝ってすむことではないが……」
微笑んだセシルが寝台の脇に腰掛け、リディアの髪を撫でた。
「でも、守ってくれた。あなたのお陰で、あたしは二度も助かった」
「あたし……リディア」少女は泣き出した。
セシルは、少女をやさしく抱きしめた。「ありがとう、リディア」
男の胸でリディアは泣きつづける。
——お父さんって、こんな感じなのかしら。
安堵した心の中で、ふとそんなことを感じた。



第2章

FINAL FANTASY IV

ファイナルファンタジーIV

1

まぶたの隙間から入りこむ陽の光に、睡魔が名残惜しそうに退散する。
目が覚めてしまった。
少女は、恨めしそうな視線を窓の外へと向ける。
世界は光に満ち溢れ、こんなにも平和そうに見えるというのに。
突き破られたままの窓から、小鳥のさえずりが聞こえてくる。
それでリディアは、昨夜の兵士の襲撃が夢ではなかったことを知った。
夢だったらよかったのに。何もかも――。
「よく眠れたかい？」
セシルが隣の寝台で半身を起こし、こちらを見つめていた。
少女は、それには応えず、静かに目を閉じる。
眠れば、また悪夢にうなされるのはわかっている。
それでも眠っていたかった。ずっと。ずっと。
夢の中ならば、お母さんに会えるから。
そのまどろみを妨げたのは、男の嘆く声。
「何てこった」

聞き覚えがなかった。

誰だろう。

リディアは仕方なくまぶたを開き、上体を起こした。

恰幅のいい男が、壊れた窓を見つめ、頭を抱えていた。

「この前、修理したばかりだってのにな」

どうやら、この宿屋の主人のようだ。

「いったい、どうしたっていうんだ？」咎（とが）めるように、男がセシルを振り返った。

セシルは寝台から降り立つと両手を広げ、頭を振る。「夜中に、突然、見知らぬ四人の男たちが窓を突き破って中に入ってきたんです。彼らはここでしばらくの間、意味不明なことを口走り、やがて出ていった。恐らく、酔っ払っていたんでしょうね」

荒唐無稽な話だった。

この人、嘘をつくのが下手なのね、とリディアは思う。

しかし主人は、その話を真に受けているようだった。彼は、散乱するガラスを踏みしめて窓枠に近づくと、そこに落ちている一振りの剣を拾い上げた。

柄に施された鷲の象嵌（ぞうがん）をセシルたちに見せる。

「こいつは、バロンの紋章だな。なるほど、バロンの兵士どもの仕業か」

主人は剣を値踏みするかのように眺めはじめた。

窓の修理代を捻出するため、商人に高く売りつける算段でもしているのだろう。
「まったくバロンの奴らめ。つぎつぎと、やっかいごとを持ちこんできやがる」
「つぎつぎと？」とセシル。
「あんた、知らないのかい？　バロンの飛空艇団が、ミシディアに攻めこんだって話だよ。そのうち、このカイポも奴らに狙われることになるのかね」
リディアは、セシルの背中を見つめた。
彼がバロンの人間で、望まぬ任務から逃げ出し、それで追われる身になったことだけは、リディアにもわかっている。そして、召喚士である自分もまた、バロンから狙われる存在。
これからも昨夜のようなことが起きるかもしれない。
いったい、どこへ逃げたらいいの？
主人が、ようやく剣から顔を上げた。
「そうそう。砂漠に倒れていた人が、朝方、運びこまれたんだ。どうやら、そいつもバロンの人間らしい。うわ言のように、セシルという名前をくり返しているとか」
「――カイン」
セシルが呟いた。
リディアは、それに聞き覚えがあった。セシルと一緒に村にやって来た男の名だ。
しかし宿屋の主人は、

「そりゃあ男の名だろ。運びこまれたのは、絶世の美女だって話だ」
セシルがリディアを振り返る。
まるで心当たりがないという表情だった。
と——。
ふと何かを思い出したように「ローザ……」女性の名を口にした。
ふたりは主人に礼を言うと、教えられた民家へ急いだ。
「やっぱり、ローザ。君だったのか」
寝台に、ひとりの女性が横たわっていた。「でも、どうしてここまで……」
セシルの目が潤み、大粒の涙がとめどなく零れ落ちる。
それでリディアは、ローザがセシルの大切な人なのだと知った。
「今朝早くに、砂漠で行き倒れになっているのを見つけたんじゃよ」
家主の老人が、セシルの横に立ち、心配そうにローザの顔を覗きこんだ。
ローザの頬が赤く染まり、額に汗の玉が浮いている。息遣いが荒い。
セシルは、彼女の頬に触れた。
が、すぐに体を大きく震わせ、手を引っこめる。「すごい熱だ」
「高熱病じゃな」と老人。
「それは——」

「たいそう疲れておるときに砂漠を旅すると、乾いた風と熱とにやられちまうのさ」
「治す方法はあるのでしょうか」
「〝砂漠の光〟があれば、熱は引く。アントリオンという魔物が産卵するときに分泌するというものなんじゃがな」
「魔物の分泌物が薬に？」
「なに、魔物といっても大人しいもんじゃ。人に危害は加えん」
「それは、どこに――」
問われて、老人は目を閉じた。「昔は、そこいら中にいたよ。ところが相手が大人しいのをいいことに、乱獲する者がおってな。今では、さっぱり見かけなくなった」
「そんな……。では高熱病にかかった者は――」
「ダムシアンの王族のみが立ち入ることのできる洞窟に、アントリオンがおるという話を聞いたことがあるが真偽のほどは確かではない」
「ローザをお願いできますか」
老人が目を開き、セシルの顔を見つめた。「あんた、まさか」
「それしか彼女を助ける手段がないのならば、ダムシアンへ行くしかありません」
「しかし、ここからダムシアンは遠い。地下水脈を抜けねばならぬし、そこには恐ろしい魔物どもがひしめいているそうじゃぞ」

「心配いりません。それよりもローザを」
セシルの目に浮かんだ固い信念の光に気圧されたのか、老人は渋々と頷いた。
「この子もお願いできませんか」
セシルと老人のふたりの視線を感じ、リディアは顔を上げた。
魔物がいる地下水脈に、自分を連れて行くことはできないということなのだろう。
老人が頷く前に、
「嫌」リディアは、それを拒絶した。
「リディア、わかってくれ。そんな危険なところに、君を――」
「守ってくれるって言ったでしょ？」
問われて、セシルは沈黙した。
リディアは、彼が言いたいことを理解している。
彼ひとりならば、どんな危険が待ち受けていようとも突破することができるだろう。
でも、あたしがいたら――。
きっとセシルのことだ、何よりも安全を第一に考えて行動するに違いない。
たとえ、一刻の猶予がないとしても。
リディアは、理解している。理解していても、ここに残ることを拒んだ。
「つらい旅になると思う」観念したようにセシルが言った。

「構わない」
リディアは即答する。
むしろ、それを望んでいた。
悲しい思い出を、その間だけでも忘れていられるような気がするから。

2

突き出された魔物の爪を寸前でかわす。
見切っての行動ではない。余裕など、あるはずもなかった。
浅く裂かれた右の頬から、向けられた殺意の名残りのように血が溢れてくる。
「——おのれ！」
鋭い眼光で睨みつけるが、魔物に動じた様子はない。相手は老人ひとり——勝機ありと見たのか、耳元まである口を大きく開き、奇声を上げる。
老人は、手にした杖を正眼に構え、じりじりと間合いを広げた。
相手は一匹。
落ち着いて、息を整えれば、苦戦するような相手ではないはずだ。
何度も自分に言い聞かせ、呪文の詠唱を開始する。

と――。
背中に硬い感触。壁だった。
追いつめられたことを悟り、再び心臓が早鐘を打ちはじめる。
動じるな。
精神の平静を保たねば、超自然の力の現出などできない。
魔物が、膝まであろうかという長い両腕を振りかざし、突進してきた。
その爪が振り下ろされる寸前に、魔物の青白い肌が発火。
老人の魔法、〝炎撃(ファイア)〟が発動したのだ。
魔物は断末魔の悲鳴を上げながら崩れ落ち、そのまま動かなくなった。
「よもや、この程度の輩に苦戦するとはな」
男は己の老いを痛感し、その場に座りこんだ。「昔のようにはゆかぬか」
戦いの場から身を引き、すでに二十年以上が過ぎている。
とはいえ、眼光は鋭さを失っていないと自分では思っている。
齢、六十。まだ老けこむには早いはずだ。
そう、アンナの幸せを見届けるまでは――。
老人は杖を使い、何とか立ち上がる。
ゆっくりしている暇はない。早く娘を取り返さねば。

——そのときだった。
背後に気配を感じ、振り返る。
老人は目をすがめた。
魔物か——いや、どうやら違うようだ。
薄闇の向こうから現れたのは、漆黒の甲冑に身を包んだ騎士と思しき男と、まだ年端もゆかぬ少女という、およそ不釣合いなふたりだった。
「驚かせてしまって申し訳ありません」と立ち止まった男が頭を下げた。
「構わぬ。暗黒騎士と魔道士の娘か——奇妙な取り合わせだが……」老人は値踏みするように、ふたりを眺めたあとで「ひとつ訊いておこう。お主は王族の者か」
「ぼくはバロンのセシル、この子はミストの村のリディア。ふたりとも王族の者ではありません。でも、それが何か——?」
「ふん、命拾いしたようだな。もしも、そなたらが王族だとしたら、ここで黒こげになっているところだ」吐き捨てるように言った。
セシルと名乗る男が苦笑した。
老人は、自分の言葉を本気で受け止めようとしないことに苛立ちを感じ、手にしていた杖をセシルの胸元へ突き出した。「もうひとつ。バロンの狙いは何だ」
黒い甲冑の男の顔から笑みが消えた。

「聞いておるぞ。ミシディアを襲撃したのであろう」
セシルが顔を伏せた。
「ぼくが、その陣頭指揮を執り、クリスタルを――」
〝水のクリスタル〟は、ミシディアの象徴。
魔道の研究に我が身を捧げる者たちは、その輝きから叡智を得る。
老人は、ミシディアを治めるかつての盟友のことを思い出していた。
「長老は、どうした」
「殺気立つ若い魔道士たちをなだめ――こんな言い方が適切ではないのは承知していますが、我々にとても協力的でした」
「ふん、賢明な選択だな。ところで――」老人は、男をぎろりと睨んだ。「その《赤き翼》の隊長殿が、なぜこのような場所におるのだ」
答えによっては、こやつとやり合わねばならんぞ。
老人の胸のうちに殺気が満ちてゆく。
しかしセシルは、
「陛下の変貌に納得できず、その真意を尋ねたことで任を解かれました。今では、裏切り者の烙印を押され、バロンから追われる身です」
うなだれるばかりだった。

老人は鼻を鳴らした。「行く当てのない逃避行か」
「いえ、当てはあります」
「ほう」
「ダムシアン、そしてファブールへと足を運ぶつもりです。陛下の狙いは、クリスタル。このことを一刻も早く他国に知らせなければなりません」セシルは、そこで顔を上げた。「ですが、その前にやらなければならないことがあります。高熱病にかかった友が、カイポでぼくの帰りを待っているのです。急がなくてはなりません」
「〝砂漠の光〟か。確かに猶予はないな」
この男、どうやら嘘は言っていないようだなと老人は考えた。
「ところで、あなたは、なぜダムシアンへ——」とセシル。
「大した用事ではない」
「わかりました。では、この地下水脈を抜けるまで、ぼくがあなたをお守り——」
「守るだと？　お主のような若造が、このテラを守ると？」
老人は、セシルの胸を杖で突いた。
「テラ？　まさか、あなたが賢者テラ……」
「いかにも」
テラは胸を張った。顎を心持ち上げ、見下ろすときの目つきでセシルを睨んだ。

そんな老人に、セシルは素直に頭を下げる。「ご無礼をどうかお許しください」
「ふん、まあよい。一人旅ほど寂しいものはないからな」
「それでは――」
この男と少女が何者であっても、さしたる問題ではなかろう。
それよりも今は、一刻も早くダムシアンへ行く必要があった。
あの《赤き翼》の隊長だと？
上等だ。
「さあ、参るぞ」
テラは歩きはじめた。

3

威勢のいい言葉を並べてみたところで、衰えは隠せなかった。
特に、精神は正直だ。
地下水脈を進む一行は、幾度となく魔物の襲撃を受けた。
テラは、セシルを援護するべく魔法を唱えるが、そのたびに心が疲弊してゆく。
どこか休める場所を探そう――自尊心から、何度その言葉を呑みこんだことか。

だが、もう限界だった。
「そこのお嬢ちゃんに疲れが見えるぞ」
そう言い放つとテラは、どかりとその場に腰を下ろす。
ふたりは何も言わず、それに従った。
火を熾し、暖を取る。
闇をやさしく溶かすその明かりを見つめていると、心地よい眠気が襲ってくる。
命を脅かす魔物への恐怖も、睡魔には勝てない。
やがてリディアが焚き火のかたわらで丸くなり、寝息を立てはじめた。
「……しかし、大した子だな。よい資質を秘めておる。このまま育てば、さぞかし名のある魔道士になるであろうな。このテラが保証しよう」
世辞を言うつもりなどなかった。
これだけの恐怖にさらされながらも涙を見せるどころか、無駄口ひとつ叩かない。
ただ自分に与えられた役目をこなしている。
とても七つや八つの子供のできることではない。
もっとも、目に生気のないことだけは気がかりではあったが。
「リディアは、召喚士なのです」
「先ほど、ミストの出身と言っておったな。しかし召喚士とは思わなんだ」

焚き火の明かりが、少女の寝顔を照らしている。
そのあどけない表情を眺めていると、この子が幻獣と心を通わせる力を持っているとは、とても思えない。
「それにしても可愛い寝顔だ。幼いころのアンナを思い出す」
「その人は、あなたの――」
「一人娘だ。だが、どこぞの吟遊詩人と駆け落ちしおった。わしが許さぬばかりにな」
「それでダムシアンへ向かうことに……」
「話によれば、あやつは、ダムシアンの城で飼われている吟遊詩人のようだからな。アンナは、わしの宝。あの盗人め、とっ捕まえて、目にものを見せてくれるわ」
「目にものを――ですか」
セシルの言葉を最後にふたりは沈黙した。視線を合わせたままで。
目を逸らせたのは、テラだった。
「お主は、わしを本物のテラだとは思っていないようだな」
「そんな、ぼくは――」
「構わぬ。そのように思われたところで仕方のない体たらくだ」
テラは怒る気力もないと言わんばかりに、目を閉じ、小さく首を振った。
「一度は魔法を捨てた身。昔のようにゆかぬのは道理だ」

「魔法を捨てた?」
「すまないが、わしも休ませてもらうよ」
言うとテラはごろりと横になった。

＊

一行の旅は、なおもつづく。
つい今しがたも、魔物の襲撃を受けたばかりであった。
斬り捨てた異形の者を見下ろし、セシルが肩で息をしている。
「余分な力が入りすぎている。お主の剣には迷いが見られるぞ」
テラは見かねて、セシルに言った。
「迷い——ええ、そうかもしれません」
「それは行く末を決めかねているということでもある。正しき道を選べればよいが、一時の感情に惑わされては、待ち受けるのは破滅のみ」
「一時の感情、ですか」
「たとえば……そうだな、憎しみといったところか」
テラは歩きはじめる。「ただの独り言だ。興味がなくば聞き流すがよい」

老魔道士は、ふたりに背を向けると歩きはじめた。

「若い時分のわしは、ミンウという男と組み、世界中を旅してまわった。あやつは違ったのだろうが、わしの目的は憎しみを晴らすためだった――」

テラは、物心つく前に両親を魔物に殺され、ミシディアに引き取られた。

そこで黒魔道士としての教育を受け、成長した。

過酷な修行ではあったが、まったく苦にはならなかった。

――強くなりたい。

胸にあるのは、その想いだけ。

愛する者を守る力を手に入れられれば、きっと幸せを取り戻せると信じていたのだ。

やがてテラは神童と謳われ、若くしてすべての黒魔法と白魔法を修める。

世界一の魔道士――すなわち賢者と呼ばれるようになっていた。

あるとき、わしとミンウは、世界を旅する許可をもらう。各地にはびこる魔物を殲滅し、平和をもたらすための旅だ。

わしとミンウに太刀打ちできる魔物など、どこにもいなかった。

訪れた地で、わしらは正義の使者として歓待を受ける。化け物どもから村や町を救ってくれた英雄というわけだ。彼らは結果のみで判断し、わしの心の中を覗こうとはしなかった。わしは平和など、どうだってよかった。憎しみのままに行動しているだけなのにな。

やがて、その憎しみという感情さえも麻痺してしまった。
殺戮を愉しむようになっていったのだ。
それに気づいたミンウは、狂気に堕ちたわしに正気を取り戻させようとした。
わしは、奴の態度が気に食わなかった。そしてふたりの仲は決裂した。
そこに絆が存在しなければ戦力は半減する。
己の魔法を過信したわしは、魔物の奇襲を受け、死にかけた。
ミンウが機転を利かせてくれなかったら、間違いなくくたばっていたであろう。
奴は、一言だけ言った。
――憎しみに惑わされてはいけない。それは必ず破滅を呼び寄せる、と。
ミンウはミシディアへ戻り、わしは生まれ故郷のカイポへ居を移した。
そこで出会った女性と結ばれ、やがてアンナを授かった。
「そのミンウという方が――」とセシルが言った。
「今のミシディアの長老だ」
「あなた方の間には、そんなことがあったのですか」
「ふん。これで終わったわけではないぞ」
――そう。あれは、上弦の月の不吉な夜だった。
カイポに魔物の大群が押し寄せた。

村で闘えるのは、わしひとりという状況。
いかに天才魔道士とはいえ、限度がある。
夜が明け、ようやく魔物どもを撃退することができた。
幾人もの村人が命を落とした。その中に、わしの妻もいた。
妻は、生まれたばかりのアンナを守るようにして息を引き取っていた——。
薄暗い地下水脈の中、老魔道士は声をあげて嗤う。
「何が天才魔道士だ、愛する女ひとり守れぬというのに。だから魔法を捨てた。金輪際、魔道に関わることはないと心に決めたのだ」
「テラ——」
「しかし、うまくゆかぬものだな。すべてを、きれいさっぱり忘れていたつもりだったが、こうやって命のやり取りをするたびに、無意識の底に眠っていた魔法の数々を思い出してしまう。捨てたはずの魔法——今は、それだけがわしを生かしてくれるたったひとつの存在なのだからな。何とも皮肉な話だ。魔物の存在を恨めしく思う」
「それについては、各地の王にも責任があります。もっと真摯に民衆の平和について考えていれば、生まれることのなかった悲劇もあるでしょう」
「そのとおりだな。いつの時代も、苦しむのは民衆ばかりだ」
「——それで先刻、ぼくに王族の者かと尋ねたのですね」

しかしテラは、それに答えない。
前方に生じた光に目を細めている。
「出口だわ」リディアが叫び、走り出した。
ふたりも、それを追う。
闇から抜け出た一行は、天からの恵みを全身に浴びた。
遠くにダムシアン城が霞んでいる。
「縁を切ったつもりになっていた憎しみという感情も、まだ無意識のどこかに眠っているのかもしれぬ。だから早くアンナを取り戻したい。もう誰も憎むことはしたくないからな」
テラは、小さく呟いた。
セシルが何かを言いかけ口を開いたが、そこから言葉は生まれてこなかった。
三人の目が、驚愕に見開かれる。
轟音とともに、巨大な影が陽光を遮った。
バロンの飛空艇《赤き翼》であった。
その針路は北——真っ直ぐダムシアンへと向けられていた。

4

アンナは、玉座の前でひれ伏していた。目を固く閉じ、ひたいを床に擦りつけていても、王の鋭い眼光が容赦なく自分に注がれているのを感じる。体が震え、めまいを覚えた。

どうして罪悪感など感じてしまうのだろう。私は、自分の愛を貫こうとしているだけなのに――。

「なぜ王妃となりたいのだ」

頭上で王の声がした。

アンナは、弾かれたように顔を上げた。目が合う。

「父上、違うのです」アンナのかたわらでひざまずくギルバートが立ち上がり、愛する女性に助け舟を出した。「ぼくの求婚を受け入れてくれたとき、アンナはまだぼくが王族の者だということを知りませんでした。彼女は王妃になりたいわけでは――」

「私は、この娘に訊いているのだぞ」

王が遮った。

物静かだが、有無を言わせぬ威厳に満ちた口調だった。

アンナは、くちびるを噛みしめた。

——私は、王妃なんかになりたくない。愛するギルバートと結ばれ、彼の詩に耳を傾けながら、ただ幸せに暮らしたいだけなのです！

できることならば、そう叫びたかった。

しかし——

ギルバートは、吟遊詩人を気取ってはいるが、紛れもなくこのダムシアン王国の王子。やがて王として国を背負ってゆく運命にある。

王族たちの華やかさの裏に、いったいどのような苦悩が隠されているのか、アンナは知る由もない。だが、想像はできた。常に他人への気遣いを忘れたことのない心やさしきギルバートが、その重責に耐えかねて、詩へ逃げたほどなのだ。

「私が親子の縁を切れば、ギルバートは王子ではなくなる。それでも息子を愛せるか？　一生を吟遊詩人の妻として生きることができるのか？」

問われて、アンナは目を閉じ、未来へと想いを馳せた。

愛し、愛されるだけならば、身分にこだわる必要などない。

しかし、一生を添い遂げるとは、そのような軽いものではないはずだ。

ギルバートは、私の夢。

彼に、どのように生きてほしいのか？

そして、私は彼に何をしてあげられるのか？
何度も自問し、ようやくたったひとつの答えにたどり着いた。
アンナは、目を開いた。
先刻と変わらず、王の鋭い眼差しが、そこにある。
「私は、王妃になりとうございます」
「――アンナ！」
ギルバートが叫んだ。「なぜ、そんな心にもないことを」
アンナは、ギルバートには目もくれず、「それが、私の真意。もしも彼が王族でなくなるのでしたら、私は故郷のカイポへ帰らせていただきます」
「アンナ……」ギルバートが力なく、その場に座りこんだ。
「もうひとつ訊こう。ギルバートは、王に足る器か」
「はい。失礼ながら――」村娘はかたわらの王子へと視線を転じた。「玉座に腰掛けているだけでは見えないものもございます。ですが、ギルバート様は各地を旅し、私たち民衆の痛み、苦しみ、喜びをその目でご覧になっておいでです」
「私が王としての責を全うしていない、と言いたいわけか」
その言葉に、アンナは、再び王に向き直る。「そうは申しません」
王の双眸から、鋭い光が消えていた。

「ですがギルバート様は、王となるべきお方。その障害となるのであれば――」涙が溢れてきた。震えるくちびるが、決意を刻む。「――私は喜んで身を引きましょう」

王は横に立つ王妃としばし視線を交わしたあとで、破顔した。

その柔和な微笑みが、アンナに向けられる。

「しっかりした娘さんだ」

王のあとを王妃がつづけた。「ギルバートにはもったいないほど」

「ギルバートの放浪癖も、どうやら無駄ではなかったようですね。このような素晴らしい娘さんを見つけてきてくれたのですから」

アンナは、いったい何が起こったのかわからなかった。

王と王妃の笑顔を眺めているうちに、ようやく理解した。

ふたりの結婚は、ここに認められたのだ。

「ありがとうございます」

アンナは、ひたいを床につけ、涙した。

その肩に触れる者があった。

「ありがとう、アンナ」ギルバートだった。「君の覚悟を、ぼくは絶対に裏切らない」

アンナは顔を上げ、愛する男を見つめた。

王が咳払いをする。

「ところでアンナ。そなたの親御さんは、この結婚について……」

「母は私が生まれて間もなく亡くなりました。父はまだ健在で、カイポにおりますが――」
「アンナのお父上は、ぼくのことを放浪の吟遊詩人だと思っています」言いよどんだアンナに、ギルバートが助け舟を出した。「ですが、きちんと話をすれば、きっと……」
「――わかってくれるかしら」
アンナはダムシアンの王にへ向き直った。「父は、王族を嫌っております」
「ほう、耳の痛い話だな。して、その理由は」
「偏見なのです」
「というと――」
「虚飾と飽食にまみれ、民衆の心の痛みをまったく理解しようしない。王族や貴族の方を、父はそういった人種だと決めつけてしまっています」
「なるほどな」
「心配はいらないよ、アンナ。ぼくが、必ずテラさんを説き伏せてみせる」
「テラ？　カイポのテラといえば、賢者の――」
「はい」アンナは頭を下げた。
「そうか、賢者テラ殿が、そなたのお父上であったか。なるほどな」
王は思案するかのように顎ひげをしごいたあとで、「となると、ギルバートひとりに任せておいては、まとまる話もまとまらなくなる」

「ですが、父上――」
「私も、ともにゆこう」王が立ち上がった。
「え――」アンナとギルバートは言葉を失う。
「おかしな話ではなかろう」
「ですが、陛下――」
「おっと、勘違いしてもらっては困るぞ。そなたのお父上がテラ殿だと知ったからではない。手塩にかけ育ててきた、たったひとりの娘を我らミューア家に迎え入れるのだ。そうやって礼を尽くすのは当然のこと。――違うかな」
村娘と王子は、深々と頭を下げた。
「さあ、旅の支度だ。相手は名高き賢者にして、希代の頑固者。説き伏せるまで、私はこの城へ戻るつもりはないぞ」王は笑った。
玉座の間に兵士が駆けこんできたのは、そのときだった。
「申し上げます。バロンの《赤き翼》が――」
轟音とともに城が激しく揺れる。
飛空艇からの砲撃だった。

降伏すべきか、との考えが王の脳裏をよぎった。

それにしても――

ダムシアンは、商いで財を成した初代ギルバートが興した国家。

魔物の襲撃に備えて兵士団こそ組織していたが、戦を経験した者は皆無である。

戦力はないに等しい。

つまり、宣戦布告もなしに奇襲する意味は薄いということになる。

「奴らの目的は、いったい――」

そんな王の疑問に、ギルバートが答える。

「旅の途中で、バロンに関する不吉な噂を耳にしました」

「不吉な噂だと？」

「ミシディアを襲い、クリスタルを強奪したというのです」

「となると、狙いはこの国に代々伝わる〝火のクリスタル〟か」

「恐らくは」とギルバートが頷く。

王は嘆息し、頭を振った。

クリスタルが惜しいのではない。

5

確かに火のクリスタルは、ダムシアンの叡智の源。クリスタルの啓示に従ったことで国が繁栄してきたのは紛れもない事実だった。

とはいえ、民衆や兵士の命に替えられるものではない。

民なくば国は滅びるしかないのだから。

では、なぜバロンは使者を派遣し、クリスタルを差し出すよう通告しなかったのか。

戦ともなれば、資源や兵力、そして時間が浪費される。いかに弱小国家ダムシアンが相手だとしても、損失をまったく出すことなく勝利を収めるのは不可能だ。

——我らが得意とする知略が仇となったか。

交渉というまわりくどい方法を取れば、相手に時間を与えることになる。

策を練られれば状況は不利になる、とバロン王は踏んだのであろう。

クリスタルを差し出せば、それですべてが解決するとは思えなかった。

奴らが恐れているのは、我らが知。ミューア家の血筋を根絶やしにし、その上でクリスタルを奪おうと考えているに違いない。

となれば——

軍事大国バロンに対抗するためには篭城するしか方法はあるまい。

「城門を閉じよ。兵士をこの玉座の間に集め、迎え撃つ」

伝令が階下へ消えたのを見届けてから、王はアンナへ向き直った。

「アンナよ。このような事態になってしまったことを心から詫びよう。彼らの狙いは〝火のクリスタル〟。すべてが終わるまで、この城からは出られぬと思ってほしい」
すべてが終わるまで――
それが意味することを、王は言葉にしなかった。
アンナが、王の前に進み出た。
「今――この瞬間、私をミューア家へ迎え入れてくださらないでしょうか」
唐突な申し出に王は目を丸くした。「ギルバートと契りを結ぶということか」
「はい」
真っ直ぐな視線で見つめられ、王は彼女から目を逸らせてしまった。
この娘は、わかっていない。
今、ミューア家に名を連ねる危うさを、まったく理解していない。
「テラ殿がおいでにならぬのに式を挙げるなど、なぜできようか」
王は言った。言ったが、自分の言葉に何ら説得力がないことを自覚していた。
アンナが微笑んだ。暗い笑みだった。
「父の受け売りですが――手駒が多いほど、戦局を優位にできる可能性があります」
「そなた――」王はアンナを見つめた。
彼女の瞳に強い光があった。「覚悟はできております」

王などおらずとも、民さえ残れば国は滅びない——。
アンナは、自分の命を投げ出す心づもりでいる。
そう、民衆を救うために。
王族としてあるべき姿を体現するために。
彼女はすべてを理解した上で、覚悟を固めていたのだ。
王は、ギルバートを見やる。
王子の真摯な眼差しを目にし、迷いは完全に消えた。
——まったく、ギルバートには過ぎた娘だ。
「これより婚礼の儀を執り行なう」王が高らかに宣言した。
ひとりとして異を唱える兵士はいなかった。

6

式は、厳か(おごそ)かに進行する。
新郎が誓いの言葉を述べる段に、無粋な侵入者たちがあった。
しかし式が中断されることはない。
「——この生ある限り、新婦を愛しつづけることを誓います」

ギルバートはアンナを抱きしめ、

「君が、ぼくのすべてだ」と囁くと、静かにくちびるを重ねた。

参列したダムシアンの兵士たちが、それに喝采を送る。

神父を買って出たダムシアン王は、そんなふたりをにこやかに見つめながらも、油断なく侵入者——バロン兵らを盗み見る。

なるほど、大したものだ、と王は内心、アンナに舌を巻いた。

勢いこんで玉座の間へ突入したバロン兵だったが、婚礼の儀という予想だにしない出来事に遭遇し、その場に立ち尽くした。完全に毒気を抜かれてしまっているようにも見える。

とはいえ危機が去ったわけではない。

王は、笑顔を絶やさず、敵の司令官の姿を捜した。

何事も最後が肝要だ。

司令官さえ丸めこめれば、クリスタルを失うだけで事が終わる。

クリスタルの損失は痛手となろうが、我らはそれ以上のものを手にするだろう。

——と。

静まり返った玉座の間に、軍靴の音が響き渡った。

呆けたように立ち尽くすバロン兵たちが我に返り、ふたつに割れる。

現れた影に、王の笑みが凍りついた。

漆黒の甲冑に身を包んだ男が、玉座の間へ足を踏み入れ、そこで立ち止まる。面頬を下ろしているため、その表情は窺い知れないが、残忍な笑みを浮かべていることは容易に想像できた。それほどまでに凄まじい殺気を周囲に発散させている。

新郎と新婦を背後に押しやり、王が進み出た。

その右手に王妃が立つ。

「これは《赤き翼》のみなさま」王妃は、漆黒の男に微笑みかけた。「本日は、かような祝いの席にご出席いただき、感謝の言葉もありませんわ」

「宴は、ここまでだ」

闇色の面頬の奥から、鉛の言葉が流れ出した。

一切の感情を廃した声音だ。

王妃は怯まない。「お名前を伺ってもよろしいでしょうか」笑みを絶やさずに。

漆黒が、かたわらに待機する兵に指示を出す。

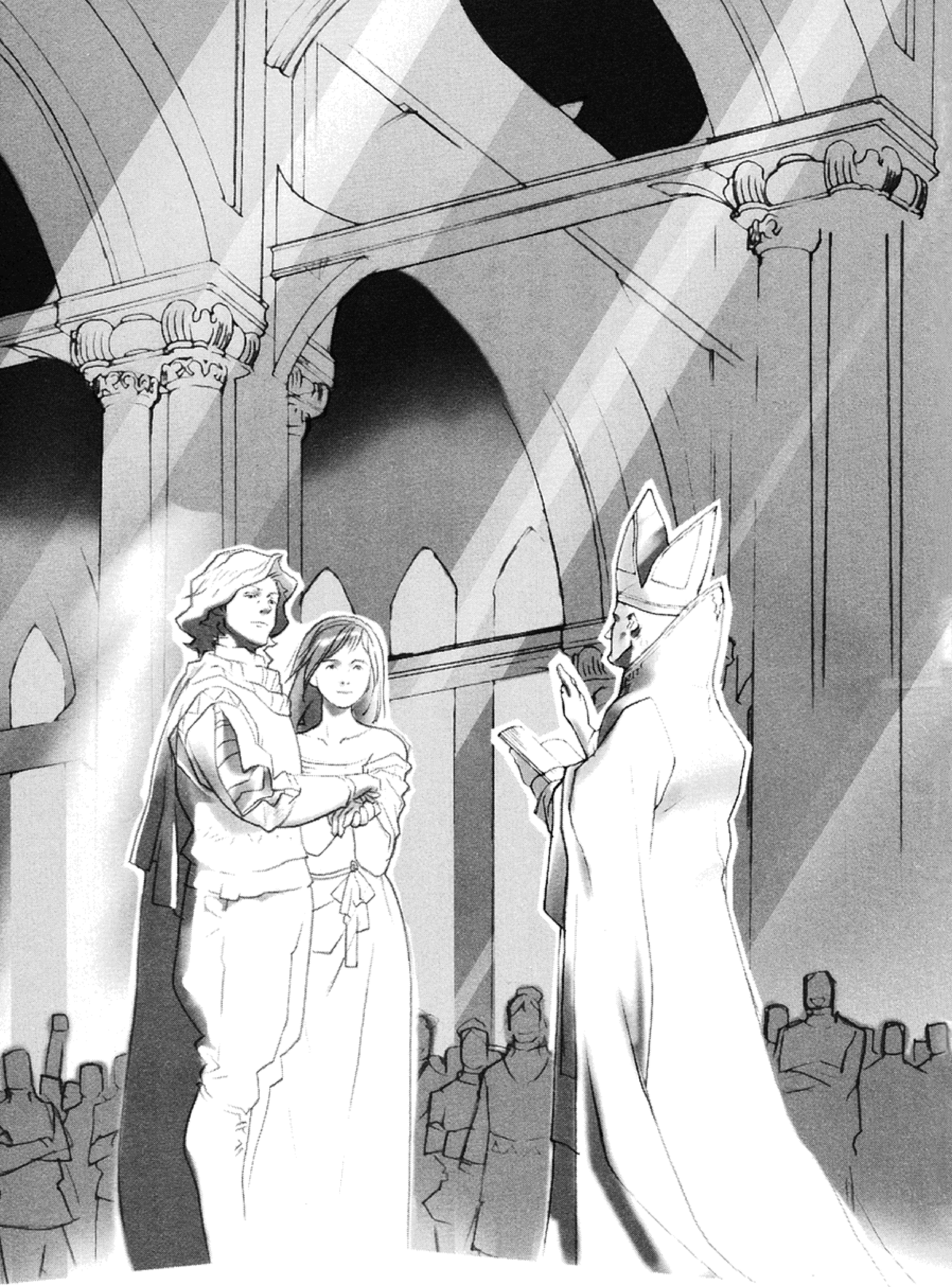
兵士は弓に矢をつがえ、引き絞った。

威嚇か、それとも――

王は、相手の意図が読めなかった。

つぎの瞬間、弦が鳴る。放たれた矢が、王妃の胸を貫いていた。

「――母上！」



崩れ落ちた王妃に、ギルバートとアンナが駆け寄る。
王妃は、それでも笑みを消さなかった。「幸せになるのですよ」
そう言い残して息を引き取った。
王の顔が歪んだ。
――怒りを見せてはならぬ。
火に油を注ぐだけだ。
意識の警告を、しかし無意識が無視する。
背中を駆け上がってきた憤怒の感情に共鳴し、全身ががくがくと震えた。
何を成すべきなのか、考えろ。
空転する思考が、何とか搾り出した結論は――
王は漆黒の男に背を向けると、玉座のうしろにある壁へと突進した。
壁の突起に触れると、そこに通路が出現する。
背後で兵士のものであろうか、落胆のため息が聞こえた。
構わず王は、その場から姿を消した。

＊

弓兵のつぎなる狙いは、母の遺体にすがり泣きつづける王子だった。
限界まで引き絞られた弦が、耳障りな音を立てた。
それにアンナが気づく。
放たれた矢とギルバートとの間に、自分の体を滑りこませた。
短い悲鳴。
自分のみぞおちのあたりから突き出た矢尻を悲しそうな目を見つめたあと、アンナは愛する男の顔へと視線を転じた。瞳には涙。しかしくちびるには笑み。
「アンナ、どうして――」
信じられないといった表情でギルバートが首を小さく振る。
「このままでいて。私のために泣いて」
「アンナ……」首筋にすがりつく新婦を、やさしく抱きとめた。
「そうすれば、あなたは生き延びられる」
「――嫌だ。君だけを死なせやしない」
「駄目よ、ギルバート」
囁く声に力がなくなってきた。「泣いて。声をあげて泣いて。情けない男だと、無力な王子

たを待っている。聞こえるわ、新たな王の誕生を祝う声が」

だと思わせておくの。すべてが終わったら、きっとあなたは生まれ変われる。みんなが、あなたを待っている。聞こえるわ、新たな王の誕生を祝う声が」

ギルバートは、アンナの言わんとすることが理解できた。

両親と妻を失い、失意に暮れる情けない王子を演じろと言っている。

憐れみを買ってでも生き延びろと言っているのだ。

ダムシアンの再生を考えるのならば、それが最善かもしれない。

しかし——

ギルバートは王子であることよりも、アンナの夫であることを選んだ。

愛する女性を静かに横たえると、立ち上がる。

はじめて湧き上がる殺意という感情に、戸惑いはあった。どうすれば自分を解き放つことができるのか見当もつかない。ただ、ふらふらと憎き漆黒の男に向かって歩を進める。

弓兵が、矢をつがえようとする。

剣士は片手で制し、王子を待ち受けた。

「名乗れ」とギルバート。

手を伸ばせば、その漆黒の甲冑に触れることができるという距離。

そこで足を止め、もう一度。「名乗れ！」

「我が名は、ゴルベーザ」と鉛の声が応えた。

――ゴルベーザ。

ゴルベーザ、ゴルベーザ、ゴルベーザ、ゴルベーザ、ゴルベーザ！

「ゴルベーザ！」

ギルバートは声の限りに仇の名を叫ぶと、固めた拳を振り上げた。

ゴルベーザが、そんな王子の目の前に右の掌をかざす。つぎの瞬間、いかなる力が働いたのか。ギルバートは腹部に強い衝撃を受け、そのまま背後に吹き飛ばされた。玉座を飛び越え、背中から壁に激突したギルバートは、そのまま倒れこみ、動かなくなった。

そこにダムシアンの王が、再び姿を現した。

＊

王の左手には、真紅の光をたたえた水晶が握られていた。

ダムシアンの象徴――〝火のクリスタル〟である。

王は息子たちには目もくれず、ゴルベーザの前に立ちはだかった。

クリスタルを奪われるのは、もはや避けられない。

だが、ただでくれてやるわけにはゆかない。

空いている右手で、腰に帯びていた剣を抜く。

ゴルベーザに突進する。
漆黒の男は動かなかった。
代わりに周囲のバロン兵たちが一斉に弓を引き絞り、矢を放った。
ただのひとりも的をはずした者はいなかった。
ゴルベーザが間合いに入る直前で王は立ち止まる。
全身から二十を超える矢が生えていた。
「ダムシアンに栄光あれ！」その場に崩れ落ちた。
床に転がった〝火のクリスタル〟を、ゴルベーザが拾い上げる。
それから周囲をゆっくりと見渡した。
ダムシアンの兵士たちは、呆けたように立ち尽くすだけ。
誰ひとりとして剣を抜こうとする者はいなかった。
「王の仇を討とうとはせぬか」
ゴルベーザは、玉座に背を向ける。
部下の兵に命じた。「城に火を放て。引き上げる」
ダムシアンの王は、薄れゆく意識の中で妻に、息子に、そしてアンナに礼を言い、そして詫びた。それでもその顔に、あるかなしかの笑みが浮いていた。
民なくば、国は滅びるしか道はない。

しかし、民あらばやがて国は栄える。
――我らミューア家は、その務めを果たした。
ただひとつ心残りがあるとすれば――
それは、新たにできた娘に、一度も〝父上〟と呼んでもらえなかったことだった。

7

離陸した《赤き翼》が、南西に向けて動きはじめた。
恐らくはバロンへ帰還するのだろう。
砂に足を取られ、何度も転倒するが、テラはその歩みを止めなかった。
激しい息遣い。噴き出す汗。とうに限界を超えているはずなのに、賢者と呼ばれる老人は前方をしっかりと見据えたまま、広大な砂漠を急ぐ。
砂漠の中央部にそびえ立つダムシアン城は、黒煙を上げていた。
火を放たれたのは明らかだ。
――アンナ、どうか無事でいてくれ。
祈りを胸に、ただ歩きつづける。
城門付近で消火活動に従事していた兵士のひとりが、テラの姿を認めた。

「中は危険です。立ち入ることはできません」
「うるさい」
テラは手にした杖で、立ちはだかる兵士に殴りかかった。
難なくかわされ、老人は転倒する。
「大丈夫ですか」罪悪感を感じたのか、兵士が手を差し伸べてくる。
それを振り払い、老人はよろけながらも立ち上がった。「アンナ、今ゆくぞ」
「アンナ……」兵士の表情が曇った。「彼女は——」
テラはその言葉のつづきを聞くつもりはなかった。
しばし兵士を睨みつけたあとで、城内へ足を踏み入れた。
セシルとリディアが、ようやく追いついてきた。
だが互いにかけるべき言葉が見つからない。無言で歩を進める。
煤(すす)にまみれた壁。すすり泣く少女。ときおり城全体が小さく揺れる。それと同時に上がる悲鳴。その場に座りこみ、ただ地面を見つめる老人の姿もあった。兵士たちが何かを叫び、走りまわっている。どの表情にも疲労と悲しみが色濃く浮いていた。
「——危ない」
背後からセシルの声が飛んだ。
頭上を見上げたテラが見たのは、崩落する天井。

リディアが目を固く閉じ、小さく悲鳴を上げた。
賢者の足は、まるで根が生えたかのように動かない。
テラは、何事かを呟いた。
つぎの瞬間、ひと抱えもある石の塊が老人を直撃した。
「テラ――」
駆け寄ったセシルの前で、その石の塊を押しのけて賢者が立ち上がる。
「ご無事でしたか。でも、どうして――」
「ふと思い出したのでな」テラは岩に潰される直前に、忘れ去っていた魔法のひとつ〝防殻(プロテス)〟を反射的に唱えていたのである。
「急ぎましょう」
セシルが声をかけると同時に、老人は走りはじめた。
長い階段を上り切ると、そこは玉座の間だった。
「アンナ――」
玉座の前で、石床に両膝をつく吟遊詩人の姿があった。
アンナが、その腕に抱きかかえられていた。
テラは、ふたりの前に立つ。
睨みつけるときの目でギルバートを見下ろした。

吟遊詩人が、ゆっくりと面を上げる。その顔は汗と涙にまみれていた。
「テラさん」ギルバートは、ゆっくりとアンナを横たえると、立ち上がった。
テラはギルバートを見ていなかった。
その視線は、娘の胸を染める鮮血に釘づけになっている。
「貴様、よくも娘を――」
杖を握る手に力がこもる。その杖を振り上げ、ギルバートを打ちすえた。
左の肩口を殴打された吟遊詩人は、その場に崩れ落ちる。
テラは、それでも殴った。殴りつづけた。「この痛みは、アンナの痛み――」
制止しようとするセシルとリディアを振り払い、賢者は殴る。
ギルバートは言い訳も抵抗もしなかった。ただ冷たい床に伏し、振り下ろされる杖の痛みにじっと耐えている。
「――やめて」
か細い声が、テラの怒りを瞬時に静めた。
「アンナ――」老人の手から杖が落ちた。「生きていてくれたか」
テラは娘のかたわらに膝をつくと、その頬にやさしく触れた。
「お父さん、彼は――ギルバートは、このダムシアンの王子なのよ」
「――」

「でも王族の生活に嫌気が差して、旅に出た。吟遊詩人と身分を偽ってね」

ギルバートが、ゆっくりと立ち上がった。

アンナはつづける。

「ごめんね、お父さん。勝手に家を飛び出しちゃって。私、ギルバートが好きなの。心から愛しているの。だから、どうしても一緒になりたかった」

「アンナ……」

「私、お父さんを説得できる自信がなかった。お父さん、頑固だから。そうしたらダムシアンの王様が、結婚のお許しをいただくためにご同行くださるって」

「そうだったのか」テラの目に涙が浮かんだ。

「バロンの《赤き翼》の襲撃を受けたのは、ちょうどそのときでした」ギルバートが震える声で言った。「砲撃のあとに、ゴルベーザと名乗る者が率いる兵士たちに攻めこまれ、クリスタルを奪われました。アンナは、ぼくをかばってこんなことに――」

「それほどまでに、こやつのことを……」

「私ね、さっきここで式を挙げたのよ」アンナが細い笑みを浮かべる。「お父さんに私の晴れ姿を見てもらえなかったのだけが心残りだけど――」

「いや、いいんだ。気にすることはない」

「……お父さん、泣かないで。私は幸せよ。ギルバートのお嫁さんとして死ぬことができるの

だから」アンナが目を閉じた。「お父さん、お願い。どうか、ギルバートを許してあげて。ふたりとも、心から愛してる」
ギルバートが両膝をつき、頭を抱えた。「アンナ——!」
テラは涙を拭うと立ち上がった。
「バロンのゴルベーザか。その名、しっかりと心に刻んだぞ」
アンナに背を向けると、歩きはじめた。
「テラ、どこへ——」とセシル。
「アンナの仇討ちに決まっているであろう」
「無茶だ。ひとりでバロンへ乗りこむなんて——」
「そなたらの助けなどいらぬ。ゴルベーザは、わしひとりで殺る」

8

父や母は、もういない。
愛するアンナも天に召されてしまった。
そして今、賢者テラがダムシアン城をあとにし、単身バロンへ向かった。
大切な人は、みんな消えてゆく。

ぼくは、そういう星のもとに生まれてきたのだろうか。
運命？　ああ、そうだ。これは避けられぬ運命なのかもしれない。
すべてを受け入れることしかできないギルバートは、己の無力を悔い、嘆き、涙した。
心の準備もできぬまま、一度に多くの愛する者を失いすぎた。
――なぜ、自分だけが生き残ってしまったのだろう。
父を母をアンナを、彼らを犠牲にしてまで、どうしてこのぼくが？
ギルバートは、自分の未来が闇に閉ざされていることを実感する。
これから、何を心の拠り所として生きてゆけばいいのかわからない。
否。そもそも、自分に生きる資格があるとは思えなかった。
だから泣く。みずから死を選ぶ勇気もない。泣くことしかできない。泣いて、泣き疲れれば眠ることができそうな気がする。きっと夢の中で、笑顔の両親とアンナが待ってくれているはずだ。そこで彼らと語らい、笑い、歌おう。いつまでも。
「――弱虫」
その声で、ギルバートは顔を上げた。
必死で涙をこらえる少女の顔があった。「お兄ちゃんは男でしょ、大人でしょ。それなのに、どうして――」顔を両手で覆い、泣き出した。
「そうさ。ぼくは弱虫だ。もう何もかも、どうでもいい」

吟遊詩人の胸倉を、漆黒の甲冑に身を包んだ男がつかんだ。
ギルバートは、息を呑んだ。
ふとゴルベーザを思い出してしまったのだ。だがあの恐るべき男とは異なり、暗黒騎士の発した声は澄んだ小川のせせらぎのようだった。
「君はダムシアンの王子ではないのか。残された民や兵士たちは、どうなる」
「ぼくと、これ以上関わり合いにならないほうがいい」ギルバートは自嘲した。「みんなを殺したのは、ぼくだ。民衆を導くことなんて――」
頬を張る音が、ギルバートから言葉を奪った。
「君は自分の血を信じないのか。王と王妃から受け継いだ魂を疑うのか」
「ぼくは――」ギルバートは顔を伏せた。「ぼくは駄目な人間なんだ。誰も助けられない。救えない。何のために生きているのか、自分でもわからない」
「いや、救える。ぼくたちは、君の助けを必要としているんだ」
ギルバートは、言われている意味が理解できなかった。
――誰かを助ける、このぼくが？
「ぼくはセシル。彼女はリディア」セシルと名乗った漆黒の騎士は、かたわらの少女に一瞬だけ視線を転じ、それからギルバートに向き直った。「ぼくたちの仲間が高熱病で倒れた。それを治すためには〝砂漠の光〟が必要だと聞いた」

「ぼくが君の仲間を——」
「そうだ。ローザのために……頼む」
ギルバートは、目を閉じた。
——なぜ、自分だけが生き残ってしまったのだろう。
脳裏に蘇ったのは、カイポで過ごしたいくつもの夜の出来事。
旅の途中ではじめてカイポへと立ち寄ったギルバートは、広場で自慢の喉を披露した。
村人たちの歓待を受け、ようやく解放されたのは深夜と呼べる時間だった。
しかし不思議と眠くならない。理由は考えずともわかった。
昼間、詩を聴くために集まってくれた村人たちの中に、気になる女性がいたのだ。
その人のことを考えると、胸がしめつけられるようだった。
心を落ち着かせるため、ギルバートは宿をそっと抜け出し、泉のほとりに腰を下ろした。
竪琴を奏でる。あの女性を想いながら。
と——。
気がつくと、意中の女性が目の前に佇んでいた。
「ごめんなさい、お邪魔だったかしら」
微笑む彼女に、詩人の胸は高鳴った。
「いや。寝ているところを起こしてしまったようだね」

アンナと名乗ったその女性は、首を振り、頬を赤らめた。「眠れなかったんです。昼間のあなたの歌声が私の心の中に、ずっと鳴り響いていて」
それからギルバートは、事あるごとにカイポを訪れるようになった。
ある夜、アンナが言った。
「あなたは運命を信じるかしら」
しばし考えたのちに、ギルバートは歌うように答えた。「人生は、偶然の連続。必然という存在は、まやかしさ。人は積み重なった偶然をあとになって振り返り、それが運命だと錯覚するに過ぎないんだと思うよ」
「――そうね」期待した言葉が返ってこないことに、アンナは失望しているようだった。
長い沈黙。
「そうね、何もかも偶然だったのかもしれない」アンナが小さく呟いた。
「アンナ――」
「でもね、思うの。私があなたと親しくなるまでに、たくさんの偶然があった。こうならなかった確率のほうが、ずっとずっと高いはずなのにね」アンナは、隣に座るギルバートの肩に頭を乗せた。「その偶然の連続は、私にとって特別なもの。ひとつひとつに、きちんとした意味があった。大切にしてあげたいなって思う。だから運命って呼んでもみたかったのかもしれないわ」アンナは夢見るように微笑んだ。

ギルバートはアンナの頬に触れ、そっとくちびるを重ねた。
——あのときに感じた温もりが、今でも心に残っている。
偶然のひとつひとつには意味がある。
その連続こそが運命。
ぼくが——ぼくだけが生き延びたことにも、何か意味があるのだろうか。
ダムシアンの王族のみが立ち入るのを許された洞窟。
絶滅寸前のアントリオンは、もはやそこにしか生息していない——。
背中から脇腹にかけての鈍い痛みがギルバートを現実へ引き戻した。
ゴルベーザの不可思議な力によって壁に激突した際に、負傷したようだ。
ギルバートは、ゆっくりとまぶたを開いた。
「ローザというのは、君の大切な人らしいね」
セシルが黙したまま、頷いた。
「愛する人を失ってはいけない。絶対に」
ギルバートの双眸に、光が戻っていた。

＊

アントリオンの洞窟は、ダムシアン城の東にあった。
その扉を開く鍵は〝声〟。ミューア家の血を持つ者だけが封印を解くことができる。
元は王家の儀式の場として使われてきた神聖な洞窟だった。
しかし絶滅が危惧されるアントリオンが巣を作ったことから、王はこの心やさしき魔物を保護するために洞窟を放棄。それ以来、長らく放置されてきたのである。
ギルバートが先頭に立ち、セシルらを導いた。
幼いころに訪れたことがあるだけだったが、それほど複雑な内部構造をしているわけではない。迷うことなく案内を務める自信はあった。
しかし――
内部に漂う異様な雰囲気に、ダムシアンの王子は眉根を寄せた。
「――どうした？」
セシルに訊かれたが、ギルバートは答えなかった。
きっと思い過ごしに違いない。そう決めつけることにした。
その違和感は、アントリオンの棲み処で現実のものとなる。
アントリオンという魔物は、巨大な甲虫のような姿をしていた。

その外観に似合わず、大人しい。これまで人に危害を加えたことがないとされていた。
「〝砂漠の光〟は、アントリオンが産卵のときに出す分泌物からできるんだ」
ギルバートが、すり鉢状の巣へと降りていったときだった。アントリオンの双眸が怒りを示す赤に変化した。上顎の両脇から突き出した一対の角が、侵入者に殺意のこもった一撃を見舞う。その寸前で、駆けつけたセシルに引き倒され、ギルバートは難を逃れた。
それからのことは、一切覚えていない。
気がつくと、アントリオンの亡骸の前にセシルとリディアが立っていた。
どうやら、ふたりの活躍によって魔物は退治されたらしい。
「ありがとう、助かったよ」
ギルバートは、セシルの手を借り、立ち上がった。
巣の奥を探ると、すぐに〝砂漠の光〟の元となる物質が見つかった。
「これさえあれば、ローザという人を助けることができる」
「助かったよ、ギルバート。君は命の恩人だ」
三人は、洞窟をあとにした。
セシルが手を差し伸べてきたので、ギルバートはそれを握り返した。
「ありがとう。ぼくたちは、これからカイポに戻る。いつか必ず、このお礼をするため、ダムシアンへ行く。ローザを連れてね」

「いや、ぼくもカイポへゆこう」
セシルとリディアは、驚いたように目を丸くした。「しかし、ダムシアンの復興は――」
「民や兵士たちには負担をかけてしまうことになるだろうね。でも、ぼくにはやらなければならないことがある。今、それを見つけたような気がするんだ」
偶然のひとつひとつには意味がある。
その連続こそが運命――。
ぼくは、このために生かされた。
ギルバートは、西の彼方を見やる。いまだ黒煙を上げるダムシアン城があった。
「魔物の増大。バロン王の乱心。アントリオンの凶暴化。世界中で、何かが起こりつつある。ダムシアン陥落も、その序曲に過ぎないのだろう」
脇腹の鈍痛も、今はなぜか心地よい。痛みは生きている証なのだから。
アンナ、見ていてくれ。ぼくは、もう運命から逃げ出さない。



第3章

FINAL FANTASY IV

ファイナルファンタジーIV

1

バロンのつぎなる標的は、ファブールの〝風のクリスタル〟であろう。

それがセシルとギルバートの共通した見解だった。

リディアは、何も言葉を挟まずに、ただ彼らに従った。

本当は恐ろしくて逃げ出したかった。訪れたファブールで、再び悲しい出来事に遭遇するかもしれないと思うと、足がすくみ、動けなくなってしまう。それでもセシルたちと行動をともにするのは、他に行く当てがないからだった。

故郷の村は、もはやない。

そしてバロンは、ミストの召喚士を狙っている。

他に選択肢など存在しないのだ。

一行は、足を止めた。

場所はダムシアンの北東。行く手を阻むこのホブス山を越えれば、ファブール領へ入ることができるという。しかし――。

ホブス山の登山口は分厚い氷に閉ざされ、人の往来を拒んでいた。

「迂回路は？」とセシル。

ギルバートは首を振った。「ここが、唯一の道なんだ。この氷の壁を何とかしなくては、陸

路でファブールへ入ることはできない」

その言葉が、リディアの胸に突き刺さった。

氷壁を溶かさない限り、また誰かが不幸になる——そう言われているように感じられたのだ。

それができるのは、リディアしかいない。炎の魔法で——。

召喚士の少女は、後退った。

このところ、毎晩のように悪夢を見る。

業火に包まれた村に、ひとり取り残されている夢だ。

これまでリディアは、魔法を恐ろしいものだと思ったことはなかった。

そもそも誰に魔法を教わったわけでもない。

彼女が生まれ育ったのは、辺境の貧しい村。外界から隔絶されたその地ゆえに、必要なものは、自分たちの手で作り出さなくてはならない風潮があった。

言わば、魔法は生活の知恵の延長上にあるもの。

心に描いたものを現実世界へ転移させる、便利な技術という程度の認識だ。

当然、ミストの血を意識したことなど一度もない。

その魔法があれほどの惨事を引き起こしたことに、リディアは強い衝撃を受けていた。

火は恐ろしい。

火が憎い。

それなのに――。
「リディア、〝炎撃(ファイア)〟は黒魔法の初歩。あなたが、それを唱えられないわけがないわ。お願い、やってみてくれないかしら」
言ったのは、ローザだった。
アントリオンの洞窟で〝砂漠の光〟を入手した一行は、カイポへと戻り、そこでローザの意識を取り戻すことに成功した。当初、セシルはローザをカイポへ残し、ファブールへ向かう心づもりだった。しかしローザはそれを拒んだ。
みんなが、自分ではない誰かのために懸命になっている。
たとえ病み上がりであっても、自分にも何かできることがあるはず。
ローザは、そう言い切り、半ば強引に一行に加わったのだ。
「リディア、お願いよ」
リディアは、ローザから視線を逸らせた。
その先にはギルバートの顔があった。
リディアは、昨夜のカイポでの出来事を思い出す。
ローザが回復したあの晩、ギルバートはひとり宿を抜け出し、泉のほとりで竪琴を奏でていた。それを陰からリディアは見ていたのだった。
ギルバートは、誰かと話をしていた。

相手の姿はリディアには見えなかったが、彼は違っていたようだ。
きっとギルバートは、アンナさんと話をしていたんだわ。
「リディア……」
そのギルバートの声で、リディアは我に返った。
アンナさんがギルバートを見守ってくれているのならば、お母さんもきっとどこかであたしのことを——そう思えてきた。
「あたし、やってみる」
言って、リディアは静かに目を閉じた。
心に思い描いたのは、炎。
一瞬にして視界が真紅に染まった。
と——。
その中心に、倒れている母親の姿が浮かび上がる。
——お母さん！
駆け寄り、抱き起こす。
周囲の炎が、次第に勢いを増してゆく。肌が焦がされ、息もできない。
早く逃げ出さなければ、この炎に焼かれてしまう。
しかし母親を置いて逃げることなどできるはずもなかった。

お母さん、起きて。目を覚まして。
そう叫びながらも、まぶたを開いてくれないのを、心のどこかで理解していた。
そう、お母さんは、もう死んでしまったのだから。
湧き上がる悲しみが、周囲の炎を消してゆく。
どこからか母親の声が聞こえてきたのは、そのときだった。
『なぜ火を恐れるのです』
だって、火は村を燃やして、みんなの命を――。
『使い方を誤れば、そうなるのは当然のことでしょう。雨がたくさん降りつづけば、川は氾濫し、作物を腐らせ、ときには人命をも奪います。けれども、私たち生き物は、水がなければ生きてゆくことはできません。火だって同じなのよ』
でも、お母さん……。
『あなたがおいしいと食べてくれた料理も、火の力をなくして作れないわ』
お母さんの料理――
『火にも水にも、そして風にも心はあります。大切なのは、その心。彼らは、正しく使われることを願っているのです』
周囲の光景が、ゆっくりと消失してゆく。
『あなたなら大丈夫よ、リディア』

闇の中、母親の声だけが響く。

『つらいこと、悲しいこともあったわ。でも、それよりももっとたくさんのうれしいこと、楽しいことがあった。それは、魔法が私たちを支えてくれたからなのよ。私たちは、いつも魔法とともに生きてきたことを忘れてはなりません』

リディアは、楽しかったあのころを心に思い描いた。

あれは確か――去年の冬だったかしら。

みんなに内緒で、一生懸命に魔法の練習をした。

はじめてうまくいったときはうれしくて、それをお母さんに見せて驚かせようと走って家へ帰ったのを覚えている。

きっとお母さんは、あたしの顔を見て、あたしが何をしようとしているのか全部わかっちゃったのね。でも、あのときのあたしは全然そんなことに気づかなかった。

ただ、やっと扱えるようになった魔法を見せたかっただけ。

お母さんは、あたしに言ったわ。

「リディア、今日は寒いわね。暖炉に火を入れないと凍えそうよ」

それであたしは得意げに、〝炎撃(ファイア)〟を唱えてみせた。

お母さんは目を丸くして、あたしをやさしく抱きしめてくれた――。

リディアは、ゆっくりとまぶたを開いた。

ホブス山を閉ざす氷の壁が眼前にそびえ立っている。
あなたの魔法は――
そよぐ風に母の声が溶けているように感じられた。
みんなを笑顔にしてあげられる力があるのよ。
セシルやローザ、そしてギルバート――リディアは、仲間たちの顔を順に眺めた。
誰もが心に深い傷を負い、それでも怯えず、たとえ涙を流したとしても歯を食いしばり、見えない明日を探し出そうと必死になっている。
みんなは、どんな顔で笑うのだろう。
きっと、素敵な笑顔だと思う。
あたしも笑いたい。みんなと一緒に心の底から、声を出して笑いたい。
そのためなら――
リディアのくちびるが動いた。言葉では言い表わせない韻律を口ずさむ。
かすかに震えた大気を触媒として、魔法が発動した。
行く手を阻む氷壁がゆっくりと溶けてゆく。
ファブールへたどり着かねばならない。
ゴルベーザ率いる《赤き翼》よりも先に。何としても――。

2

ホブス山をゆく一団があった。

屈強な男ばかりが十八人。

そのいずれも鍛え上げた己の肉体を誇示するかのように、上半身をさらけ出している。頭頂部の頭髪のみを編んで残し、他をきれいに剃り上げるのは、この地方にのみ伝わる風習。ファブールの男性は、成人を迎えると弁髪にするのが慣わしなのだ。

その中のひとり——先頭を進むひと際大きな男だけが、髭を蓄えていた。

名は、ヤン。

もとは旅の修行僧を受け入れていた寺院が次第に発展し、国家となったのが現在のファブール。武道を修練の一環と位置づけており、やがて自衛と修練のために僧兵団が組織された。

ヤンは、その僧兵たちをまとめ上げる長である。

十八人の男たちは、黙したまま、ただひたすら岩場を登ってゆく。

ここホブス山は、ファブールの僧兵たちの修練の場。

その目的は、兵力の増強というよりも、自己鍛錬。揺るぎない精神を育てるためには、まずは肉体を極限まで鍛え上げるべき——それがファブールの古来からの考え方だった。

ヤンが僧兵たちに直々に稽古をつけることもあったが、通常、鍛錬はそれぞれの僧兵が工夫

し、独自に行なうため、このように徒党を組むのはめずらしい。
それにしても――
とヤンは嘆息する。
僧兵たちの技量が低下したのか。
あるいは噂されるように、魔物が本当に凶暴化したのか。
いずれであっても好ましくない。
今日は、自分の目でそれを厳しく見極める必要があった。
そして、もうひとつ。
昨日、修行のために単身、このホブス山の山頂を訪れた僧兵のひとりが、遠く西にそびえるダムシアン城から黒煙が上がっているのを見たと言うのだ。
そして、飛び去る《赤き翼》も目にしたらしい。
誰もが、それを笑って聞き流した。
大国バロンが商業国家ダムシアンに攻め入る理由など、思い当たらない。
昼寝でもしていて、寝ぼけていたのだろうというのが大方の見方だった。
かくいうヤンも、そのように思ったひとりである。
とはいえ、どこか釈然としないのも、また確かだった。
ゆえにヤンは、自分の目で真実を確かめたいと思ったのである。

ヤンとその一行は、頂上へと歩を進める。
口を開く者はいなかった。
僧兵たちは緊張した面持ちで、周囲を気にしている。
――何かがおかしい。
誰もがみな、違和感を覚えていた。
邪悪な気配に、ではない。魔物の気配が、どこにも感じられないのである。
人間に襲いかかる隙を窺い、どこかに身を潜めているのか、あるいはきれいに消え去ってしまったのか。いずれにしてもおかしな話だ。
ヤンは修行のため、幼少時から数え切れないほどこのホブス山を訪れている。
だが、このようなことは一度たりともなかった。
不吉な前触れとしか思えない。
――やがて、山頂が見えてきた。
そこでヤンたち一行は、我が目を疑った。
遠く西の空に黒煙が立ちこめている。
ダムシアン襲撃は本当のことだったのだ。
あまりの衝撃に、それに気づくのが遅れた。
ひとりの僧兵の悲鳴を聞き、ヤンは我に返る。今まで、いったいどこに身を潜めていたのか、

数え切れないほどの魔物たちが間近に迫っていた。
「怯むな、迎え撃て！」
ヤンが声の限りに叫ぶが、誰の耳にも届いていないようだった。
いかに鍛え抜かれた僧兵といえども、無尽蔵の体力があるわけではない。
加えて不意を突かれたことが災いし、持ち前の冷静さが失われている状態だ。
ひとり、またひとりと僧兵たちが魔物の毒牙に倒れてゆく。
気がつけば、生き残ったのはヤンだけとなっていた。
「もはや、これまでか――」
さしものヤンもあきらめかけたそのとき、自分の体を包みこむ淡い光に気づいた。
同時に、肉体に刻まれていた無数の傷が癒えてゆく。
「これは〝治癒(ケアル)〟――」
振り返ったヤンが目にしたのは、四つの影だった。

＊

セシルと名乗る漆黒の騎士から聞かされた話は、にわかには信じがたいものだった。ゴルベーザなる人物の率いるバロンの軍勢が、ファブールの象徴である〝風のクリスタル〟の強奪を画策しているというのだ。

ヤンは、自分の命を救ってくれた四人の顔をゆっくりと見まわした。

漆黒の甲冑に身を包んだ騎士セシル、美貌の白魔道士ローザ、吟遊詩人という出で立ちをしたダムシアンの王子ギルバート、そしてミストの村の少女リディア。

窮地を救ってくれた恩人たちの言葉を疑うわけではない。

現に隣国ダムシアンは《赤き翼》の襲撃を受け、陥落している。

それでも納得がゆかないのは、バロンがクリスタルを狙う理由が、皆目見当がつかないからだった。いったい、何のためにクリスタルなど欲するのか。

〝風のクリスタル〟は、ファブールの象徴的な存在。

ファブール王国を興した初代国王は、淡い光を放つクリスタルの前で瞑想したことで悟りを開いたと伝えられている。以来、現在に至るまで数え切れないほどの僧たちがクリスタルの前に座し、心の目の開くその瞬間を体感しようとの試みをつづけている。もちろん、初代国王のように悟った者は、いまだにひとりとして現れていない。

ヤンは、クリスタルの力を疑っているわけではなかった。
あの光を浴びていると不思議と心が安らぎ、精神の平静が保たれる。
それは錯覚などではなく、事実なのだとヤンは思っていた。
しかし、それ以上でもそれ以下でもない。
だからこそ、あくまでもファブールの〝象徴〟なのだ。
戦をしてまで奪い合うようなものでは決してないはずだった。
ましてや、ギルバートの話によれば、バロンは宣戦布告もなしに奇襲を仕掛けてきたという。
考えるほどに、わけがわからなくなる。
なぜバロンは、そこまでしてクリスタルを欲するのか。
「先刻の魔物たちの襲撃も、ゴルベーザの手によるものかもしれない」
そのセシルの言葉で、ヤンは我に返った。
失った十七人の僧兵たちは、ファブールの主力部隊。
それも向こうの策のひとつだとしたら――!
そうだ、今はバロンの真意に思いを巡らす余裕などない。
敵は、着々とファブール攻略の準備を整えているのだから。
ヤンは、もう一度、四人の顔を見まわした。「助太刀を願えるだろうか」
「もちろんだ。ぼくたち四人は、そのためにここまでやって来た」

セシルが右手を差し出す。
それをヤンは、強く握りしめた。「かたじけない」
「行こう、ファブールへ」

3

戦は、唐突にはじまった。
《赤き翼》からの砲撃を受け、城全体がびりびりと震える。
遠く剣戟の音が聞こえた。
セシルやギルバートの加勢があるとはいえ、精鋭を欠いた僧兵たちでは、とても勝ち目があるとは思えなかった。それでも闘うのは〝風のクリスタル〟が、このファブール王国の象徴であり、そして何より誇りであるからだ。
ローザは、前線に立つセシルの無事をひたすら祈りつづけていた。
ファブール城の右の塔、最上階――
王やヤンの妻シーラたちを守るのが、ローザとリディアの役目である。
戦力の不足を補うべく、本来ならばローザたちも闘いの場に身を置くべきだった。だが、ギルバートによれば、バロン――ゴルベーザはクリスタルの強奪だけでなく、敵国の弱体化をも

目的としているらしい。となれば、真っ先に狙われるのは、王の命。
セシルの提案で、ローザとリディアは王の護衛につくこととなった。
しかしローザは、それを額面どおりには受け取っていなかった。
私たちを前線に立たせまいとして――。
だから祈る。今、自分にできるのは、こうして愛する人の無事を祈ることだけなのだ。
「――セシルが心配？」
その声に、ローザは我に返る。
目の前には、心配そうな面持ちのリディアが立っていた。
返すべき言葉を思いつかず、ローザはただ微笑んだだけだった。
「ところで、ローザ殿。そのゴルベーザという男は、いったい――」
言ったのは、ファブールの王。
若いころ、相当な修練を積んだのであろう。髪に白いものが混じり、肌に深い皺が刻まれてはいたが、眼光の鋭さと腕の太さに衰えは見えない。
「じつのところ、私にもよくわからないのです」
ローザは静かに目を閉じた。
幻獣討伐の任務は、セシルを失脚させるための罠である――。
そのことをビッグスから聞いたローザは、そのまま城を飛び出し、セシルとカインを追うつ

もりだった。ところが、そこでバロン城内へ悠然と入ってくる影を目にする。
漆黒の甲冑に身を包んだ男――ゴルベーザだった。
まるで王族の一員のように振舞うゴルベーザの存在に違和感を覚えたローザは、出発を遅らせ、ビッグスとともに彼の動向を探った。
それでローザが城を発ったのは、つぎの日の早朝になってしまった。
「ゴルベーザが、どこから来て、どのようにして陛下に取り入ったのか――私たちには、何もつかむことはできませんでした。ただビッグスが調べたところによると、陛下とゴルベーザは、以前から何らかのつながりがあったように見受けられるとのことです」
「バロン王は、ゴルベーザの傀儡と化した。そう考えるべきであろうな」
「はい。陛下みずから他国への侵略や略奪行為を指示するはずがありません」
そう、そんなことをするはずがない。
いつも父親のように接してくれたあのお方が――。
――と。
溢れる涙をぬぐい、ローザは背後へ視線を転じる。
固く閉じられた扉が目に入った。
「ローザ殿も気づかれたか」とファブール王。
静寂。

まるで戦など起こっていないかのように思えてくる静けさ。
抵抗も空しく、ついにクリスタルを奪われてしまったのだろうか。
「セシル――」
ローザは、無意識のうちに愛する人の名を呟いていた。
「行ってやりなさい」
ローザは、声の主を振り返る。ファブール王の柔和な笑みがあった。
「ですが――」
「心配ならいらないよ」王の横に立つ女性が、にこりと微笑んだ。「うちの亭主ほどじゃあないけど、あたしだって腕に覚えがあるんだから。さあ、行っといで」
ふた呼吸ほどの間。
ローザは深く頭を下げたあとで、リディアとともに部屋を飛び出した。
石造りの階段に、駆け降りる足音が響く。
だが、それを気にしている場合ではない。
塔から一度屋外へ出、再び城内へ。
そこでふたりは足を止めた。
腰のあたりにリディアがしがみついてくる。
ローザは、そんな少女をやさしく抱きしめた。

「突破されたのね」
そこには、血にまみれ、力尽きたファブールの僧兵の遺体がいくつも転がっていた。
そして、それ以上の数の異形の者の亡骸も。
ローザは混乱した。《赤き翼》の襲撃を受けたはずのこの城に、どうして魔物が――。やはりゴルベーザは、人心を惑わすばかりではなく、魔物を操る術も身につけているようだ。
ふたりは、玉座の間へと向かう。
そこにも動く者はいなかった。
奥に開け放したままの石の扉があった。その奥から、聞こえてくるのは剣戟の音。
ローザとリディアは、顔を見合わせた。が、それは一瞬のこと。ふたりは同時に走りはじめた。扉の向こうに、誰かがいる。
セシル――！

＊

「――カイン！」
ローザの悲鳴に、振り上げた刃が静止した。
「どうして……」思考が空転し、それ以上の言葉は出てこなかった。

玉座の間の奥——クリスタルの安置されている部屋へと駆けこんだローザとリディアは、そこで想像もしなかった光景に遭遇した。
ふたりは、バロン兵に抵抗をつづけるセシルたちの姿があると思いこんでいた。しかし最初に目にしたのは、行方がわからなくなっていた竜騎士カイン。そしてそのカインは、床に伏したままのセシルにとどめを刺そうとしているところだった。
「どうして」ローザは、再び同じ言葉を口にした。
セシルとカインは親友同士。闘う理由などあるわけがない。
竜騎士が周囲に発散させていた殺気が、瞬時にして消えた。頭上に掲げていた切っ先を下げると、ローザから目を逸らせる。「俺を見るな」
ローザは、そんなカインに駆け寄ると、
「あなたは、セシルと一緒にバロンを抜けたはずでしょう」
震えるその肩に、そっと触れた。
「そうだ。目を覚ませ、カイン」
とセシル。ヤンとギルバートの手を借り、立ち上がった。
ローザは、カインの正面にまわり、その顔を覗きこんだ。
「ミストの谷の崩落で行方がわからなくなったと聞いたわ。それなのに——」
カインは黙したまま、何も語らない。

ただ、かつての親友であるセシルを見つめている。
その双眸に、自分の知らない光があるようにローザは感じた。
——そのときだった。
「何を迷っているのだ、カインよ」鉛のように重い声が響き渡った。
弾かれたようにローザは、カインから離れた。
セシルが、その彼女を自分の背後に押しやり、身構える。「貴様がゴルベーザか」
現れたゴルベーザは、セシルの眼前で足を止めた。
闇色の甲冑を身にまといし者同士が対峙する。
しかし同じ黒でも、その色調が微妙に異なっていた。
一方は、一切の色彩を抜き取られた黒。言わば喪失の象徴。
もう一方はすべての色彩を呑みこんだ末路の黒。すなわち飽食の象徴。
「セシル——」
ローザは、愛する男のその震える背中に、そっと触れた。セシルは、怯えていた。ゴルベーザに恐怖を感じているのだ。それが掌をとおして、痛いほど伝わってくる。
そう、セシルこそが前者だった。
望まぬ暗黒騎士に抜擢され、闇の中、たったひとりで生きてきた。
父と慕う王のために己を殺し、その恩義に報いるためだけに技を磨いてきた。

真の闇を前にして、その虚飾は無残にも剥がれ落ちたのである。
「――ほう。貴様がセシルか」
漆黒の面頬の奥から、雷鳴が轟くような声。嗤っているようだった。
――と。
ゴルベーザが、右の掌を前方へかざした。
つぎの瞬間、視界が青白く発光し、雷に打たれたかのようにセシルが崩れ落ちた。
「セシル――！」
ローザの悲鳴と同時に、ヤンが光の疾さで動いた。
ゴルベーザへと突進。
だが、ヤンは短い悲鳴を残し、ギルバートとともに背後へと弾き飛ばされた。
瞬きする間もなく、三人が倒され、苦悶の表情を浮かべることになった。
最後の望みは――
「――カイン！」ローザは、声の限りに叫んだ。
名を呼ばれたカインは大きく体を震わせたあと、ゴルベーザへ視線を転じた。
ゴルベーザもまたカインを見つめている。
しばらくの沈黙のあと、竜騎士は顔を伏せた。頷いたかのようにも見えた。そしてローザに背を向け、台座へ歩み寄ると、そこに安置されている〝風のクリスタル〟を手にした。



「まさか――」
ローザは気づいた。バロン王、そしてその配下の兵士たちがそうであるように、カインもゴルベーザに操られ、意のままに動いているのだ。
ゴルベーザを睨みつける。「いったい、カインに何をしたの」
そのときだった。
「いけない」床に伏したセシルが、震える手をローザに伸ばす。今、ゴルベーザを刺激しては自分たちと同じ目に遭ってしまう。そう考えたのだろう。「やめるんだ、ローザ」
しかし、力ないセシルのその言葉が仇となった。
「なるほど、その女がローザか」
ゴルベーザが鉛の声で言った。何かをおもしろがる口調だった。
ローザは息を呑んだ。ゴルベーザに腕をつかまれたのだ。
抵抗しようとするが、面頬の奥に光る双眸に射すくめられたかのようにその気力は失せ、全身から力が抜けていった。
遠のく意識。最後に聞いたのは、カインの声だった。
「――命拾いしたな、セシル」

4

その男の遺体は、バロン城の東の塔の地下に放置されていた。
床板の隙間から漂ってくる腐臭を不審に思って調べたところ、ビッグスは何者かによって隠されていた、地下へとつづく階段を見つけたのだった。
――こんなところに地下室が？
吐き気に耐えながら、ビッグスはひとり地下通路を進む。
通路は行き止まりになっており、一体の死体が横たわっていた。
ビッグスは息を呑んだ。もう腐臭は気にならなくなっていた。遺体に駆け寄り、それにすがって声の限りに泣いた。それは、バロン王の成れの果てだった。
やはり、今、玉座に座っている陛下は真っ赤な偽者――。
王を殺害した賊は、その遺体をここに棄て、権力を握り、このバロンを意のままに動かしている。それは、もはや間違いない。
涙の枯れたビッグスは、この地下通路に急ごしらえの玉座を作り、そこに亡きバロン王を座らせた。本来ならば、きちんと埋葬すべきなのだが、城内は昼夜を問わず兵士の姿が絶えない。腐臭を放つ遺体を、誰にも見咎められることなく運び出すのは不可能だった。
以来、ビッグスはここに日参し、バロンの惨状を報告することをみずからに課した。

今日もまた、人目を忍び、ここへ足を運んだ。
半ば白骨化した王の姿を見つめていると涙が溢れてくる。
「王よ……状況は昨日よりも、さらに悪化しております」
そこまで言って、ビッグスはつづく言葉を呑みこんだ。
――こんなことをして、いったい何になるというのだろう。
ビッグスは、跪いたまま、視線を床に落とした。
王としての重責からようやく解放されたこの屍に、俺はなおも何かを期待し、すべてを押しつけようとしている。
自分は《赤き翼》に所属する隊員のひとりでしかない――それを言い訳として、やらねばならないことから逃げ、直視しなければならない現実を見ずにいようとしている。
そうだろ、ビッグス？
お前は、自分では何も行動を起こそうとはしない。
違うか、ビッグス？
ああ、そうかもしれない。だが、仕方のない話ではないか。
家臣のみならず、兵士たちもみなあのゴルベーザという男によって魂を奪われてしまっている。もはや正気を保っているのは、自分とウェッジだけだと思われた。
その状況で、いったい何ができるというのだ。

やがて自分たちの心も奴に支配され、殺戮と強奪のための尖兵として使われることになるのかもしれない。そのときは刻一刻と迫っている。

そこに足音。

弾かれたように立ち上がったビッグスは、すぐに緊張を解いた。

同じ《赤き翼》の隊員で弟分のウェッジだった。

そのウェッジの顔面が蒼白なことに気づき、ビッグスは眉根を寄せた。

「何があった？」

「新しい情報が入りました」

ウェッジの口調から、それがよくない知らせであることがわかった。

「カイン様が裏切ったそうです」

「どういうことだ」

「バロンに――ゴルベーザ側についたということです」

ビッグスは言葉を失った。

竜騎士団の部隊長であるカインも、ゴルベーザの魔力に心を支配されてしまったのだ。

「それから――」ウェッジがつづける。「ローザ様がゴルベーザの手に落ちました」

もはやビッグスには、何かを言い返す気力は残っていなかった。

「ダムシアンについでファブールが陥落。これでゴルベーザは、三つのクリスタルを手中に収

めたことになります。残るクリスタルは、トロイアの〝土のクリスタル〟のみ」
「時間の問題だな」ビッグスは力なく呟いた。
トロイアは、森と水の都。国家を名乗っているものの軍隊を持たず、八人の女性神官によって統治されている。《赤き翼》の襲撃を受ければ、ひとたまりもないだろう。
「それから、もうひとつあります」
「まだ、あるのか」
もう聞きたくないとばかりに、ビッグスはウェッジに背を向けた。
「奪われたクリスタルを取り戻すため、セシル様がファブールから船に乗ったそうです」
ビッグスは、ウェッジを振り返った。
「それは本当か」
「ええ、確かなようです」
「――そうか」
闇の中に希望の光が射しこんだことで、ようやくビッグスの顔に笑みが戻った。「セシル様がお戻りになれば、きっと道は開ける」
しかしウェッジの顔色はすぐれない。「その情報が私の耳に入ったということは――」
「ゴルベーザも、それを承知しているわけか」
「はい。その船を《赤き翼》で沈めようとの計画が浮上しています」

ビッグスは頭を抱えた。
今や飛空艇団《赤き翼》は、近衛兵団の管理下に置かれている。ビッグスやウェッジは、ゴルベーザに操られているように振舞うことで怪しまれずに活動をつづけてはいるが、近衛兵団の隊長ベイガンに許可なく《赤き翼》へ近づくことはできない。
ふたりは、飛空艇という翼を奪われた鳥なのだ。
——と。
『忘れたか』
どこからか声がした。
ふたりの体に緊張が走る。どこかで聞いたことのある、懐かしい声だ。
「陛下——」
ウェッジの言葉に、ビッグスの視線が王の亡骸へと向けられる。
落ち窪んだ眼窩に、あるかなしかの光が宿っていた。
『《赤き翼》とは、国のため、民衆のために闘う者の呼び名』
ビッグスは、思い出した。
セシル隊長に何度も叩きこまれた、あの言葉だ。
「《赤き翼》は飛空艇の名にあらず——」
ビッグスが呟くと、王は微笑んだようだった。

つぎの瞬間——
バロン王は、ふたりの目の前で忽然と姿を消した。
「陛下——」
そこには、主を失くした粗末な玉座が、ぽつんとあるだけだった。

5

寄せては引く波に、足場が不規則に揺れている。
めまいに視界を乱され、ギルバートは危うく転倒しそうになった。
積荷の木箱につかまって体を支え、目を閉じる。
ひたいに浮いた汗が頬を伝って顎の先端に溜まり、足元に滴り落ちた。
「——大丈夫？」
ふいにかけられた声に、ギルバートは全身を震わせた。
目を開くと、そこに緑の髪をした少女の姿があった。不安そうな表情で、こちらの顔を覗きこんでくる。「……顔が真っ青よ」
出航を間近に控えた、甲板の上——。
船は、間もなくファブール港をあとにし、バロンへ向かう手筈になっていた。

目的はローザの救出とクリスタルの奪還である。
バロンの主力部隊は《赤き翼》と竜騎士団。セシルによれば、そのために海路は比較的手薄だという。そこでファブールの王に船の調達を頼んだのだった。
そろそろ出航の準備が整うはずだった。
船が港を離れてしまえば、もはや後戻りはできなくなる。
――逃げ出すなら、今しかないぞ！
心の奥底から聞こえてきた囁きに、ギルバートは身を震わせた。
「寒いの？　震えてるけど――」
リディアの小さな掌が、吟遊詩人の腕に触れた。
その温もりが、ギルバートにはうれしかった。だから、
「いや、何でもないんだ」と嘘を言った。少女を安心させようと必死で笑顔を作った。だが、うまくいかなかったのは、リディアの目を見ればわかった。
「それじゃあ……怖いの？」
当人にすれば悪意などない一言だったのだろう。
それがギルバートの心を容赦なくえぐった。
しかし、その痛みは不思議と心地よい。
すべてを吐き出すきっかけを、この子は与えてくれたのだから。

「ああ、そうだね。怖いよ。ここから逃げ出したいほどに」

それは嘘ではなかった。だが、本心でもない。

しばしの沈黙のあと、少女の視線がギルバートから自分の爪先に落ちた。

「あたしも」

「君も？　でも君には魔法がある。幻獣たちの加護もある。なのに――」

「バロンは怖くない」リディアが弾かれたように顔を上げた。「怖いのは――」その瞳が、船首のあたりにいるセシルとヤンに向けられた。「みんなのやさしさ」

ギルバートは、目頭が熱くなるのを感じた。

こんなに幼いというのに、何と気丈なことだろう。

「リディアは強いんだね」

少女が吟遊詩人を振り返る。「ギルバートだって」

「ぼくが――強い？」

「怪我をしてることを隠してる」

「――」

「セシルだって、ヤンだって、そのことに気がついてる。あたし、ふたりが話してるのを聞いちゃったんだ。ギルバートをバロンに連れて行くべきかって」

「それで――結論は？」

「本人に任せようって」
「そうか――」
「ギルバートも怖いんでしょ？　みんなのやさしさが」
「――ああ」
溢れる涙に、リディアの顔が揺れた。思わず頭上を仰ぐ。
雲ひとつない晴れ渡った空の青が、心を癒してくれるようだった。
ゴルベーザのあの不可思議な攻撃を二度に渡って受けたことで、ギルバートの肉体は限界を超えていた。今では、呼吸をするだけで脇から背中にかけて激痛が走る。
この体でバロンと闘うことなどできるはずもない。
死ぬのが怖いわけではなかった。
足手まといの自分を、セシルたちは決して見捨てないだろう。そのことで彼らが窮地に陥る可能性だってある。怖いのは、それだった。
自分がバロンへ行けば、みんなを危険にさらすことになる。
今、ここから逃げ出せば、やがて傷が癒え、痛みは消えてなくなるだろう。
だが、代わりに心に一生かかっても治すことのできない傷を負うことになる。
いずれの道を選ぶべきか――。
出航が間近に迫りながらも、ギルバートは答えが出せずにいたのだった。

「こんなぼくでも、みんなの役に立つことができるだろうか」
「できるよ」リディアが即答した。
ギルバートは、少女に視線を転じる。
やさしい、そして眩しい笑顔が、そこにあった。
「できるよ、絶対に」リディアが、もう一度くり返した。
「ああ、そうだね」リディアの肩を抱いた。
疼くような背中の痛みは変わらなかったが、もうそれが心を折るようなことはない。
船首を見やる。
セシルとヤンが、こちらを見つめていた。
ギルバートが頷くと、ふたりの顔に笑みが浮かんだ。
出航のときが迫っていた。

6

「——来ないで！」
ローザの鋭い声に、カインは足を止めた。
バロン城の左の塔。

その最上階、セシルの私室にふたりはいた。
ローザが部屋の奥に置かれている寝台の前に立ち、涙を浮かべていた。
それをカインは、一切の感情を排した目で見つめている。
「あなたは、ゴルベーザに操られてるのよ」
お前は、なぜ俺を理解してくれないのだ？
「だから、あなたはこんなことを——」
お前は、なぜ俺を理解しようとしないのだ？
苛立ちにも似た感情が心に生じた。それが、カインの背中を押す。
一歩、距離が詰まった。
ローザが息を呑み、後退る。しかし、その背後には寝台。
「来ないで」懇願するときの口調になっていた。
「あきらめろ」また一歩、近づく。「もう、お前は奴に会うことはない」
そのとき、ローザの目に強い光が戻った。
白魔道士の手に、短剣が握られている。
窓から差しこむ陽光が、その刃をぎらりと光らせた。
「俺を——刺すか」
ああ、それもいいだろう。

ここで果てれば、心残りはあるとしても、これ以上苦しまずにすむ。
しかしローザは――
「そんなことはしない。あなたはゴルベーザに操られているだけなのよ」微笑んだ。昏い笑みだった。「わかってるわ。あなたには、何の罪もない」
カインは、胸が強くしめつけられるような感覚に陥った。
ローザが短剣の切っ先を、自分の右の掌に押し当てた。
皮膚が薄く裂け、血の赤がにじむ。
「セシルに、もしものことがあれば――」
ローザは、今度はその血に濡れた刃を自分の喉もとへ当てる。「私も一緒に」
カインは大きく息を吐いた。
彼女のその覚悟に、一切の偽りはないのだろう。
だが、それは俺が望むものではない。
カインは、ローザに背を向け、歩きはじめた。
部屋をあとにする直前。
「セシルは、まだ生きている。ヤンもギルバートも、そしてリディアも。きっとゴルベーザを倒してくれる。そうすれば、あなただって――」ローザが言った。
カインはくちびるを開いたが、

——ゴルベーザが死んだところで、俺は何も変わらない。
その言葉を呑みこんだ。
操られているだと？
大声で嗤いたかった。
ローザをその場に残し、カインはひとり玉座の間へ向かった。

＊

玉座に腰を下ろしているのは、ゴルベーザだった。
バロン王と近衛兵長ベイガンが、その前で跪いている。
カインが現れると同時に、ベイガンが立ち上がり、振り返った。「カイン殿、あなたの言葉どおりになりましたよ。セシルたちが海路でこのバロンを目指しているらしい」
当たり前だ。
奴は、決してあきらめない。そういう男なのだ。
「——しかし、解せませんな」
ベイガンがゴルベーザに向き直る。「ファブールで、奴らの息の根を止めることもできたと聞きます。それなのに、いったい……」

「それはカインに訊くがよかろう」
とゴルベーザ。何かをおもしろがるような口調だった。
バロン王とベイガンが、カインを振り返る。
「あなたは、ゴルベーザ様に忠誠を誓ったのではなかったのですか」
カインは、ベイガンを睨みつけた。「俺は、そのような命は受けておらん」
しかしベイガンは怯むことなく、言葉をつづける。「まあ、よいでしょう。間もなく、奴は海の藻屑となる。みずからの育てた《赤き翼》の砲撃によってね」
「何だと――」
ゴルベーザを見やる。
漆黒の甲冑が小さく揺れていた。嗤っているのだ。
「カイン。あなたは、もしや――」とベイガン。「ゴルベーザ様の術が……」
カインは、疑惑の眼差しを向けられていることを理解した。
だが、弁解するつもりなど毛頭ない。それよりも、今は――
「ならば、なぜあのとき、セシルにとどめを刺さなかったのだ」
カインは、ゴルベーザに詰め寄った。
あのときにすべてを終わらせていれば、ローザは淡い期待を抱くこともなかった。俺が己の行く末に絶望することもなかった。なのに、どうして!

ゴルベーザが立ち上がった。
「私が命じれば、お前はそのとおりにしたのか。あの女の前で——」
言われてカインは視線を床に落とす。
すべてを見透かされていることに衝撃を受けていた。
俺は、こいつの掌で踊らされているだけなのか——。
両の拳を強く握り、奥歯を強く噛んだ。
「では、参ります」
そう言って、ベイガンが玉座の間をあとにする。
その背中に斬りかかることもできた。
だがカインは動かなかった。

7

風が強くなってきた。
頭上を仰ぎ見たヤンは、眉をひそめた。
先刻まで、あれほど晴れ渡っていた空が、今は黒い雲に覆われようとしている。
不吉な予感が脳裏をよぎった。

状況は、さらに悪化しているようだ。好転の兆しは、ない。
――シーラ。
ヤンは、身ごもったばかりの愛妻の顔を思い浮かべた。
ここで引き返せば、やがて生まれてくるであろう我が子の笑顔を見られるに違いない。
心のどこかに、そう囁く者がいた。ヤンは強く首を振り、誘惑を追いやった。
ゴルベーザが、いかなる理由でクリスタルを集めているのかは、いまだにわからない。しかし、ここまで執着するからには、相応の理由があるはずだ。
クリスタルの失われた世界を、ヤンは想像したこともなかった。
もしも、この大地を照らす四つの光がなくなったとしたら。
もしも、あの光が悪意を持つ者によって利用されたとしたら。
たくさんの笑顔が、涙に歪んでゆく――それは想像に過ぎなかったが、ヤンは己の予感を信じた。今までも、そうやっていくつもの窮地を脱してきたのだ。
船尾を見やる。遠くに祖国が霞んでいた。
生きて、再びあの地を踏みしめることはできるのだろうか。
「――怖い目をしてる」
少女の声に、ヤンは我に返った。
かたわらのリディアが、困ったような表情で自分を見つめていることに気づき、ヤンは破顔

した。「すまぬな。少々考え事をしていた」
「残してきたみんなのこと？」
ヤンは、片膝をつき、リディアと目の高さをあわせた。「きっと城の者たちは、うるさい奴がいなくなったと、のんびりと羽を伸ばしているころだろうな——そう考えていた」
しかしリディアは、にこりともしなかった。
「いいね、待っててくれる人がいて」
ヤンは、セシルから聞いた話を思い出した。
この子の故郷の村は、廃墟と化してしまっているのだ。
「帰る当てがないのならば、ファブールへ来ればいい」
ヤンの言葉に、少女は驚いたように目を丸くした。
「私を含め、むさ苦しい連中ばかりだが、義には厚い。シーラも、そなたのことを気に入り、心配しておったからな」
「ありがとう、でも——」
「運よく生き延びた仲間がいるかもしれない——か？」
リディアが頷いた。
ヤンは、そっと少女の髪に触れ、撫でた。「ならば、余計に私たち僧兵の出番だな。力だけは有り余っている。ミストの復興の手助けをさせてくれ」

「ミストの――復興」少女は、その言葉を噛みしめるようにくり返したあとで、微笑んだ。
異変を知らせる声が甲板上に響き渡ったのは、そのときだった。
恐らく見張りの船員の声なのだろう。
ヤンは立ち上がると、かたわらの少女の前に立ち、全身を緊張させた。
船の速度が心持ち上がったように思えた。
船首のその先の海面を目にし、ヤンの体が震える。巨大な渦が生じていた。
嵐に遭遇したかのように、船が荒波にもまれる。
「おろおろするんじゃねえ！」船長が船乗りたちを叱咤する声が聞こえた。「てめえら、海の男だろうが。何とかしてやり過ごすんだ！」
――と。
渦の中心から、何かが浮上した。
「本当にいたのか――大海原の主」
誰かが力なく呟く。
ヤンも、その話は聞いたことがあった。
大洋の支配者――しかし、それは伝説の中でのみ生きる存在ではなかったのか。
暗天を駆ける雷光が、巨大な竜の影を浮かび上がらせる。
――リヴァイアサン！



船が、圧倒的な質量を持つ波と激突した。
甲板が傾き、リディアの小さな体が悲鳴を残して宙を舞った。
「リディア——!」揺れる足場をものともせず、ヤンは疾走し、跳躍。少女を追って荒れ狂う海に飛びこんだ。肌を刺すような水の冷たさは気にならなかった。リディアを助けなければならないという、ただその使命に背中を押され、懸命に泳ぐ。
波間に少女の姿があった。
何かを叫んでいるが、風の音にかき消され、聞き取ることができない。
そのリディアの顔が、ゆっくりと水中へと没してゆく。薄紅のくちびるが。すらりとした鼻梁が。知性を感じさせる瞳が。そして新緑を思わせる髪が。
ヤンは、そこで己の死を確信した。
混沌としていた海に、いつしか秩序が生まれている。
リヴァイアサンを中心にして逆巻く激流が、すべてを呑みこもうとしている。
渦へと引き寄せられてゆく。もはや、それに抗う術はない。手足が鉛のように重い。海水が、容赦なく鼻から、口から入りこんでくる。誰かの悲鳴を聞いたように思い、振り返った。セシルらを乗せた船が、船首からゆっくりと水没してゆく。
それが、ヤンの見た最後の光景だった。



第4章

FINAL FANTASY. IV
ファイナルファンタジーIV

1

世界から秩序が失われつつある。
空は青く、風は澄んでいたが、それはまやかしに過ぎないとミンウは考えていた。
バロンの侵攻はとどまることを知らず、このミシディアにつづき、遠くダムシアン、そしてファブールのクリスタルまでも強奪されたという。それに伴い、魔物はさらに凶暴化し、大地の荒廃が進行している。鳥たちは怯えたようにさえずることを止め、草木はつぼみを固く閉じたまま、花を咲かせようとしない。何かが、この大地で起こりつつあるのだ。
その原因がクリスタル以外にあるとは思えない。
ミンウは、祈りの塔から眼下に広がる穏やかな大洋を眺めていた。
この恵みの海も、やがて濁り、腐り、人の手に余る場所となってしまうのかもしれぬ。
どうにかして、この事態を打開できないものか。
あの《赤き翼》の襲撃後から、ずっと考えていたが、いまだに答えは見つからない。
結局のところ、バロンからクリスタルを取り戻さねば、すべては元どおりにならないのである。そして、それは不可能なことだとわかっていた。
ミンウは振り返り、眉をひそめた。
階下が騒がしい。

また一部の血の気の多い者が、決起すべきだと騒ぎ立てているのであろう。

このミシディアとバロンの町は、一本の〝道〟でつながっている。それを使って奇襲をかければ、《赤き翼》など脅威ではなくなる、というのが彼らの言い分だった。

ミンウは、その思慮の浅さを嘆いた。

運を味方につければ、確かにクリスタルを奪還することはできるかもしれない。

しかし、そのためにいったいどれほどの血が流され、何人の命が失われるのかを、強硬派の連中はまったく考慮していないのだ。

憎しみが、新たな憎しみを生む――途切れることのない負の連鎖が未来を閉ざす原因になるのだと、なぜ理解できないのであろう。

一時の感情で行動する危うさを、彼らはあまりにも軽視しすぎている。

ミンウがこの村の長となってから、二十年近い年月が流れている。

その間、負の感情の恐ろしさについて何度も説いてきたつもりだ。

だが、今の若い者たちは、高度な魔法の習得にばかり腐心し、精神の修練には興味を示さなくなりつつある。心が未成熟なまま魔道を修めれば、きっと過ちを犯す。このミシディアの在り方も、考え直さなくてはならない時期に来ているのかもしれない。

「――長老」

石造りの階段を駆け上がってくる者があった。

見習いの白魔道士のひとりだった。
「どうしたというのだ、騒々しい」
「それが――」
ミンウのもとへとたどり着いたその若者は、息を整えてから言った。「再びバロンがやって来たのです。村中が大騒ぎになっております」

＊

祈りの館へと降りたミンウを待っていたのは、漆黒の騎士。
見紛うことはない、あの《赤き翼》を指揮していた男だ。
しばしその姿を見つめたあとで、ミンウは、
「お前たちは下がっていなさい」
暗黒騎士を取り囲むようにして身構える若き魔道士たちに言った。
「しかし――」と黒魔道士のひとり。
ミンウは微笑んだ「この者が用があるのは、そなたたちではあるまい」穏やかな口調だったが、目に有無を言わさぬ強い光が宿っている。「下がっていなさい」
五人の魔道士たちは、頭を下げると引き下がった。

ややあってからバロンの騎士が口を開いた。「なぜ人払いを？」
「そのほうが、互いに言いたいことを言えるであろう」
「あなたのおっしゃりたいことは承知しています」
そう言って闇色をした甲冑の男は、片膝をついた。「飛空艇団《赤き翼》を指揮しておりましたセシルと申します。過日の非道な行ない……心よりお詫び申し上げます」
「いくら頭を垂れようと、死んでいった者たちは、もはや戻らぬ」
「おっしゃるとおりです」セシルと名乗る男は、それでも頭を下げた。
「とはいえ、無意味な行動とは言わぬがな」
「すみません……」
「さて、そなたの目的を訊こう」
セシルが顔を上げた。
「なぜ、それほどまでに意外そうな顔をするのだ。よもや謝罪のためだけに、この辺境のミシディアを訪れたわけではなかろう」
たっぷりふた呼吸ほどの間ののちに、セシルが口を開いた。
王の乱心。
ミストの少女リディアと出会い、バロンを抜ける決心を固めたこと。
ダムシアンとファブールでの出来事。

そしてバロンへ向かう途中、海竜リヴァイアサンにより船を沈められてしまったこと。
波乱に満ちた旅の概要が語られた。
「——なるほど。そなたはすべての元凶がゴルベーザなる男だと言うのだな」
「はい」
「言いたいことは、よくわかった。そなたに同情すべき点が多々あることも理解した」
「ありがとうございます。そこで——」
「しかし——」言いかけたセシルの言葉を、ミンウは断ち切った。「理解はしたが、信用したとは言っておらん。〝魔の道（デビルロード）〟を使わせるわけにはゆかぬ」
セシルが、大きく体を震わせた。
どうやら図星であったようだ。
「これがバロンの罠だと——？」
「いや、そうは思ってはおらん。《赤き翼》の集中砲火を浴びれば、このような小さな村は一瞬で壊滅しよう。そこまでまわりくどいことはせんだろう」
「では、なぜ」
「〝魔の道（デビルロード）〟の封印を解くのは、それほど難儀なことではない。しかしかの道には、魔物の影もある。開け放てば、村が脅威にさらされる恐れがある。ミシディアを治める身として、そのような危険を冒すことができると思うか」

「本当に、それだけの理由でしょうか」
セシルの問いに、今度はミンウが目を丸くする番だった。
――なるほど、どうやら私の錯覚ではないようだ。
ミシディアの長は、静かに目を閉じた。
「ならば、はっきりと言おう。そなたは、そのゴルベーザと闘い、勝てるのか」
「奴を倒さねば、この世界に未来はありません」
「私は、勝てるのか、と訊いておるのだぞ」
「それは――」
「蛇の道は蛇。そなたも暗黒騎士であるならば、ゴルベーザの持つ闇の大きさを推し量ることができよう。それでいて、なお勝てると言い放てるのか」
セシルは答えなかった。
答えられないのであろう、とミンウは思う。
――答えられるのであれば、私の目は節穴ということになる。
ミシディアの長老は、ゆっくりと目を開いた。
セシルが肩を小さく震わせていた。
「なぜ、泣く」
「あなたの言葉が、心に沁みるのです」

涙に暮れる暗黒騎士をやさしく見つめる。
腰を屈め、その震える肩に手で触れた。
「過去は決して消し去ることはできぬ。たとえ許しをもらったとしてもな。犯した罪は、永遠に背負ってゆかねばならんのだ」
「はい――」
「だが、それでも私は、そなたを犬死にさせたくない。そなたの心に宿っている光――私は、それに賭けてみたいのだよ」
セシルが顔を上げた。「ぼくの心の――光？」
老人は立ち上がった。「ゴルベーザに太刀打ちできぬのは、そなたの闇が奴のそれよりも薄いからであろう。そのような甲冑に身を固めようとも、ごまかすことはできぬ。闇を塗り潰せるのは、一条の光さえも存在しないさらに濃い闇しかないのだからな」
「そういえば、バロンへ向かう船に乗りこむ前にファブールの王から同じようなことを言われました。暗黒剣は、しょせん暗闇の剣。真の悪には通用せぬ――と」
「まさしく、そのとおりだ」
「では……ぼくは、どうすればよいのでしょう」
「そなたは、なぜ己の闇が薄いのか。その理由を考えたことはないのか」
「いえ――」

「答えは、そなたの心の中にある」
「ぼくの心に――」セシルは自分の胸に手を当てた。「わかりません」
「気づかぬのも無理のない話かもしれんな。それほどまでに、そなたの心の中にある光は小さく、淡く、そして心細い。今にも消え入りそうな光だよ」
「――」
「暗黒剣に頼っていては、真の悪を倒せぬ。そればかりか、そなた自身もいつしか悪しき心に染まってしまうやもしれぬ。もしそなたが良き心で闘おうと願うならば、このミシディアより東、試練の山へと登るがよかろう」
「試練の山――ですか」
「かの山は、強き霊光に満ちておる。あの光ならば、そなたに巣食う闇を打ち払い、心に宿った小さな明かりを強く、大きくしてくれよう」
「行きます」セシルが立ち上がった。
「過酷な旅だ。しかも無駄足になるかもしれぬ」
「覚悟はできています。それにぼくも、この忌まわしい暗黒剣から解放されたいと願っていました。そのためなら、どんな苦難も受け入れます」
「よかろう。とはいえ、暗黒騎士ひとりでは、とてもではないが山頂までたどり着くことは難しいはず」ミンウは、そこでセシルから左手の寝台へと視線を転じた。「パロム、ポロム、出

てきなさい。そこに隠れておるのはわかっておるぞ」
寝台の陰から、ばつが悪そうに頭をかきながらふたりの子供が顔を出した。
「この子たちは――」
「双子の魔道士パロムとポロム。まだまだ修業中の身なれど、その資質は私が保証する。必ずや、そなたの助けとなってくれるであろう」

2

闇の中、ひと抱えほどもある巨大な鏡が淡い光を放った。
映し出されたのは、草原。
その緑一色の大地を進む三つの人影があった。
「セシル!」背後から、後ろ手で縛られているローザが声を上げる。
――生きていたか。
カインは、小さく安堵の息を漏らした。
それに気づいたのか、かたわらに立つ漆黒の甲冑が地鳴りのように嗤った。
「なるほど、悪運の強い男よ」ゴルベーザだった。
ファブール港から出航したセシルたちの船を沈めるため、ゴルベーザは《赤き翼》に出撃を

命じていた。ところが、突如出現した巨大な海竜によって船は呑みこまれ、海の藻屑と化してしまったというのだ。捜索の結果、奇跡的に生存者を一名だけ発見、回収したものの、むろんそれはセシルではなかった。

鏡に映し出されたセシルは、双子の魔道士らしき子供たちを従えていた。

「どこへ向かっているのか——気になるか、カインよ」

心を見透かされたように感じ、竜騎士はゴルベーザを睨んだ。

が、すぐに鏡に視線を戻す。「——試練の山か。しかし、何のために」

「報告によれば、かの山には強き霊力が感じられるという」

「霊力？」

ゴルベーザが、右腕を前方へ伸ばし、その掌を開いた。

鏡に映し出されていた光景が一変する。

険しい岩山の山頂付近と思しき場所となった。

——と。

山頂の一角に光点が生じた。その小さな瞬きは急激に膨張し、つぎの瞬間には鏡面全体が目もくらむほどの光に満たされる。

カインは、そのときゴルベーザの苦悶の声を聞いたように感じた。

そして、鏡が砕け散る音。

暗がりの中、漆黒の男が肩で息をしていた。
その拳が鏡のあった場所に突き出されている。
しばらくして落ち着きを取り戻したのか、ゴルベーザが拳を引いた。
「セシルめ……己の限界を悟ったか」
「限界？」カインは眉根を寄せた。
「我が心の闇は、大きく、深く、そして濃い。暗黒騎士程度を呑みこむのは、じつに容易いことだ。あの男も、ようやくそれに気づいたのであろう」
それでカインにも理解できた。
闇を駆逐できる存在は、光のみ。
セシルは、あの光を——ほんの一瞬とはいえゴルベーザを怯ませたあの輝きを手に入れるべく、試練の山へと向かったのだ。
己の心に巣食う闇を溶かし、再び立ち上がるために——。
「——俺が行く」
意識せぬまま、カインは、そう呟いた。
「ならぬ」
「セシルを殺るのは、俺だ」
「できると思うのか、今の自分に」



ゴルベーザは、〝今の〟という言葉を口にするときに、嗤ったようであった。
それでもカインは引かなかった。
己の心に巣食う闇を溶かし、再び立ち上がるために――。
「理由を言え」カインはゴルベーザに詰め寄った。
「よいのか」ゴルベーザがローザに視線を転じた。が、それは一瞬のこと。すぐにカインへと向き直った。「よいのか、その理由を口にしても」
カインは、沈黙するしかなかった。
「出でよ、スカルミリョーネ」
雷鳴のごときその声が合図となり、闇に腐臭が混じった。
やや遅れて、法衣に身を包んだ影が姿を現す。
「土のスカルミリョーネ、こちらに」
頭巾を目深に被っているため、表情を窺い知ることはできなかった。
その奥で真紅の光を放つ双眸が、自分に向けられていることをカインは気づいていた。
――こやつ……〝生ける屍（アンデッド）〟か。
「あのセシルとかいう男を甘く見すぎていたようだ。しかし、幸いにして奴は心を闇に冒された暗黒騎士。お前の率いる〝生ける屍（アンデッド）〟の軍勢が相手ならば、その太刀筋も鈍ろうというもの。行け――そして見事、私の期待に応えてみるがよい」

「――御意」
スカルミリョーネと呼ばれた法衣の男は、闇に溶けるようにして姿を消した。
「セシル……」
ローザがすすり泣いた。
カインは、そんな彼女にかけるべき言葉を見つけることができない。
ただ、涙に暮れるその姿を見つめるだけだった。

3

岩だらけの険しい山道を登ってゆく。
齢五つのパロムにしてみれば、日々の修行とは比べものにならない、つらい探索行だった。
とはいえ、同時に心には奇妙な解放感もある。
何といっても、あの口うるさい長老がいないのだから。
あとは――
母親きどりの双子の姉ポロムさえ同行していなければ最高だったのだが。
パロムは、隣を歩くポロムの様子を盗み見た。
それに気づいたのか、ポロムがこちらを向く。

ふたりは同時に頷くと、先を進む暗黒騎士の背中に視線を戻した。

——心配すんなって、忘れちゃいねえよ。

こいつは、おいらたちの村を襲い、クリスタルを奪っていったんだ。

あのとき——

長老の命により、パロムたちは祈りの塔に閉じこめられていた。

仲間のために祈っていろと言われたが、階下でくり広げられているであろう惨劇を想像したら、そんなことをしている余裕などあるわけもなかった。

《赤き翼》が北に飛び去ってゆくのを塔から目にしたパロムは、年上の魔道士たちの制止を振り切り、階下へと一目散に駆け降りた。

そこには、床に伏したまま動かなくなった大人たちの姿があった。

激昂したパロムは〝魔の道(デビルロード)〟の封印を解き、《赤き翼》を追って単身バロンへ乗りこもうとしたほどだった。あのときの怒りは、いまだに収まっていない。

こんなに早く復讐の機会が訪れるとは、パロムも想像していなかった。

この男が、祈りの館で長老に話していたことは、恐らく真実なのだろう。

しかし、どんなに奇麗事を並べようとも、闇は闇でしかない。

三人を送り出す際に、長老は自分たちの顔をじっと見つめていた。

怖い目だった。

それでパロムは、自分の成すべきことを悟った。

この山に宿るとされている霊光が、果たしてセシルの心に巣食う闇を駆逐してくれるのか。

長老は、それを見極めてこいと、声なき言葉でパロムたちに命じたのだ。

もしも暗黒騎士の闇が、霊光でさえ打ち払えないものだとしたら――。

セシルは、魔道士の恐ろしさを思い知ることになるだろう。

長老がおいらたちを供につけたのは、単なる偶然じゃない。

ミシディアの天才魔道士――。

そう認めているからこそ、長老はこの危険な任務をふたりに与えたのである。

おかしな真似をしてみやがれ。ポロムの〝呪縛（ホールド）〟で自由を奪い、おいらの〝炎撃（ファイア）〟で丸こげだ。あとは、どうなろうと知ったこっちゃない。まあ、それだけ痛めつければ、二度とミシディアへ足を向けようとは思わなくなるだろう。

セシルが足を止めたのは、そのときだった。

ふたりの魔道士たちの小さな体に緊張が走る。

セシルが叫んだのは、人の名だった。

「――テラ！」

セシルが駆け寄った先には、ひとりの老人の姿があった。

「おお、セシルか」

蓬髪と豊かな髭は白。そして紫を主体とした奇抜な色彩の法衣。
杖を手にしていることから、魔道士のようである。
しかしこの魔物の跋扈する地へ、単身乗りこむ老人とは、いったい——。
双子は、顔を見合わせた。
「おい、ポロム！　テラって、まさか……」
「賢者として名高い、あのテラ様⁉」
テラと呼ばれた老人は、自分をまじまじと見つめる双子に困惑したように、
「この子供たちは——セシル、そなたの連れか」
セシルが答えるよりも先に、パロムは胸を張った。
「おいらは、パロム。ミシディア一の黒魔道士さ」
つづけてポロムが軽く頭を下げた。「長老の命により、セシルさんをこの試練の山へとご案内しております、ポロムと申します」
「ほう、ミシディアの子供たちか」テラは目を細めた。「まだ幼いのというに、しっかりしておるな。おまけに、よい資質が感じられる」
「へえ。爺ちゃん、なかなか鋭いな」
「こら、何て失礼なことを！」
パロムに拳骨で叩かれ、パロムは頭を抱えてうずくまった。

「しかしテラ、なぜこの地へ？　あなたは確かバロンへ向かったはず」とセシル。
「奴ほどの者を相手にするには、手持ちの魔法だけでは少々心もとない」老賢者は、背後にそびえる岩山を振り返った。「この山を取り巻く強い霊気を思い出してな」
「思い出した──？」
テラは頷くと、何かに聞き入るようにして目を閉じた。「わしは若いころ、魔法の修練のためにこの山にこもったことがある。感じぬか、聞こえぬか。魔力に満ち満ちた気配を、声を。それらがわしに、大いなる力をもたらせてくれるように思えるのだ」
「ゴルベーザを倒すための魔法……」
テラがセシルに向き直る。「わしは老いぼれだ。しかしただ年を食ったわけではないぞ。知恵を身につけ、忍耐することを学んだ。今のわしならば、光の啓示を受け、封印されし伝説の黒魔法をこの手につかみ取ることができそうな気がする」
「伝説の黒魔法ですって」とポロム。
「〝隕星(メテオ)〟か。さすがテラの爺ちゃんだ！」パロムも目を輝かせる。
「ところでセシルよ。リディアとギルバートは、どうした」
問われて、セシルは顔を伏せた。
「バロンへ向かう途中、海竜に襲われて船が──」
「何と……」テラは絶句した。

セシルは、これまでの旅の経緯を語った。
「そうか──ゴルベーザを倒さねばならぬ理由が増えたな」
テラが三人に背を向け、岩山を登りはじめた。
パロムは、その肩が細かく震えていることに気づいた。
──爺ちゃん、泣いてるのか？

4

ポロムは、信じることに決めた。
セシルの歩調に、他の三人が合わせることなどできるはずもない。
誰かが不平や不満を漏らしたわけではなかったのに、セシルはときには足取りを緩め、またあるときは立ち止まり、みなとつかず離れずの距離を保っている。
交わす言葉こそ少ないが、自分たちを思いやってくれるのが、ポロムにはよくわかった。
──この人、本当にあの《赤き翼》の指揮官なのかしら。
そう思わずにはいられなかった。
となると、やはり長老の言葉は真実なのだろう。
〝そなたの心の中にある光は小さく、淡く、そして心細い〟

どんなにちっぽけなものであっても、彼の心に光はある。
それは確かなのだ。
問題は、セシルの心に巣食う闇。光を抑圧するその闇の存在が、山頂に宿る霊光によって打ち払われたとき、いったい何が起こるのかである。
だが、それは誰にもわからない。
霊力を糧に、己の光を成長させることができるのならば、いい。
しかし、ゴルベーザの闇を駆逐するのに足る輝きを身につけられなかったとしたら——。
パロムひとりなら、私が何とか押さえつけることはできるかもしれない。
でも——
村のみんなの感情は爆発寸前だ。
いくら長老でも、これ以上セシルを庇うのは不可能だろう。
そのとき、私はどうしたらいいのか。どうするべきなのか。
バロンの行ないは、決して許されるものではない。
けれども、怒りに任せて報復したところで、そこから生まれるのは悲しみと、さらなる怒りでしかないはずだ。人間同士で傷つけあうのは、もうたくさんだった。
この負の連鎖を断ち切るには——。
ポロムは、隣をゆくセシルの横顔をまじまじと見つめた。

微笑を忘れてしまったかのような、厳しい表情がそこにあった。
その悲しみを溶かしてあげられるのは、信じる心だけだと思う。
裏切られるのを恐れることなく、全身全霊を傾けて信じる。
大丈夫よ、あなたの周りにいるのは敵ばかりじゃない。
——ふしゅるるるる。
声が聞こえた。
ポロムは、顔が赤くなるのを感じた。
怒りの形相で、背後のパロムを振り返る。
これまでにも何度か、こういうことはあった。ポロムがひとり物思いに耽っているときに、パロムが突然奇声を発し、からかってくるのだ。
今回も、その類かと思った。だから、
「何なのよ！」と双子の弟を睨みつける。
だがパロムは「な、何だよ」と困惑の表情を浮かべていた。
「あんた、何か言ったでしょ？」
「言ってねえよ！」
嘘はついていないように見えた。
それなら、空耳？

ううん、違う。音なのか、声なのかはわからない。でも確かに聞こえた。
「どうやら、ここが山頂のようだな」
テラの声に、ポロムは我に返った。
前方に吊り橋があり、その向こうには石碑のようなものが建てられていた。
「行ってみよう」
セシルの言葉をきっかけに、四人が再び歩きはじめた。
吊り橋へ差しかかる直前だった。
ふしゅるるる――。
また聞こえた！
そう思った瞬間、前方の空間に血の赤が浮いた。
次第に濃くなってゆくその赤が、やがて闇のように黒くなり、人型となる。
「ゴルベーザの手の者か」セシルが剣を抜き放ち、三人の前に立つ。
法衣を身にまとった男が、乾いた声で嗤った。
「我は、土のスカルミリョーネ。これより先へ進ませるわけにはゆかぬ」
「へっ、おもしろくなってきたじゃん！」
「パロム！　これは実戦なのよ」
「わかってるって！」

双子がセシルの後方に散開する。
――と。
ポロムたちの周囲の地面に、異変が生じた。
岩肌にいくつもの亀裂が入り、陥没する。その穴から突き出されたのは、人の手。否、人であった者の手だった。穴をかき分けて、半ば白骨化した四体の死体が這い出てくる。
ポロムは息を呑んだ。
〝生ける屍（アンデッド）〟――。
「おやおや、私の可愛い息子たちは、どうやら腹を空かせているようだ」
スカルミリョーネのその言葉が合図となった。
生者とは正反対の領域に存在する生ける屍（アンデッド）は、その仮初めの命を維持するために、生者の生命力を好むという。スカルミリョーネの言葉どおり、飢餓状態にある彼らは、争うようにしてセシルらに襲いかかり、すべてを吸い尽くそうとしてきた。
ポロムは、実戦――すなわち魔物との命のやり取りの場に身を置いたことは多くない。それでも白魔道士としての分をわきまえ、冷静さを失わずにいられるのは、やんちゃな弟を持つ姉として育ったからだった。五歳という幼さでと人は言うが、ポロムにしてみれば、もう五年もこの立場にいるのである。何事に対しても、常に一歩引くことは習慣になっていた。
長老の言葉が思い出される。

――よいか、ポロムよ。この世は、数え切れないほどの魔物で溢れ返っておる。中でも、もっとも忌まわしいのは、生ける屍（アンデッド）であろうな。元は人間であった彼らは、生者とは真逆の存在。恐怖を好み、痛みに歓喜し、光を恐れる。恐れるべき相手では決してないのだぞ――。

ポロムは、あのときの長老の言葉を微塵も疑わず、それを妄信した。

セシルに群がる死人の群れに〝治癒（ケアル）〟を唱える。

「ほう、なかなかやるではないか」

テラの言葉が、少女の聡明さを証明していた。

生ける屍（アンデッド）は、断末魔の悲鳴とともに崩れ落ち、土へ還った。

「おいらだって！」

対抗意識を燃やすパロムが〝炎撃（ファイア）〟。

そして――

勝負は呆気なくついた。

力尽きたスカルミリョーネは大地と同化し、やがて消えうせた。

「へへっ、どんなもんだい！」

くるりと一回転して胸を張るパロムに、「こら、調子に乗るんじゃないの。セシルさんやテ

ラ様のお陰でしょ」と頭を小突いた。
「では、先を急ぐとしよう」
テラの言葉にセシルが頷き、先頭に立って吊り橋を渡りはじめた。
橋は、大人がひとり何とか通れるかどうか、という幅しかない。加えて風が吹くたびに大きく揺れる。足下は、奈落としか表現できぬほどの険しい谷。もしも足を滑らせたら、ひとたまりもない。さしものパロムも、軽口を叩こうとしなかった。
最後尾のテラが橋を渡り終えた。
一行の意識は、すぐ西に建てられている奇妙な石碑に奪われていた。
そのため、その気配に気づくのが遅れた。
パロムとポロムが、同時に振り返る。
ふたりは同時に息を呑んだ。
腐臭を放つ巨大な魔物の顔が、そこにあった。
先刻のように法衣を身にまとっていない。
色素を失った蓬髪が、まだらに生えている。肉はただれ、ところどころに骨が見えていた。
零れ落ちそうなほど飛び出た眼球が、パロムに向けられた。
異様に長い腕が頭上高くに掲げられる。
「パロム、逃げて——！」

ポロムは声の限りに絶叫。しかし間に合わない。
振り下ろされた拳の直撃を食らい、パロムの小さな体が大地に転がった。
セシルが動いた。
蘇ったスカルミリョーネとポロムの間にその漆黒の甲冑を滑りこませる。
「体勢を立て直すのだ」言うやテラは、パロムへ癒しの呪文を詠唱。
それを察知したのか、スカルミリョーネの濁った双眸が、ぎょろりと動いた。
セシルがテラを護るようにして立ちはだかり、闇色の刃を一閃。
「愚か者め！」生ける屍の王が吠えた。「なぜ、この私がここへ遣わされたのか、まだわからぬか。貴様の暗黒剣は、我ら不死者には通用せぬのだ」
吐き出されたのは、毒々しい色をした霧。
まともに食らったセシルの動きが鈍った。
「死してもなお恐ろしい土のスカルミリョーネ。ゆっくりと味わいながら死ね」
テラの呪文が発動。
光の粒子に包まれ、パロムの顔に生気が戻り、立ち上がった。
「パロム――」よろける弟をポロムは抱きしめた。
「どけよ。おいらは闘うんだ」
「駄目。無理したら――」

「ふざけんなよ」パロムは姉を振り払うと、頭を小突いた。
驚いたように見開かれたポロムの瞳から、涙が零れ落ちる。「パロム……」
「あんちゃんが死んじまうだろ！」
少女がようやく双子の弟から視線を引き剥がす。
眼前にスカルミリョーネが迫りながらも、まるで屈したかのように地面に片膝をつくセシルの姿が目に入った。
魔物の丸太のような太い腕が振り上げられる。
あの拳を受けては、今のセシルではひとたまりもない。
――どうしたらいいの？
ポロムの頭に、いくつかの選択肢が浮かぶ。
だが、そのいずれを選ぶべきなのか決断できない。
そのとき、スカルミリョーネが苦悶の声を上げた。
腐った巨躯が、炎に包まれている。
パロムの〝業焔（ファイラ）〟だった。
「――今だ！」パロムが叫ぶ。
もう迷っている場合ではなかった。
ポロムとテラが、同時に〝療光（ケアルラ）〟。

それがスカルミリョーネにとって致命傷となった。
身悶える死人に、かろうじて立ち上がったセシルが渾身の一撃を食らわす。
「おのれ……この私が貴様らごときに――」
みなまで言うことはできなかった。
死人を操る魔物は、崖から転落し、谷底へと消えた。

5

セシルは、切り立った断崖から足もとを見下ろした。
あまりの高さに目がくらむ。
ここから落下しては、さすがの生ける屍（アンデッド）も無事ではおれまい。
四肢から力が抜け、その場に両膝をついた。
「セシルさん」慌ててポロムが駆け寄ってくる。
「心配はいらない」セシルは手にしていた剣を杖代わりにして立ち上がる。
「私が、もっとしっかりしていたら――」
そう言ってうつむく魔道士の少女の髪を、男はやさしく撫でた。
「いや、君がいなければ、ぼくは死んでいただろう」

セシルは、背後を振り返った。
視線の先に、奇妙な石碑が建てられている。
――ゴルベーザは、ぼくたちをここへ来させたくなかったのだろう。
その理由は、あの石碑にあるに違いない。
セシルは一歩、また一歩と噛みしめるように歩を進める。
と――。
石碑との距離が縮まるたびに、己の心のうちにとある感情が湧き上がるのを感じた。
やがてその感情の正体を理解する。恐怖だった。
立ち止まりたい衝動に駆られる。
背を向けろ、逃げ出せと魂が警告を発している。
誰に教わったわけでもないのに、人は生まれながらにして暗闇を恐れるという。
それは、原初から脈々と受け継がれてきた本能の記憶なのだ。
今、感じている恐怖は、そういった感情と似ているような気がする。
しかしセシルは、懸命に抗った。
石碑の前に立ち、その表面を軽く指で触れる。
視界が歪んだかと思うと、つぎの瞬間、周囲の光景が一変した。
「ここは――」

一行は、四方と床、天井が鏡張りという奇妙な一室にいた。

『我が息子よ』どこからともなく、声が聞こえてくる。憂いを含んだ声だった。『お前が来るのを待っていた。待ちつづけていた』

セシルが眉根を寄せた。「息子？　あなたは——なぜ、ぼくを待っていたのです」

しかし声は、その疑問に答えようとしない。

ただ語る。

『これからお前に、私の力を授けよう。そのことで私は、さらなる悲しみに包まれるであろう。しかし、そうする以外に私に残された術はないのだ』

正面の壁面に、暗黒騎士セシルの姿が映し出されている。

その像を断ち切るようにして、ひと筋の光が浮かび上がった。

やがて次第に輝きを増してゆく線が、形を変え——

「——剣か」

セシルの言葉どおりに、眩い剣となり、鏡から抜け出てくる。

剣は床に落ちることなく宙を漂っていた。

まるで所有されることを望んでいるかのようにも見える。

セシルは右の手を伸ばすが、剣の柄に触れる直前でその動きを止めた。

全身が、がたがたと震えはじめる。意識が恐怖一色に染め上げられてゆく。

右の拳を、無意識のうちに固く握りしめていた。
背後で誰か——パロムだろうか——が何か言ったように感じたが、その言葉の内容を理解することはできなかった。
目を閉じろ——惑わされるな！　耳を塞げ——何も聞くな！　すべてを拒み、信じるな！
それは、闇の声だ。
セシルは、そう確信した。幼子が闇を恐れるように、闇は光に恐怖する。
握りしめられたままの己の拳を見た。
光に触れることを嫌悪し、心に巣食う闇が、懸命の抵抗を試みているのだろう。
「——セシル」
背後でテラの声。双子の魔道士パロムとポロムの視線も感じた。
彼らは自分を信じてくれている。それが痛いほどわかった。
指を開こうと、己の右腕に力をこめる。
——やめろ！
心の奥底で闇が悲鳴を上げた。
ぶるぶると震える拳が、歪に形を変えてゆく。
砂漠で立ち枯れた巨木の枝ように、セシルは指を広げ、そして——
宙を漂う、眩いばかりのその剣を手にしたのだった。



セシルの目の奥に閃光が疾った。
甲冑の表面で漆黒が踊り、渦巻き、激しく振動する。
――やめろおおおぉぉぉっ！
雷のごとき亀裂が、闇を引き裂いた。
砕かれたガラスのようにセシルの全身を覆っていた喪失の黒が四散する。
その下から現れたのは、目の覚めるような白き輝き。
セシルは、汚れひとつない純白の甲冑に身を固めていた。
――聖騎士（パラディン）。
しかしセシルの顔に笑みはなかった。
眼前の鏡には、いまだに暗黒の鎧をまとった自分の姿が映し出されていたのだ。
再び、どこからか声が聞こえてきた。『これまでの自分を克服せねば、聖なる力はお前を受け入れることはないだろう。打ち克つのだ、暗黒騎士であった自分に』
『さあ、今こそ血塗られた過去と決別するのだ』
鏡の中、漆黒の甲冑が動いた。
それを見つめるセシルは、微動だにしていないというのに。
やがて暗黒騎士が鏡から抜け出てきた。
ふたりのセシルが対峙する。

闇と光――異なるのは、甲冑の色のみにあらず。
暗黒騎士が、漆黒の刃を一閃。
それを聖騎士が寸前でかわす。
「セシル！」
「あんちゃん」
「危ない！」
背後の三人が、口々に叫ぶ。
それをセシルは片手を上げて制した。「これは、ぼくの――ぼく自身の闘いだ。これまでの過ちを償うためにも、こいつを！　暗黒騎士を倒す！」
両者が同時に動いた。
交錯する光と闇。打ち合わされる刃から激しい火花が散る。
ふたりは同時に後方へ跳躍し、つぎの一撃のために浅く腰を落とし身構える。
剣の腕は、まったくの互角。己の癖や性格、そして戦略までも当然、知り尽くしている。果たして決着がつくのかさえも怪しい。しかし引くことはできない。敗北は、すなわち精神的な死。一方が他方を完全に消滅させ、生き残ることになる。
ふたつの思想が、己の存続を賭け、剣を振るう。
――と。

誰もが望まぬその永遠に、小さな綻びが生じる。
セシルは、それを見逃さなかった。友の祈りを背に受けて加速。光を宿した聖なる切っ先が暗黒騎士の腹部を貫いた。確かな手応えがあった。
勝機を手繰り寄せた一撃であったことに間違いはない。
しかしセシルは追撃へと移行せず、間合いを広げた。
漆黒の面頬の下、奴が笑みを浮かべたように思えたのだ。
「どうした。あれほど望んだ勝利を、なぜ手に入れようとしない」暗黒騎士がセシルの声で囁いた。「俺が憎いのであろう？　過去を消し去りたいのであろう？　ならば、遠慮などする必要はない。斬れ！　斬り刻め！　本能のままに！　欲望のままに！」
——違う。
そうではないのだ、とセシルは唐突に気づいた。
暗黒騎士を倒すとは、過去と決別することとは違う。
聖騎士になるとは、過去を否定することとは違う。
過ちを償うとは、過去を消し去ることとは違う。
違う、違うのだ。
『正義よりも、正しきことよりも大切なものがある』再び、あの声。
立ち尽くすセシルに、暗黒騎士が動いた。

漆黒の剣が、渾身の力をこめて振り下ろされる。
セシルは、それを避けようともしなかった。目を閉じ、あるがままを受け入れる。
左の肩口に感じた激痛が、瞬時にして全身に拡散、四肢へと伝達される。
ゆっくりとまぶたを開く。その目には、痛みのためではない涙が浮いていた。
「なぜだ、なぜ闘わぬのだ」
暗黒騎士が、狂ったように剣を打ち下ろす。
セシルは、そんな己の分身をただ静かに見つめていた。
——ぼくは、逃げていただけなのだ。
ようやく今、それが理解できた。
暗黒騎士の道を選んだこともミシディアの襲撃も、すべて望まれ、命じられたとはいえ、最終的に決断し実行へと移したのは、他でもないぼくなのだ。それなのにすべての責任を誰かに押しつけることばかり考えていた。暗黒騎士に罪など一切ないというのに。
これでは光の助力を得て聖騎士になったところで何も変わらない。
以前の過ちを再び犯すだけだ。
喚き散らしながら、ひたすら剣を振るう過去の自分を、あろうことか、ぼく自身が否定しようとするとは——何と馬鹿げたことなのだろう。
この先、過去を悔いることは幾度となくあると思う。

けれども、もう二度と否定することはない。
セシルの流す涙に溶けてゆくかのように、暗黒騎士の輪郭がぼやけ、色彩が薄れ、そして消えていった。鏡に映るのは、聖騎士となったセシルである。
あの声が聞こえてきた。
『よくやった。これから私の意識を光に変え、お前に託そう。受け取るがよい』
眼前が白一色に染まった。
『我が息子よ——止めるのだ、ゴルベーザを』
「待ってください。息子とは、いったいどういうこと——」
風を感じた。
周囲を包みこむ光は消え失せており、一行は石碑の前に立っていた。
背後でうめく声を聞き、セシルは慌てて振り返った。
テラが全身を震わせていた。「思い出したぞ、記憶の底に葬り去っていた呪文の数々を。そして、あの封印されし禁断の魔法を——」
「爺ちゃん、まさか〝隕星(メテオ)〟を⁉」パロムが目を丸くする。
賢者は頷いた。「これで、すべて準備が整ったというわけだな。さあ、セシル。ゆくぞ、憎きゴルベーザの元へ！」

6

カインは、緊張した面持ちで静かに扉を開けた。
闇よりも濃い影が、そこにあった。ゴルベーザである。
バブイルの塔――。
バロンの遥か南方、エブラーナという島国の北端にある巨大な塔の一室だった。
ゴルベーザは、古の時代に建築されたこの塔を活動の拠点としていた。
ここで何を画策しているのかは、カインにも明かさない。
「――来たか」
ゴルベーザは、そう短く言っただけだった。
部屋の中央には、寝台がひとつ。
そこにひとりの人物が横たわっていた。
カインは、その男に見覚えがあった。確かファブールを襲撃した際に、セシルと行動をともにしていた。「ファブールの僧兵の長、名はヤン」
しかし、その彼が、なぜここで横たわっているのか。
思い出した。セシルらの船が沈没したあとに《赤き翼》によって回収された者が一名だけいたと聞いた。それが、このヤンだったのだろう。

「利用価値はあると思うか」
ゴルベーザが問うた。
捕らえたヤンを、何かに利用できないかと訊いているのだ。
カインは黙考した。
選択肢はふたつ。頷くか、あるいは首を振るか。
ヤンに義理などないが、見殺しにするほどカインは冷酷ではない。
だが、望んだとおりにゴルベーザが動いてくれるとも思えなかった。だから、
「ないと思うのか」と曖昧な言葉を返す。
今度は、漆黒の甲冑が沈黙した。
長い長い沈黙だった。
うんざりした口調でカインは言った。「セシルが聖騎士になったと聞いた」
遠まわしに、ゴルベーザの遣わしたスカルミリョーネの無力さを批判したつもりだった。
それに気づいたのか、闇色の面頬の奥から雷鳴に似た嗤いが漏れた。
「この男は、スカルミリョーネ以上と言いたいわけか」
「――――」
「それは俺が判断することではない」
「だがファブールの僧兵は侮れん。白兵戦に限定するならば、バロンに引けを取らぬ存在だ。

近衛兵団程度は、容易く打ち破るだろうな」
「セシルは、間もなくバロンへやってくる」ゴルベーザは、寝台で身動きひとつしない弁髪の男に視線を落とした。「そこに、こやつを」
「さあな、決めるのは俺じゃあない」
「――よかろう」
言って右の掌を横たわる僧兵の長の顔にかざし、念じた。
ゴルベーザが手を引っこめると同時にヤンが目を開き、半身を起こす。
「何をした――」とカイン。
「セシルへの憎悪を植えつけた」
「――俺にしたようにか」
「さあな」ゴルベーザは小さく嗤った。「こやつに兵士たちの指揮を執らせる」寝台から離れるとカインに背を向け、そのまま部屋から出て行った。
薄闇の中、カインとヤンのふたりが、そこに残された。
「お前の使命は何だ」
囁くときの口調で、カインは問うた。
「セシルを殺すこと」ヤンが即答する。
「――そうか」

カインは呟いたあとで、古ぼけた小さな鍵を男の前に差し出した。「ならば、これを持っていけ。右の手に握り、この先、何があってもその拳を開くな」

ヤンが頷き、鍵を受け取った。

しばしそれを眺めたあとで、命じられたように掌に載せ、それから拳を固めた。

「バロンへ行け。じきにセシルがやってくる」

7

長老は、我が目を疑った。

その言葉を信じ、望みをかけていたのは確かだが、やはり心のどこかでは最悪の事態も想定していた。だからこそ、パロムとポロムを供につけたのだ。ふたりは、見かけこそ幼いが、将来ミシディアを背負って立つ逸材。もしも闇が光を呑みこんでしまった場合は、彼らでなければその窮地から脱することはできまいと長老は考えたのだった。

しかし――

それは杞憂に終わった。

祈りの館へと帰還したセシルは、純白の甲冑に身を固めていた。

これでもう疑う余地などない。

我らの命運を託すことができるのは、この男しかいないのだ。
「試練の山の山頂で、声を聞きました」
言ってから聖騎士は顔を伏せた。「しかしその半分も理解できませんでした」
「声は、何と――?」
「正義よりも、正しきことよりも大切なものがある――そう言っていました」
「なかなか難しいことを言うの」
「それでも、ぼくなりにわかったこともあります」
「ほう」
「過去を否定すれば、未来は閉ざされる」
「――」
「過去の積み重ねが、未来を形作ってゆきます。そして、こうしている間にも〝今〟という瞬間は刻一刻と過ぎ去り、〝過去〟になる。つまり未来を切り開くには、過去をよき方向へと導く必要があります。そのために〝今〟が存在するのだ、と」
長老は微笑み、うなだれる男の肩に手を置いた。
セシルが顔を上げる。
ふたりの目が合った。
「それだけ理解しているならば、何も言うことはない」

セシルが頷いた。

と――。

そこで長老は気づいた。「そなたのその剣は――」

「山頂で授かったものです」

セシルの差し出した、光に包まれたその剣にミシディアの長は目を細めた。「この刀身には、我らが古くより受け継いできた言伝えと同じ詩句が刻まれておるな」

「言伝え……ですか？」

セシルの右手に立つポロムが、歌うようにその詩句を口にした。

竜の口より生まれしもの
天高く舞い上がり光と闇を掲げ
眠りの地にさらなる約束をもたらさん。
月は果てしなき光に包まれ
母なる大地に大いなる恵みと慈悲を与えん。

「あの光は、ぼくを息子と呼びました。〝彼〟は、いったい何者なのでしょう」

「試練の山の光の正体は、私にはわからぬ。そして、この伝説の意味もな」長老は、セシルに

背を向け、大きく息を吐いた。「ただこの詩句を後世に伝え、祈りを捧げるのが、私たちミシディアの民の務めだとされておる。そして、聖なる輝きを持つ者を信ぜよ、とも」
「聖なる輝きを持つ者、ですか？」
長老は聖騎士を振り返った。「それは、そなたかもしれぬ」
「そんな——」
そこに男の声がした。「わしも、その意見には同意する」
祈りの館へと、ひとりの老人が入ってきた。
長老は、その懐かしい顔に目を丸くした。「——テラではないか！」
「あまりにも懐かしくてな。村中を見させてもらっていた」
「しかし、なぜここに」
「試練の山でお会いしたのです。それで——」とポロム。
パロムがくるりと一回転し、姉の言葉につづいた。「この爺ちゃん、すごいんだぜ。何たって、あの〝堕星（メテオ）〟の魔法を手に入れちまったんだからな」
「何と——あの魔法の封印が解かれたというのか」
「それほどのことが今、この世界で起きつつあるというわけだな」
テラの言葉に、長老は眉根を寄せた。
「しかし、そなたは老いた身。〝堕星（メテオ）〟など使っては——」

「ふん、余計な世話だ」そこでテラの双眸に悲しみの光が宿った。「わしは、未練などない。アンナのいないこの世界になどな」
「ゴルベーザ率いる《赤き翼》が、ダムシアンを襲撃したのです」とセシル。
長老は嘆息した。「何ということだ。あのアンナが――」
「奴だけは許しておくわけにはゆかぬ」
「憎しみに駆られ闘うというか。昔と変わらぬな」
「お主もな」
ふたりの老人は、しばし視線を合わせた。
ふいに長老は、セシルへと向き直った。「策はあるのか」
「ゴルベーザは、バロンの兵力を完全に掌握しています。まともにぶつかっては勝ち目はありません。そこで、まずは飛空艇を奪おうと思います」
「――飛空艇を？」
「残るクリスタルは、トロイアの〝土のクリスタル〟のみ。それを死守するためには、こちらも飛空艇に頼る他ありません」
「危険な賭けであるな」
「バロン城に飛空艇技師のシドが囚われているはずです。彼を助け出すことができれば、この不利な戦局を五分に戻すことができると思います」

「わかった。ならば〝魔の道(デビルロード)〟の封印を解くこととしよう」長老は覚悟を決めた。「しかし、心してゆくのだぞ。〝魔の道(デビルロード)〟は、その名のとおりに恐ろしい空間。そこでは時と場所とがねじ曲げられ、足を踏み入れた者の魂を消耗させるという。容易くバロンへたどり着けるとは思わぬほうがよいであろうな」

「心しておきます」セシルが頭を下げた。

と――。

双子の魔道士が互いに顔を見合わせ、頷くと、長老の前へ進み出た。

「おいらたちも行くよ」

「長老、お願いします！」

ふたりの意外な申し出に、長老は目を丸くした。

が、それは一瞬のこと。鋭さを取り戻した眼光がパロムとポロムに向けられる。

「お主たちの役目は終わったのだ」

「終わってなんかいないよ！　長老は言ったじゃないか、こいつの力になってやれって」

「私は言ったはずだぞ、お主らをまだまだ修業中の身だと」

「私たちはこのバロンへの旅も修行の一環と考えています。どうか、お許しを」

ふたりに気圧されたかのように、長老は目を閉じた。

「お主の負けだな」テラが声を上げて笑った。「あの山の霊光は、この者たちを拒むどころか、

受け入れおったのだぞ。これも何かの運命であろう」
長老は、大きく息を吐いたあとで目を開いた。
「私は、このミシディアを離れるわけにはゆかぬのだ」
「ふたりのことは、ぼくにお任せください」
そのセシルの言葉に、「へっ、なに言ってんだい。おいらたちがいなかったら、あんちゃんは今頃、試練の山で〝生ける屍(アンデッド)〟の餌食になったぜ」
「それは言いすぎでしょ！」とポロム。
「ああ、そうだな」とセシルはパロムに微笑みかけた。それから長老へと向き直り、「この子たちには、計り知れない力が眠っているようです」
「案ずるな、わしもついておる」テラが頷く。
そこまで言われてしまっては、長老も折れるしかなかった。



第5章

FINAL FANTASY. IV

ファイナルファンタジーIV

1

ミシディアの長老の言葉は真実だった。

否。それ以上の地獄が一行を待ち受けていた。

〝魔の道（デビルロード）〟——

バロンの町とミシディアとを結ぶ、海の底に造られた〝道〟として知られている。

だが、それは、はなはだ正確さを欠いた表現と言えるだろう。

まだ飛空艇が発明されておらず、他国へ旅する手段を船に頼っていた時代。バロンと友好関係にあったミシディアの魔道士たちが、両国間の移動に魔道を利用する画期的な方法を考案した。そのころの船の動力は、風。天候や風向きによって航行日数が大きく変化し、また遭難や沈没といった危険性もあった。こうした障害を取り除くことこそが、バロンとミシディアの発展に大きく寄与するのは明らかだった。

とはいえ、両国の間には船を使っても最短で三日はかかるほどの距離が横たわっている。そこを歩いて横断するのでは、余計に時間がかかってしまう。

そこで魔道士たちは、魔道によって自然の摂理をねじ曲げた。

すなわち、距離を〝縮めた〟のだ。

これによってバロンとミシディアは〝道〟によって結ばれ、徒歩でもわずか半日で一方の国

へ移動することが可能になった。だがこの夢のような〝道〟はすぐに閉鎖され、〝魔の道（デビルロード）〟という不吉な名を冠せられるようになる。

距離を消失させたことで、そこに無数の歪みが生まれた。

時間の概念もその本来の意味を失い、過去と現在と未来とが渾然となって存在する、まさに異空間と化してしまったのだ。

テラは、その〝魔の道（デビルロード）〟をセシルらとともに進んでいた――。

一切の装飾を廃した、殺風景な通路。

それがテラの第一印象だった。

しかし、ひとたび足を踏み出すと、脳裏を様々な光景が過ぎる。

目の前に何かがあるわけではない。存在しないもののはずの光景が〝見えて〟しまうのだ。

現れて消えてゆくのは、悪夢や幻影の類ではない。

これまでに体験したこと、そしてこれから体験するであろうこと。

脈絡もなく〝事実〟の断片が、つぎつぎと浮かび上がっては消えてゆく。

いかに固く目を閉じようと、それから逃れる術はなかった。

魔道士は、こういった超自然的なものに対して非常に敏感である。

それゆえ、過去が色褪せることはない。

美化されることもない。

一切の劣化のない過ぎ去りし日の悔恨の念が、現実の生々しさを伴って現れる。
それは容赦なく、そして無慈悲だった。
妻の死。
そして娘の最期。
強烈な悲劇の追体験によって生み出されるのは、憎しみにあらず。
沸点を越えた怒りと悲しみは、そこで絶望へと姿を変えるのだ。
己の力のなさを呪い、思慮の浅さを悔いる。
あのときと同じように。いや、あのとき以上に。
——と。
脳裏に浮かび上がった映像に、漆黒の甲冑に身を固めた男がいた。
暗黒騎士であったころのセシルではない。
ゴルベーザ——！
本能が、テラにその名を告げていた。
映像の中でゴルベーザと対峙しているのは、テラ自身だった。己の姿を第三者の視点から眺めることに、しかし老魔道士は違和感を覚える余裕はなかった。
新たに湧き上がった憎悪が、テラの心を激しく揺さぶる。
——これは、やがて訪れるであろう未来の映像なのか。

テラが見つめる前で、テラが呪文の詠唱をはじめる。
くちびるの動きを見つめずとも、その魔法が何なのかわかった。
〝堕星（メテオ）〟だ。
ふとミシディアの長老の言葉が脳裏をよぎる。
しかし、そなたは老いた身。〝堕星（メテオ）〟など使っては――。
詠唱はつづく。
賢者の顔に刻まれているのは固い決意。そして揺るぎない覚悟。
呪文が発動した。
頭上から降り注ぐのは、ひと抱えもありそうな無数の岩。
術者の怒りが炎に転化し、その岩を燃え滾（たぎ）らせる。
いかにゴルベーザとはいえ、それを食らっては無傷でいられるはずもない。
荒波に翻弄される木の葉のように舞い――ついに崩れ落ちた。
だが、その映像を食い入るように見つめるテラの顔に歓喜の表情はない。持てるすべての精神を〝堕星（メテオ）〟に注ぎこんだ反動で、肉体から急速に生命力が失われてしまったのだろう。やがて賢者と呼ばれし老人は両膝を床につき、前のめりに伏した。
「テラ――！」
どこからか、悲鳴にも似た叫びが聞こえる。セシルの声のように思われた。

わしは、死ぬのか。
若いころ、ミンウから聞かされた言葉が蘇った。
——憎しみに惑わされてはいけない。それは必ず破滅を呼び寄せる。
奴は正しかった。
正しかったが……それがどうしたというのだ。
アンナのいないこの世界では、生きていている意味など見出すことはできない。
悔いなどあるわけもなかった。
「——テラ！」再びセシルの声。
そこで我に返った。
眼前にあるのは、人ならざる者の姿。
右の肩口が、殺意に満ちた爪によって深く抉(えぐ)り取られた。
全身を貫く激痛に、冷静さを取り戻す。
見れば、返り血を浴びたセシルが肩で息をしている。
その足元には、今しがたテラを襲った魔物が絶命していた。
「——すまぬ」
テラは、素直に頭を下げた。
自分が《幻視》に意識を奪われている間に、セシルとパロム、ポロムたちは現実で魔物と

闘っていたのだ。このわしを護りながら。
「だいぶ憔悴しているようですが」セシルが気遣いの言葉を口にする。
「いや、少々考え事をしていただけだ」
「本当かよ……」
とパロム。「いくら爺ちゃんでも、ぼけっとしてたら――」
ポロムの拳が、その言葉のつづきを断ち切った。「こら、何て失礼なことを！」
弟の魔道士は殴られた頭をさすりながら「いてててて」涙目になる。
「心配などいらぬ」
テラは言った。
強がりなどでは、決してなかった。
先刻の《幻視》が、やがて訪れる未来であるのならば――
わしは、ゴルベーザと闘う運命にある、ということ。
言い換えるならば、その瞬間までは生きていられるとの啓示でもあるのだ。
そう、運命にさえ逆らわなければ。
――待っておれ、ゴルベーザ！
一行は、やがて〝魔の道(デビルロード)〟を抜ける。
そこは陽の光に満ちたバロンの城下町だった。

町の北には、見る者を威圧するかのようにバロン城がそびえ立っていた。

2

——酔いのせいなのだろうか。

苛立ちに任せて、左手に持つエールの入ったジョッキを丸卓に叩きつけた。

周囲の喧騒が、一瞬にして静寂に変化した。

だが、心中では変わらずに様々な想いが交錯し、まったく考えがまとまらない。

ヤンは安物の木製の椅子に背を預けて、まぶたを閉じる。

ようやく少しだけ冷静さが戻ってきたような気がした。

私は、どうしてここにいるのだろうか。

ここは、バロンの城下町の中心部にある酒場である。

遠く祖国を離れ、単身、この町へやってきている。

その理由は定かではない。ところどころ記憶が抜け落ちている。懸命に考えても思い出せなかった。それほど大した理由ではなかったのかもしれない。

ふと脳裏をよぎったのは、愛する妻の顔だった。

これればかりは、何があろうとも忘れるわけがなかった。

祖国へ、妻の元へ帰りたい。
だが、それは許されない。
——なぜ？
私にはやらなくてはならないことがあるのだ。
——それは、何？
わからない。核心に迫ろうとすると思考に霞がかかり、もう少しのところでそれはヤンの手からするりとすり抜け、どこかへ姿をくらませてしまう。
目を開いた。
右手に視線を落とす。
拳が固く握りしめられている。その奥に異物があるのを感じるものの、なぜか指を開くことができないでいた。いったい、私は何を後生大事に持っているのだろう。何か、とても大切なもの——理由はわからなかったが、そんな気がする。
「何だ、貴様は！」
突然聞こえた怒声に、ヤンは顔を上げた。
部下のバロン兵が、見かけぬ若者相手にいきり立っている姿があった。酒場の喧嘩など、よくある光景に過ぎない。関わり合いたくもないと言わんばかりに目を閉じる。
しかし——

「ヤンではないか！　無事だったのか」
目を開き、声の主を見やる。
純白の甲冑に身を包んだ騎士だった。連れと思しき老人、そして双子の魔道士らしき子供がそのうしろに控えている。
セシル――。
ひとりの男の名が、閃光のように体中を駆け抜けていった。
同時に心に生じたのは、憎悪。
湧き上がる負の感情に呼応し、立ち上がった。
そうだ。この男だ。私が殺さなければならない相手は――！
誰に命じられたのか。どうでもいい。なぜ、殺す必要があるのか。どうでもいい。大切なのは、セシルを亡き者にすること、それだけだ。そうすれば私は自由になれる。この忌まわしい任務から解放され、妻の待つ祖国へ帰ることができる。
「――捜したぞ」
ヤンの顔に残忍な笑みが浮いた。「バロン王に逆らう犬め！　かかれ！」
その言葉で酒場が一転して戦場となった。
ヤンとともに酒を呑んでいた近衛兵ふたりが抜刀。
一瞬のためらいも見せずに、セシルへ襲いかかる。

ヤンは、そこに加わらなかった。兵士の後方に立ち、冷静に戦況を見極める。
想像どおり、老人と双子はセシルの連れだった。
同時に三人の魔道士も相手にせねばならないのは計算外のことである。
――援軍を呼ぶべきか。
だが、それではこの好機を逃す恐れもあった。
思案するヤンの眼前で、死闘がくり広げられている。
形勢が不利と見た近衛兵たちが、セシルからその背後で身構える老魔道士へ標的を変えた。
その途端、セシルの顔にあせりの表情が浮かぶ。仲間を護ることにばかり集中し、兵士たちへの攻撃がおろそかになっていた。ヤンがそれを見逃すはずもなかった。
――これでは、私の出番はないかもしれぬな。
だが、それも悪くはない。
セシルという男に対する憎悪は依然として胸の奥に渦巻いていたが、今は任務の遂行を優先しなければならない。
と――。
闘いが長期化することを恐れたのか、セシルが動いた。
ふたりの近衛兵が、ほぼ同時に崩れ落ちた。絶命したわけではない。腕に強烈な一撃を受けて剣を手放し、半ば戦意喪失した状態だ。

——なるほど。できることならば、相手の命を奪わず、そして味方の誰も傷つけずに勝利を収めるのを望んでいるというわけか。

甘いな。

このセシルという男は甘すぎる。

闘いが、そして戦がどういうものなのか教えてやろう、この拳で。

ヤンは、腕を押さえてうめく近衛兵に蹴りを叩きこんで前に進み出た。

セシルの顔には戸惑いの表情が浮かんでいる。「ぼくがわからないのか」

「わかるとも。お尋ね者のセシルであろう」

その声とともにヤンは跳躍した。

案の定、セシルに攻撃の意思はないようだ。そこに渾身の力をこめた右の蹴りを入れる。それだけでは終わらなかった。セシルの体を軸足となる左で踏み台にして再び跳躍。その後方に立ち尽くす三人の魔道士たちへ、つぎつぎと襲いかかる。

「ヤン！　ぼくだ、セシルだ」

声を張り上げる純白の騎士に対して、老魔道士が

「こやつは、そなたのことを忘れてしまっているようだぞ」

「記憶喪失⁉」と魔道士の少女。

最後に少年の魔道士が、「ぶっ飛ばしてやれば思い出すんじゃないか」

ヤンは眉をしかめた。
——記憶喪失だと？
笑わせるな。覚えているとも、貴様がお尋ね者であることぐらい。
そこで疑念が生じた。
このセシルが、いったい何をしたというのだろう。
仲間を気遣うだけでなく、敵にも情けを見せる。なぜそんなセシルを、自分はここまで憎まねばならないのか、その理由がわからない。
頭の奥に痛みが走った。
まるで、その答えを見つけられるのを拒むかのように。
ヤンは首を何度も振り、戦意を鈍らせるその考えを否定した。
セシルが何者であっても関係ない。
私は、自分の成すべきことをするだけだ。そして祖国へ帰るのだ。
ヤンは右の拳に力をこめた。それを後方に引き、純白の騎士へと突進した。
しかし、その渾身の一撃はセシルの鼻先をかすめただけだった。
つぎの瞬間、腹部に衝撃を感じ、視界が暗転した。

*

ヤンは、激流の中にいた。
不規則に押し寄せる波に翻弄されながらも、ただ一点を目指し、泳ぐ。
——リディア！
疲弊した召喚士の少女は、先刻、荒れ狂う海面から姿を消していた。
だが、まだ間に合う。
行く手には、巨大な渦。そしてその中心には海竜リヴァイアサン。それでもヤンの勇気は萎えることはなかった。ただリディアを助けたい。その想いが背中を強く押す。
鼻から口から入りこむ悪意に満ちた水が、気道を塞ぐ。
腕が足が鉛のように重くなり、流れに逆らうことができなくなる。
そこまでがヤンの限界だった。
あのような幼子が、なぜこのような目に遭わねばならぬのだ。
迫り来る自分の死など、一切考えなかった。
ひたすら己の無力を呪うばかり。
周囲が闇に閉ざされ、そして——。
目覚めたのは寝台の上だった。弾かれたように半身を起こす。

「――ヤン、気がついたか」
眩い純白の甲冑に身を固めたセシルの姿があった。
そのセシルが微笑む。「暗黒騎士を捨てたんだ」
と、そこでヤンは気づいた。「リディアは――！」
沈黙が、すべてを語っていた。
リディアだけではない。ギルバートも行方がわからなくなっていた。
ヤンは、くちびるを強く噛んだ。
「あまり己を責めるではないぞ」魔道士と思しき老人がセシルの横に立った。
「この御仁は？」
「賢者テラ。娘さんをゴルベーザに」
それからヤンは、双子の魔道士パロムとポロムを紹介された。
「ところで、ヤン。どうして君がバロンの近衛兵と？」とセシル。
ヤンは首を振り、うなだれた。「面目ない。私は、セシル殿――そなたへの憎しみに突き動かされて動いていたようだ。なぜ、そうなったのかは見当もつかない」
「ゴルベーザの仕業であろうな」テラが言った。
「しかし、これで戦況は変わった」セシルがヤンの肩に手を置く。「ヤン、君がいてくれれば心強い。どうか、手を貸してほしい」

ヤンは顔を上げると、頷いた。「バロンへ攻めこむおつもりか」
「バロン城には、シドが囚われている」
「シド——?」
「飛空艇技師だ。彼の助力があれば、奴らから飛空艇を奪うことができるかもしれない」
「なるほど」
「しかしな——」テラが思案顔になった。「さすがに正面からぶつかるわけにはゆかぬであろう。どうやって城へ潜りこむのか、何か策はあるのか」
セシルが答えず、顔を伏せた。答えられなかったのだろう。
と——。
ヤンは、そこで気づいた。
先刻からずっと、腕が痺れるほど握りしめている右の拳に。
指をゆっくりと開く。
そこには、古びた鍵があった。
なぜ、自分がこのようなものを持っているのだろうか。
わからなかった。
その部分の記憶がすっぽりと抜け落ちている。
それにセシルが気づいた。「これは、まさか——」

「セシル殿、この鍵は、いったい……」
「君はバロンに、相当信用されていたようだ」聖騎士の顔に笑みが浮かぶ。
ヤンは、その意味が理解できず、首をひねるばかりだった。しかし、
「行こう、道は開けた」
セシルの自信に満ちたその言葉に、不安は一瞬にして消え去った。

3

そこは、ポロムにとってある種の憧れの地でもあった。
物心つく前に両親を亡くしたポロムとパロムは、長老に引き取られて育った。以来、ミシディアから出たことがない彼女は、寝物語に聞かされる大国バロンに想いを馳せ、いつの日か必ずかの地を訪れようと心に決めていたのだった。
産業の要衝。行き交う人々の群れ。酒場で流れる異国の調べ。着飾る貴婦人たち。
――セシルの手助けがしたい。
その気持ちに嘘や偽りはない。けれども、その想いだけに突き動かされ、この旅に同行したのかと問われれば、ポロムは言葉に詰まってしまっただろう。辺境の村ミシディアとは真逆にあるその都への憧憬は、もはや抑えつけることができないほどに膨らんでいたのだから。

ポロムが祈りの塔へ上ることを日課としていたのも、祈りを捧げるためだけではなかった。
そこから望む美しい海が大好きだった。じっと見つめていると、遠く水平線の彼方に、憧れの地バロンが見えるような気がしたのだ。
しかし――
セシルらとともに訪れたバロンの町は、ポロムの期待を大きく裏切った。
人々に笑顔はなく、沈黙が美徳だと言わんばかりに口をつぐんでいる。活況を呈しているのは酒場だけで、だがそれも羽目をはずした兵士の騒ぎ立てる声ばかり。
ゴルベーザの落とした陰は、想像以上のものだったようだ。
それは、バロン城も同様だった。
否、さらにひどい状況にある、と言えるだろう。
一行はヤンの持っていた鍵で、今は使われていない地下水路へ入った。
そこから城の堀に抜け、城内への潜入に成功した。
「――何だよ、誰もいないじゃん」
パロムの言葉どおりだった。
兵士たちの襲撃を警戒していたが、その姿はどこにも見られなかった。
まるで棄てられた古城へ足を踏み入れたような錯覚に陥る。
「こっちだな」とパロム。

ポロムはそれに頷き、従った。
「待ってくれ。まずはシドを捜さなくてはならない。それに、どこに兵士たちが——」
慌てたセシルが声をかけてきたが、ポロムは
「心配いらないって」
と振り返りもせず、先を急いだ。
初めて訪れたバロン城を、なぜ案内もなしに進んでゆけるのか。セシルは、それを疑問に感じているのだろう。ポロムは、あえてその疑問に答えようとしなかった。
言っても理解してもらえないと思ったからだ。
先刻の〝魔の道(デビルロード)〟で《幻視》をしただなんて——。
パロムに先導される形で、一行はバロンの城内を進む。
「セシル殿——」
聞こえてきたその声で、ポロムたちは足を止めた。
「よくぞご無事で戻られましたな」
現れたのは、軍服に身を包んだ男だった。
そのきちんとした身なり、胸に下げた勲章から階級は低くないと思われた。
「ベイガン」セシルが男の前に立った。「まさか、君も——」
「私が、どうかしましたか？」

「ゴルベーザに操られているのかと」
「まさか」ベイガンと呼ばれた男が笑った。「こう見えても、私は近衛兵をまとめ上げている身。何があろうともバロンへの忠誠心を曲げるつもりはありませんよ」
「そうか。それを聞いて安心したよ」
「ところで――」と近衛兵長のベイガンが、セシルの背後に控える三人に目をやった。
それに気づいたセシルは、「ぼくとともにゴルベーザと闘ってくれる仲間だ。賢者テラ、そしてミシディアの双子の魔道士パロムとポロム」仲間を紹介する。
ベイガンが軽く会釈してきたが、パロムとポロムはただ相手を見つめるだけだった。
「ところで、ベイガン。ぼくたちはシドを捜している」
「――シド殿を?」
「ああ、恐らくどこかに囚われていると思うのだが……」
「じつは、私も彼を救出しようと近衛兵を率い、ここへやって来たのです。しかし、乱心した兵士たちの襲撃に遭い、生き残ったのは私だけという有り様」
「そうだったのか。ならば、ともに行こう。君がいてくれれば心強い」
「では、こちらへ」
ベイガンが一行を先導しようと背を向け、歩きはじめた。
しかし、パロムとポロムは動かなかった。

「パロム」と短く耳打ちする。
双子の弟は、「ああ」と短く応えた。
それにセシルが気づく。「──どうしたんだ」
「臭うんだ」とパロム。
「そうね、魔物の臭いぷんぷんと」とポロム。
振り返ったベイガンが、腰の剣の柄に手を添え、周囲を見まわした。「どこに──」
そんな近衛兵長に、パロムが吐き捨てるに言った。「臭いんだよ」
──間違いない。
ポロムは、確信した。
〝魔の道（デビルロード）〟で目にした《幻視》は幻などではなかった。
きっとポロムも、あのとき自分と同じ光景を見ていたのだろう。
「お芝居をするなら、もう少し上手にやっていただきたいものですわ」
ポロムの言葉で、ようやくセシルも気づいたようだった。
「ベイガン……やはり君もゴルベーザに──」
近衛兵長は、両手を広げると「やめていただきたいですな。そのような言い方は」と言って一行に背を向けた。「あのお方は、素晴らしいものを私に与えてくださったのですよ」囁っているのだろう、肩が小さく震えている。「こんなに素敵な力をね」

ポロムは息を呑んだ。
振り返ったベイガンの皮膚が毒々しい紫に変色していた。
と――。
ごきり、という音がした。関節がはずれるときの、あの音だ。
ベイガンの顔に浮かぶのは、歓喜とも苦痛とも取れる表情だった。
その顔が伏せられる。否、そうではなかった。肩幅が広がり、背が隆起したため、そのように見えるのだ。同時に、骨が軋むような音。
ポロムたちが見つめる中、ベイガンの骨格が凄まじい勢いで変容していた。
顔がまるで不可視の手でこねられる粘土のように形を変える。姿なき芸術家が創り出したのは、蜥蜴を思わせる頭部だった。くちびるから飛び出す舌の先端がふたつに割れている。こうして、ひとりの人間が一匹の爬虫類へと変貌した。
「ゴルベーザ様は、私にこの肉体を授けてくださった。セシル、もう貴様ら《赤き翼》などに遅れを取ることはない。近衛兵団こそが、このバロンを支えてゆくのだ」
先端部が蛇の頭部となった両腕を掲げ、襲いかかってくる。
セシルが動いた。
眩い光をまとった刃を一閃。突き出された腕を一本、断ち切る。
だが、ベイガンの顔に浮いたのは笑み。

その理由が、すぐに定かになる。斬り落とされた腕が再生されたのだ。
そこに詠唱をつづけていたテラの〝氷塊(ブリザガ)〟が発動した。
ベイガンが苦悶を意味する奇声を発する。
そこにパロムも〝凍牙(ブリザガ)〟で追い討ちをかけようとした。
「――駄目！」
ポロムは叫んだが、間に合わなかった。
ベイガンの体を、あるかなしかの光の膜が覆っている。
そこに〝凍牙(ブリザガ)〟が着弾。
しかし氷のつぶてはベイガンを包みこむことなく消失した。
「やべえ！」とパロム。
ようやく気づいたようだ。
慌てて、つぎの瞬間に訪れるであろう衝撃から身を護ろうと頭を抱える。
一瞬ののちに〝凍牙(ブリザガ)〟がポロムの小さな体を襲った。
「くっ。〝反射(リフレク)〟を使いおるか」テラが舌打ちした。
自分に向けられた魔法を術者へ転移させる――まさに〝魔道士殺し〟だった。
勝機と見たのか、ベイガンが顔を奇妙に歪めた。嗤っているようだ。そのままパロムの息の根を止めようと突進する。

「――セシルさん」
崩れ落ちる弟を支えながら、ポロムは涙声で叫んだ。
光の疾さでセシルが動く。
双子の魔道士をかばうように立ちはだかり、ベイガンの一撃を受け止める。
「ヤン！」
「応！」
弁髪の拳闘士が吠え、渾身の力をこめた一撃をくり出す。
つづいてセシルが剣を腰にため、床を蹴る。
突き出した切っ先が、怯んだ魔物の腹部を貫いた。
ベイガンが白目を剥き、その場にどうと倒れた。

4

「みんな、大丈夫か」
振り返ったセシルが、三人の魔道士に声をかける。
「当たり前だろ！」パロムは起き上がると、「あれしきのことで、このパロム様がやられるとでも思ってるのかよ」と強がった。

そんな弟の頭を、ポロムが拳で小突く。「まったく、なに言ってるのよ。あの魔法は、あんたが唱えたものでしょ。それを〝あれしき〟ですますつもり？」
テラが笑った。「つまり、まだまだ修行が足りぬというわけだな」
「ちぇ」パロムは口を尖らせた。
が、それは一瞬のこと。すぐに真顔に戻ると、前方へ視線を転じた。
気づいたセシルが言う。「この先は――」
パロムは頷く。「ああ、わかってるよ」
「待ってくれ」
セシルが言っても、魔道士の少年は耳を貸さなかった。
正面の小部屋――控えの間へ入ると、その奥に豪奢な意匠の施された扉が目に入った。
「――この先に、陛下がおいでだ」と追いついたセシルが説明する。
パロムは、それに何の言葉も返さなかった。ただ、
ここか――。
と思っただけだった。ふと視線を感じ、左手を見やる。ポロムと目が合った。
ふたりは同時に頷いた。
覚悟は決まった。「あんちゃん、行こう」
五人は、扉を押し開け、玉座の間へと足を踏み入れた。

玉座にバロン王の姿があった。これも《幻視》したとおりである。
「セシル、無事であったか。ずいぶんと逞しくなったな」
「——陛下」王の御前であるにも関わらず、セシルは頭を垂れることもなく、また片膝を床につくこともなかった。ただ冷ややかな目で見つめるのみ。
「そうか、暗黒騎士を捨てたか。だがな、いかんぞ……聖騎士(パラディン)は」
セシルは剣を抜き放つと、正眼の構えを取った。「バロン！」
「くかかかか、誰だ、それは」バロンと呼ばれた老人が、ゆっくりと立ち上がる。「おお、そうか。思い出したぞ。この国は絶対に渡さぬ、などと言っておった愚かな人間か。俺は、そいつに成りすましていたんだっけなぁ、ひゃっはっはっはっはっは！」
「貴様、まさか陛下を——」
「会いたいか？　それほどまでに王に会いたいか？　ならば、会わせてやるぞ。奴も、きっと地獄で待ちわびているであろうからなぁ」
つぎの瞬間、バロン王の姿が変貌を遂げた。
青白い肌をした、四足の魔物がそこにいた。背には甲羅のようなものが貼りついている。亀と人間とを掛け合わせたような、悪夢じみた容姿である。
「我が名は、水のカイナッツォ。俺はスカルミリョーネのような無様な真似はせぬ。さあ、苦しみながら死ぬがよい！」

闘いの火蓋が切って落とされても、パロムには怯えも緊張もなかった。
すでにすべてを見て、すべてを知っていたからだ。
――そう、おいらとポロムは、その先を《幻視》してる。
おいらの〝凍牙（ブリザラ）〟を食らったときに、こいつは動揺してやがった。
どこからか水を呼び集め、それでみんなを呑みこもうとしたときのことも覚えている。爺ちゃんが〝轟雷（サンダガ）〟で奴の息の根を止めたんだな。
すべてが思いどおりに進む。
まるで自分が賢者にでもなったかのように思えてくるほどだ。
水のカイナッツォなど、パロムたちの敵ではなかった。
しかし同時に、その勝利には喜びもない。
パロムとポロム――ふたりの運命の時が、刻一刻と迫りつつあるからだ。

5

「――この偽のバロン王めが！」
シドの怒りは頂点に達していた。
あの日、ゴルベーザと名乗る男がこのバロンへ現れたことですべてが一変した。

いかなる術を使ったのかは定かではないが、王が、そして兵士たちがつぎつぎと幻惑され、ゴルベーザの配下となってしまったのだった。
シドは、王の正気を取り戻すべく様々な手を尽くした。
しかし、すべては徒労に終わる。
そして気づいた。いつの間にか、王が偽者とすり替わっていたことに。
新型の飛空艇の開発に従事していたシドにも、ゴルベーザの魔手は向けられた。それを強靭な精神力で跳ねのけ、反発した結果、反逆罪の汚名を着せられ、地下牢へ閉じこめられることになってしまった。そこで待ち受けていたのは、過酷な拷問の日々。
『吐け。新型の飛空艇を、いったいどこへ隠したのだ——』
だがシドは、決して口を割らなかった。自分の開発した飛空艇が戦や略奪行為に使われることに我慢がならなかったからである。
「よくも、あんなかび臭いところに閉じこめおって！」
シドは、手はじめに偽のバロン王をぶちのめしてやるつもりだった。
そのために、地下牢から脱走するや、真っ先に玉座の間を目指したのだ。
ところが、そこに王はいなかった。
代わりに床に伏した奇怪な化け物、そして四名の見知らぬ者たちの姿がある。
この化け物が、バロン王に成りすましていたのだろうか。

「――シド！」
そう声をかけられて、ようやく気づいた。
「セシルか？」目をすがめ、純白の鎧に身を包んだ男を見つめる。
「ああ、暗黒騎士を捨てたんだ」
言われて納得した。確かに、この声、顔はセシルのものだ。「生きとったのか！　心配かけおって」それから周囲を見まわす。「ローザは、どうした。お前を追いかけて、ミストの村へ向かうと言っておったのだが……」
セシルは、すぐには答えなかった。
シドの心に暗い影が差した。だが、黙したまま答えを待った。
ややあってからセシルが口を開く。
「ゴルベーザに囚われてしまったんだ」言いたくないことを言うときの口調だった。
シドは奥歯を噛んだ。我が子のように可愛がってきたローザが、あろうことかゴルベーザの手に落ちてしまったというのである。
その雰囲気を察したのか、セシルが笑顔となり、「それにしても、よく無事で」
「ゴルベーザとやらの使うまやかしなど、わしには通用せぬからな。おお、そうだ。お前のところのふたりも、なかなかよくやってくれた」
「ふたり――？」

シドは、入ってきた扉を振り返る。
そこには《赤き翼》の隊員ふたりが立っていた。
「ビッグス、ウェッジ！」セシルが駆け寄る。
「厳重な警備を突破して、わしの囚われている牢へやってきてくれたのだ。若いのに見上げた根性の持ち主だな」
シドの言葉に、ビッグスが照れたように頭をかいた。「私が駆けつけたとき、見張りの兵士たちが突然、意識を失ったように倒れてしまったのです」
「――陛下に化けていたカイナッツォを倒したことで、術が解けたのか」
「ええ。ですから、私たちは――」
「いや、本当によくやってくれた」セシルは、ビッグスとウェッジの肩を抱いた。「君たちふたりは《赤き翼》の誇りだ」
それでもビッグスの顔には浮かない表情が張りついている。「しかし、ローザ様が囚われの身になったと聞きました。それにカイン様も――」
「ああ、わかっている」そこでセシルがシドを振り返る。「奴らと対等に闘うには、飛空艇が必要なんだ。手配することはできるか」
「誰に向かってものを言っとるんじゃ？　わしは飛空艇技師のシドじゃぞ！　こんなときのために、ちゃーんと新型飛空艇を準備しとるわい！」

「ならば、さっさとそこへ案内してもらおうか」
　言ったのは、老魔道士だった。
「なんじゃ、この爺は」シドが語気を強める。
「ふん。お主に言われたくないわい」
「わしは、まだまだ若いぞ！」
　言い合うふたりの間に、魔道士と思しき少女が割って入った。「あなたがシド様ですね」と微笑んだあとで老魔道士を見やり、「こちらはテラ様。偉大な賢者様ですわ」弁髪の男へ視線を転じ、「あちらがファブールの僧兵長ヤン様」それから深々と頭を下げた。「私は、ミシディアの白魔道士の見習い、ポロムと申します」
「ったく、爺同士が年甲斐もなく！」
　ポロムと名乗った少女が、顔を上げ、声に主を睨んだ。「申し訳ありません。あの口の悪いのが、双子のパロム。黒魔道士の見習いです」
「見習いじゃねーよ！　おいらはミシディアの天才魔道士だぜ！」
　双子の姉が何か言いかけたが、それを制するようにヤンと呼ばれた弁髪の男がシドの前に一歩、進み出た。「お初にお目にかかります。ヤンと申します」
「ほほう、お主はどうやら礼儀をわきまえているようだな」
「しかしながら、テラ様のおっしゃるように、我々には時間がありません」

セシルが頷いた。「ゴルベーザは、最後のクリスタル――トロイアの〝土のクリスタル〟を狙っている。何としても、それを阻止しなければならない」
「わかった」シドは力強く頷いた。
と、そこでセシルが、ビッグスとウェッジに向かい、
「お前たちも一緒に――」
だが、ふたりは首を振った。
「私たちは、城に残ります」
「どうして――」
「兵士たちにかけられた術が解けたのならば、これはバロンを立て直す好機。もう二度とゴルベーザに城を明け渡さぬよう、万全の体制を取る必要があると思われます」
しばらく思案していたセシルだったが、
「わかった。ぼくたちはトロイアへ向かう。お前たちは、みんなを頼む」
「さあ、こっちじゃ」
シドは一行を先導し、玉座の間をあとにした。

6

玉座の間を出て、控えの間へ足を踏み入れたときだった。
一行の背後で、重々しい音を立てて扉が閉まった。
パロムは、反射的にポロムと顔を見合わせ、
──やっぱり、来たか。
ヤンが扉に両手を添え、力いっぱい押すが、開く気配はなかった。
反対側の扉にシドが駆け寄る。こちらも同じようにびくともしない。
「閉じこめられてしまったか」テラが呻いた。
「ビッグス、聞こえるか」セシルは、玉座の間へとつづく扉の前で《赤き翼》の隊員に呼びかける。「この扉を開けることができるか」
すぐにビッグスからの返事があった。「やってみます」
しばらく男の唸る声が聞こえてきたかと思うと、今度は扉を剣のようなもので打ちつける音が響き渡った。そして、
「駄目です。開きません」申し訳なさそうにビッグスが言った。
「しかし、これはどうしたことじゃ」シドが首をひねる。「このようなからくりがあるなど、わしは一度たりとも聞いた試しがない」

その問いに答えられる者はいなかった、パロムとポロムを除いて。
「あいつの——カイナッツォとかいう奴の仕業だよ」パロムは言った。
セシルが眉をひそめる。「しかし、奴はこの手で——」
大気が青みを帯びたのは、そのときだった。
「くかかかか、いかにも！」密室と化した控えの間に、囁くような声が生じた。「だが、俺は寂しがり屋でなぁ。死んでも死に切れぬのだよ、くかかかか」
「ビッグス、カイナッツォは——そこにいる化け物は？」
「死体が玉座の前に転がっています」と扉の向こうからの返答。
「とどめを刺せ、急げ！」
「はい」と応じる声。
ややあってからビッグス言った。「魔物は死んだままです。いったい……」
「——そうか」部下の問いに答えることなくセシルは沈黙した。
再び、カイナッツォの声が聞こえてくる。「悲観しているな？　絶望しておるな？　くかかか。だが、まだ生ぬるい。貴様らには、さらなる地獄を味わってもらうぞ」
床が小刻みに振動する。
「先に地獄で待ってるぞお。へぇっへへへへ」
「壁が——！」テラが叫んだ。

その言葉どおり、両側の壁が部屋の中央に向かって動きはじめた。
このままでは押し潰され、圧死することになる。
一行は迫り来る壁を押し、懸命に抵抗をつづけるが、その動きを止めることはできない。
「やっぱり駄目だな」
パロムがお手上げという感じで壁に背中を向ける。
ポロムも、それに倣う。
「あきらめてはならん！」シドが叫ぶ。
ポロムが微笑んだ。「あきらめてなんかいませんわ」
そんな双子の態度に、セシルが何か感じ取ったようだった。
「パロム、ポロム。いったい――」
「あんちゃん、短い間だったけどありがとよ」
「お兄様ができたみたいで、とても楽しかったですわ」
ようやくテラも気づいた。「お前たち、何を！」
「あんたを、こんなところで死なせやしない」
「テラ様、セシルさんをどうかお願いしますわ」
双子は向き合うと、頷く。
「行くぞ、ポロム」

「うん」
セシルが絶叫した。「やめろ――！」
ミシディアの小さな魔道士たちは、呪文の詠唱をはじめる。
「もしや――」とテラ。その韻律に心当たりがあるようだった。
双子は、それぞれ左右の壁に向かって両手をつく。
そこで魔法が発動した。
ふたりの肌からは温もりが失せ、瞳から生気が消えた。
――〝石化(ブレイク)〟の呪文だった。
「壁が……止まった」ヤンがためていた息を大きく吐いた。
彫像と化した双子が、迫り来る壁を押しとどめているのだ。
「早まったことをしおって」
言うと、テラは呪文を詠唱する。
しかし――
賢者の期待に反し、双子の体には何の変化も訪れなかった。
「テラ、どうしてふたりの〝石化(ブレイク)〟を解くことが――」
セシルは、時に見放されてしまったかのような双子に触れた。
「誰に似たのか、まったく頑固者だな」テラは頭を振った。「このふたりは、己の意思で石



になってしまっておる。いかに賢者と呼ばれるわしでも解くことはできぬ」
「そんな——」
ヤンが壁に拳を打ちつけた。「このような幼子が——」
「馬鹿者めが。死ぬのは、この老いぼれでよかっただろうに……」テラは、溢れる涙を腕でぬぐった。「この無念、必ずやわしが晴らす」
「とむらい合戦じゃ！」とシド。
——パロムとポロムが聞き取れたのは、そこまでだった。
石化した肉体が、視覚につづいて聴覚まで奪い去っていった。
何も見えず、何も感じず、そして何も聞こえない。
闇に支配された精神世界の中を、意識だけが漂っている。
（——うまくいったな）
パロムは、独りごちた。
（本当ね）そこにポロムの意識が割りこんできた。
心が通じ合っている双子だからこそ、こうした会話ができるのだった。
（それにしても——）ポロムは石になってしまったのに、どこか楽しげである。（まさか、あんたがこんな手を考えつくとは思わなかったわ）
（文句あるのか）

（何よ、ほめてるのに）

（――――）

（私ね、あんたがこのことを《幻視》してないんじゃないかって心配しちゃったの）

（そう思ってたのに、あんちゃんたちを引き止めなかったのかよ）

（だって――）

（まったく……おいらがいなかったら大惨事になってたな）

（ごめんね）

（ま、うまくいったんだからいいけどな）

（ねえ、パロム――）

（ん？　なんだよ）

（セシルさんたち、ゴルベーザに勝てるかしら）

（心配なのか）

（……うん）

（こればっかりは、おいらにもわかんねえな。けどさ、運命なんてちょっとしたことで変わっちゃうこともあるから。だろ？）

ポロムは答えなかった。

（おい、聞こえてるのか？）

やはり返事はない。
(そうか、寝ちまったか……)
パロムも、睡魔の誘惑に抗うことができなくなりつつあった。
(あんちゃん、あとは頼んだぜ――)
無意識が、ゆっくりと意識を呑みこもうとしていた。
思考が完全に停止する。
そして、すべてが完全に闇に塗り潰された。

7

カインは、薄闇に浮かび上がる漆黒の背中を睨みつけていた。
「――ほう。バロンが落ちたか」
それに竜騎士は頷いた。
ゴルベーザが、ゆっくりと振り返る。
相変わらず闇色の面頬を下ろしているため、表情を窺い知ることができない。
「だが、それがどうした」
何かをおもしろがるような口調だった。

それが、カインには気に食わなかった。「シドが開発を進めていた新型の飛空艇が奴らの手に渡れば、脅威となる」

「トロイアの〝土のクリスタル〟を奪う障害になるとでも?」

「あの国は、森と水の都と呼ばれている」

「すでに承知している。これまでに一度も戦を経験していないということもな。そのような国を滅ぼすのは――」

「容易いとでも思っているのか」

「《赤き翼》を持ってしても落とせぬか」

カインは頷いた。

トロイアは、バロンの北西に位置する国家である。

代々、八人の女性神官によって統治されていることでも知られていた。

軍隊こそ組織されていないが、白魔法を修めた女性兵士が城の警護に当たっている。

彼女たちの白魔法の習熟度は非常に高く、あのミシディアにも匹敵するとされるほど。今ではトロイアこそが白魔法の総本山と見る向きも少なくはない。

その白魔法が、戦ではこの上ない脅威となる。

飛空艇で砲撃をつづけようとも、〝治癒(ケアル)〟や〝療光(ケアルラ)〟といった魔法で対抗されては、城を護る者たちに壊滅的な打撃を与えるのは難しい。

また周囲を広大な森に囲まれていることもあり、トロイアの近辺に飛空艇を着陸させることが困難である。仮に森の外へ飛空艇を降ろし白兵戦を仕掛けたとしても、城へたどり着く前に兵士たちが疲弊してしまう。さらに白魔法には〝呪縛（ホールド）〟や〝沈黙（サイレス）〟〝混乱（コンフュ）〟といったやっかいな呪文の数々が存在する。

トロイアは、過去に戦をしたことはない。それは彼女たちが戦を拒んだのではなく、トロイアを恐れる他国がそうなることを意図的に避けてきたというべきなのだ。

「――なるほど。なかなか興味深い」

カインの話に聞き入っていたゴルベーザが嗤った。「そこに新型飛空艇が加わるとなれば、我らが敗北する可能性もあるか」

「十分、考えられる結果だ」

「それは困ったことだな」そう言いながらも、ゴルベーザはまったくそのような素振りを見せなかった。むしろこの状況を楽しんでいるとも見受けられる。

しばしの沈黙。

それでカインは、理解した。

――こいつめ、俺を試しているというわけか。

ゴルベーザを睨むときの視線で見つめる。「――いいだろう」

「ほう、何か策でもあるというのか」

「幸いにしてローザは、こちらの手中にある」

言ってからカインは、ゴルベーザの背後――薄闇の奥へ見やる。

そこには、うしろ手で縛られたローザの姿があった。

「ローザがいる限り、セシルは強攻策には出られない」

「カイン……まさか――」竜騎士の言わんとしていることを女が理解したようだ。

カインはつづける。「ローザと引き換えに、トロイアから〝土のクリスタル〟を奪って来いと命じれば、奴は断ることなどできないわけだ」

「――おもしろいではないか」ゴルベーザが嗤った。「そのときに、奴を葬り去る機会も生まれるであろう」

「そんな――」ローザが涙を隠すようにして顔を伏せた。

カインは、ふたりに背を向ける。

「見せてやろう。俺のほうがセシルよりも上だということを」

8

凪が止んでいた。

誰もが無言のまま、彼方の地平を見つめている。

遠くに霞む広大な森林の向こうに、森と水の都トロイアがあるはずだった。
——飛空艇エンタープライズ号の甲板の上である。
バロン城の控えの間に閉じこめられていた一行は、長い時間をかけてテラの魔法とヤンの拳、そしてセシルの剣により、何とか扉の破壊に成功した。石化したパロムとポロムも運び出そうとしたが、彼らはまるで根が生えたかのように動かない。仕方なく、必ずここへ戻ると誓いを立て、シドに導かれるまま飛空艇の格納庫へ急いだのだった。
そして今——
エンタープライズ号と命名された新型飛空艇は、バロンの上空で一定の高度を保ったまま、針路を決めかねているかのようにただ滞空していた。
やるべきことは、わかっている。
そして、自分たちに時間が残されていないことも理解している。
それでも四人は、ただ甲板上で佇み、地平線を眺めているだけだった。
ヤンは、両の拳を強く握りしめていた。
先刻の光景が、まざまざと脳裏に蘇ってくる。
あのとき——
格納庫を離陸し、トロイアを目指そうとした矢先に、エンタープライズ号の前に一艇の《赤き翼》が接近してきたのだった。

交戦を覚悟したが、どうも様子がおかしい。
ゆっくりと接近する《赤き翼》が、白旗を掲げていたのである。
やがて《赤き翼》は、エンタープライズ号に接舷。指揮を執る男が姿を現した。
セシルが叫んだ。「——カイン！」
「これは……いったい、どういうことじゃ？」
シドは状況が呑みこめない様子で、セシルとカインを交互に見やる。
「カインは、ゴルベーザに——」
セシルの言葉にシドは目を丸くする。「操られとるのか！」
「ローザは無事なのか」とセシル。
カインは嗤った。「心配か」
「もちろんだ」
「ならば、返してやろう」
意外なカインの言葉に、四人は言葉を失った。
「どうした、ローザを取り戻したいのではないのか」
「理由がわからない」
「——理由？」カインのくちびるが、笑みの形に吊り上った。「別に理由など必要なかろう。俺とお前の仲だ」

「ふざけるな！」
「ならば、こちらの条件を提示しよう。クリスタルだ。トロイアへ行き、〝土のクリスタル〟を手に入れて来い。そうすればローザを返してやろう」
セシルは、それには答えず、ただ顔を伏せるだけだった。
「何と卑劣な」ヤンは奥歯を強く噛んだ。
ヤンは、これまでの経緯をセシル本人の口から聞いている。
バロン王に命じられるままに、ミシディアからクリスタルを強奪したことも――。
セシルは今、それと同じことを親友であった男に強いられているのである。
「話は、それだけだ」
言うとカインは一行に背を向けた。
「一日だけ待ってやる。それまでにクリスタルを手に入れることだ」
そう言い残すと、《赤き翼》は飛び去っていった。
――あれからヤンたちは、ずっと甲板に立ち尽くしていた。
クリスタルは、その国の象徴的な存在。
トロイアとて例外ではあるまい。事情を話したところで、クリスタルを快く差し出してくれるはずなどないのだ。とすると、手段はひとつしか残されていない。
セシルは今、重大な選択を迫られている。



最愛の女性ローザを助け出すため、血を流すか。
それとも正義の名の下に、あくまでもゴルベーザと闘うか。
ヤンは目を閉じ、セシルの境遇に自分を当てはめてみた。
身ごもった妻を人質に取られ、クリスタルを要求されたとしたら、私はどのような決断を下すことになるのだろうか——。
妻は、シーラはきっと、こう言うだろう。
「自分を曲げてみな。そうなったらあたしは、一生あんたを許さないよ」
誰だって死は怖い。しかし、たくさんの犠牲の上にしか自分が生きられないと知ったら、迷わず死を選ぶだろう。シーラは、そういう女性なのだ。
それでも——
息子か、あるいは娘なのかはわからないが、やがて生まれてくるであろう我が子をこの手に抱くことができない悲しみに、果たして自分は耐えられるのだろうか。
考えても結論は出ない。
ヤンは、ゆっくりと目を開いた。あの森の向こうに、トロイアはある。
カインが最後に残した言葉が、胸をえぐる。
——一日だけ待ってやる。
早く行動を起こさねば、手遅れになってしまう。

だが――セシルは、どういった選択をするのだろう。
「トロイアへ向かう」ふいにセシルが言った。
シドは答えず、それでも舵を握った。
甲板を振動させ、エンタープライズ号が動きはじめる。
針路は北西。
ヤンは、このときほど飛空艇の存在を呪わしく思ったことはない。
鳥よりも速く、風をも追い越し、飛行する。
眼下を流れてゆくのは、密生した無数の葉の群れ。
永遠にこの瞬間がつづけば、というヤンのささやかな願いは天には届かなかった。
やがて唐突に森は途切れ、トロイア城と、その城下町が見えてきた。
城の南に、かろうじて飛空艇を降ろすことのできそうな場所を見つけると、シドはやはり無言のまま、エンタープライズ号を着陸させた。
セシルを先頭に、一行が地上へ降り立つ。
雲ひとつない青空を背景に、荘厳なトロイア城の威容が浮かび上がった。
唐突にセシルが、腰に帯びていた剣を抜き放った。
ヤンの体に緊張が走る。力をこめた拳が、ぶるぶると震える。
「セシル殿、どうするおつもりか」低い声で問うた。

返答次第では、この拳を振るわねばならない。セシルに対して。
――と。
悩める聖騎士は手にして剣を頭上に掲げ、大地に突き刺した。
「セシル殿――」
「ぼくは、トロイアと争うつもりなどない」
一行を振り返り、つづける。「国を治めるという八人の神官たちに、すべてを話してみようと思っている。できる限りの誠意を持って」
セシルは、自分の剣をここに残し、トロイア城を訪れるつもりなのだ。
「しかし、もしもこちらの願いが聞き入れられなかったら――?」
訊いてから、ヤンは自分の言葉の残酷さに気づいた。
だが、後悔はない。問わずにはいられない問題なのだ。
ややあってから、セシルが呟いた。
「ぼくは、信じている」まるで自分に言い聞かせるかのような口調だった。
――信じる?
セシルは、誰を信じるのか、何を信じるのかは明言しなかった。
トロイアが快くクリスタルを差し出してくれることを?
それとも親友カインの良心を?

ヤンには、わからなかった。
が、それでも構わなかった。拳の震えが、いつの間にか止まっていた。
——私も、あなたを信じよう。
信じて、信じ抜いて、どこまでもついてゆこう。ヤンは、そう心に決めた。

ファイナルファンタジーⅣ《下巻》につづく

手塚（てづか）　一郎（いちろう）　Tezuka　Ichiro

1966年4月11日生まれ。AB型。……と書くと、必ず二重人格ですか？　と訊かれます。
残念、人格はたったふたつではありません。ちなみに、この小説は三番目の人格が書きました。
三郎は、なかなかの働き者です。スタジオベントスタッフ所属。

GAME NOVELS
ファイナルファンタジーIV　上巻

2009年1月15日　初版第1刷発行

原　作◆ＤＳソフト「ファイナルファンタジーIV」

著　者◆手塚　一郎

発行人◆田口浩司

発行所◆株式会社スクウェア・エニックス
〒151-8544
東京都渋谷区代々木3-22-7
新宿文化クイントビル3階
営　業 03(5333)0832
書籍編集 03(5333)0879

印刷所◆加藤製版印刷株式会社

乱丁・落丁はお取り替え致します。
大変お手数ですが、購入された書店名と不具合箇所を明記して
小社出版業務部宛にお送り下さい。
送料は小社負担でお取り替え致します。
但し、古書店でご購入されたものについてはお取り替えに応じかねます。
定価はカバーに表示してあります。

ISBN978-4-7575-2458-3　C0293

ISBN978-4-7575-2458-3

C0293 ¥933E

9784757524583

1920293009339

定価：本体933円＋税

SQUARE ENIX.

